



## プロローグ

---

少女が一人、走っていた。

ハンドステッキと薄手のマント。魔法使い風の少女が広野を疾走していた。

空色のセミロングを真後ろへなびかせ、とにかく少女は必死になって走っていた。

遠くにシュラインの町の関所が見える。あそこまで行けば何とかなる。

少女の後方に、土煙がひとつ上がっていた。

「ヘレネちゃん好っきじゃあああああ！」

「いやああああ！ こないでええええ！」

土煙から聞こえる遠吠えに、ヘレネと呼ばれた少女は泣きそうな声で叫んだ。

ヘレネは関所をくぐり抜けた。通行証を求める門番へ一喝する。

「扉を閉めて！ 早く！」

少女の迫力に、門番はあわてて従った。扉が閉まるとほぼ同時に、

どっどおおおん！

轟音とともに、激しい地響きがした。石の扉なので耐えきれたが、木製だったら破壊されていただろう。

「ヘレネちゃん、なんで逃げるのお？ 俺はこんなにも君のことが好きなのに」

扉の向こうから響くだみ声に、ヘレネは息も荒く叫び返した。

「ええい、うっとうしい！ あなたは好みじゃないのよ！」

「うおおおお！ 俺は悲しいぞおおおおお！」

どンドンみしみしと、扉がきしむ。ヘレネは顔を引きつらせ、素早く背を向ける。

「これ通行証ね。門番さん、あの男は絶対に中に入れちゃダメよ！ それじゃ！」

ヘレネは全力で門から去っていった。

門の向こうから響く、醜い泣き声。門番は耳を押さえつつ、途方に暮れていた。

「なんなんだこりゃ」

「あー、危なかった」

繁華街まで足を運び、ヘレネはようやく胸をなで下ろした。

「やあヘレネ。また発作でも起きたのかい？」

「レイン！」

革の胸当てを着込んだ少年に声を掛けられ、ヘレネは驚いて振り返った。

柔らかそうな栗色の髪。男だが優形で、頼りになるというよりは母性本能をくすぐるタイプである。

背も並よりは少し低めで、剣士風のこのコスチュームは少々アンバランスだ。

レインと呼ばれた少年は、少女のような笑顔をヘレネへ向けた。

「秘薬とやらは手に入ったかい？」

「全然駄目」

力無く首を振るヘレネ。

「やっぱり一人じゃ遠出はきついわ。遺跡まであと半日ってところでハイフンに見つかって、あわてて戻ってきたのよ」

「ハイフンって、あの犬男？」

「そ。あの大男」

ヘレネは肩をすくめてみせた。

と、

「ヘレネちゃん、好きじゃあああああ！」

「ひひひひひひ！」

町の警備員を数人引きずりながら、先ほどの巨漢が再登場！

青ざめてヘレネが再び逃げ出そうとすると今度は、

「はっはっはっは！ 乙女の危機に現れる！ 少女の悲鳴が我を呼ぶ！」

上空から響く男の声。ヘレネは見上げることなく額をたたいた。

「またややこしいのが……」

「とう！」

意味もなく建物の屋上にいたその男は、かけ声とともに飛び降り、颯爽と着地した。

「乙女よ。愛と正義の使者、アスタリスクが来たからにはもう安心ですぞ」

アスタリスクと名乗る男は、白い歯を輝かせて言った。

長身でマッチョ。膝まであるブーツと裏地の赤い漆黒マント。黒いマスクをかぶっている所以素顔はわからないが、かなり常識を逸したコスチュームである。

アスタリスク。シュラインの町をにぎわす、自称正義の味方。しかし実質、ハイフンと同じヘレネの追っかけである。

「ゆくぞ悪党！ 乙女を泣かす者はこのアスタリスクが許さん！」

「ほざけ変態！ ヘレネちゃんはワシのもんじゃ！」

二人の男は町の大通りで文字通りのとっくみあいを始めた。

「ヘレネ、こっちこっち」

レインに連れられ、ヘレネは裏通りへ退避していた。息も荒く、こう言った。

「もういや！ この体質、絶対に治すんだから！」

\*

ヘレネ・アクアマリン。十四歳。

シュラインの町出身の、魔法使い志願の少女である。

「美人になりたい！」という動機に基づき、最初に会得した魔法が『魅了【チャーム】』だが、ところがこれが大失敗。

かくしてヘレネは『変なヤツにのみもてる』という難儀な体質になってしまったのである。

普通の女の子に戻りたいヘレネ。彼女の体質が改善されるのはいつのことになるのだろうか。

## 第一話

---

ここはカーナ治療院。シュラインの町にいくつもある治療院のうちで唯一、女医が勤める施設だ。

カーナは二〇代後半くらいの女性で、ややきつい面差しをした美女だ。きらめく薄紫色の髪が印象的である。

「うーん、完全に浸透しちゃってるわねえ」

内視魔法と打診を何度か繰り返した後、カーナ女医は言った。

「それじゃあ、治せないんですか？」

「治せないこともないけど」

と難しい表情で、カーナは説明を始めた。

人間に限らず性を持つ生き物の多くは、フェロモンという分泌物で異性を引きつけている。魅了魔法は、このフェロモンを増大させる効果を持つ。

しかしヘレネはこの魔法に失敗し、フェロモンに異常をきたしてしまったのだ。

治す方法としては二つ。フェロモン異常をどうにかして元に戻す。もうひとつはフェロモン分泌量を減らすこと。

「大人になればある程度は減るから、成長期が終わればこういったことはほとんどなくなるはずよ」

「終わりっていつ頃ですか？」

「うーん、早くて一八歳から二〇歳。ゆっくりと三〇歳くらいまで成長を続ける人もいるわねえ」

「そんなに待てません！」

「あ、感情的になっちゃ駄目よ。興奮するとフェロモンが……」

と言いかけ、カーナの目つきが変わった。

「ふふふ。よく見ると、ヘレネちゃんって可愛いわねえ」

くすくす笑いながら、ヘレネの頬に手を当てる。驚いて後ずさるヘレネ。

「あ、あの……」

「大丈夫よ。お姉さんが優しく手ほどきしてあげるから」

「ちょ、ちょっと！」

逃げようとするが、すでに背後が壁だった。妖しく微笑んだカーナが近づいてくる。

「いやあああああ！」

がっこおーんっ！ ヘレネは手近にあったイスを、カーナめがけて投げつけた。見事顔面に命中し、カーナはもんどりうってひっくり返った。

「痛いわねえ！ 何するのよ！」

「カーナ先生が変なコトしようとするからです！」

鼻を押さえて訴えるカーナだが、我に返って辺りを見回し、取り繕うように言った。

「あ、あら。あたしがフェロモンに引っかかっちゃったのね。……と、とにかく、変に興奮すると、変も普通も男も女も見境なしに引きつけちゃうから気をつけなさい」

「とにかく普通の薬や魔法じゃ治せないのよねえ……」

ぶつぶつ呟きながら、ヘレネは治療院を後にした。

こまめに修道院で水浴びすれば、ある程度は押さえられるが、抜本的な解決にはならない。



「あの状態で、見るなという方に無理があるぞ。ところで……」

不意にまじめな顔になるレインに、ヘレネは奇妙な胸の高鳴りを覚えた。まだ幼さの残る顔立ちだが、引き締めると割と格好良い。

「レースの花柄は似合わなぼぶっ！」

一瞬ときめいた自分が馬鹿だった。ヘレネは能面で鉄拳をぶち込んだ。

\*

ヘレネはお風呂好きである。

特に、修道院で公開されている公衆浴場は、お気に入りスポットのひとつだ。

フェロモン異常を起こした現在、ここで水浴びをするのはヘレネの日課である。

「あーさっぱりした」

つややかな肌、下着・シャツ・スカートと着込んでいき、薄手のマントを羽織り、カウンターに預けてあったハンドステッキを手にする。

水浴びを終え、ヘレネはいつもの魔法使いルックで修道院を後にした。

「公衆浴場とは、相変わらず庶民ですわねえ、ヘレネさん？」

やたらと高飛車な声に、ヘレネは眉をひそめた。

振り向いた先に女性が一人。いや、女性と呼ぶには、まだわずかに若い。ヘレネと同年代か少し年上くらいの少女がいた。

カールがかった薄紫色のロングヘア。長いまつげと切れ長な瞳。相当な美人だ。

そして裾の広いワンピースドレス。良家のお嬢様であることを如実に物語っている。

「あらレイコさん。こんな庶民じみたところになんのご用ですか？」

相手と同じ態度で、ヘレネは答えた。

威張るのは好きだが、威張られるのは嫌いなようだ。レイコと呼ばれた少女はこめかみを引きつらせた。

「ふふん。礼拝堂に用事があるからついでに立ち寄っただけですわ。なんといっても、タカマガハラ家は神族の末裔ですからね。ほほほほ」

手の甲を口元に当て、レイコ・タカマガハラは高笑いをした。

タカマガハラ家はシュラインの町の領主であり、アルマフレア王家と遠縁にあるという。

王家をさかのぼると、アルマフレア神話につながる。すなわち王家と遠縁のタカマガハラ家も神族の末裔ということになる。

なるのだが、あくまでも伝説上のことであるし、ヘレネにとってはどうでもいいことだ。

「ふーん、それじゃ」

そっけなくその場を立ち去ろうとしたヘレネだが、

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

いきどおって止められてしまった。

魔法使い志願であることをのぞけば、いや、それを含めても町娘の一人にすぎないヘレネだが、なぜかレイコは彼女をライバル視していた。

「まだ何かご用ですか？」

にっこりと振り返るヘレネ。笑顔だが、つけいる隙は見せない。

ライバル視まではしていないが、ヘレネはレイコをあまり好いていないのだ。

だがそんなことはお構いなしに、ぞんざいな口調でレイコは言った。

「レイン様は今日はどちらにいらっしゃるのかしら？」

「さまあ？」あきれて返すヘレネ。

レインはヘレネと同じ単なる町民である。剣士希望ではあるが、実戦経験がないので、まだ見習いの身分である。貴族に様付けをされると、かえって嫌みっぽく聞こえる。

「様をつけるのは当然ですわ。レイン様は道場一の剣士。将来『英雄』の称号を得て、貴族入りすることは間違いありませんもの」

「はあ、まあ、そこそこは強いらしいけど。まだ見習いよ？」

「レイン様を侮辱するのはおやめ！」

「いまのセリフのどこが侮辱になってたのよー」

レイコの一喝に、思わず首をすくめるヘレネ。彼女がライバル視している理由が何となくわかったような気がする。

「とにかく。あなたにレイン様はこれっぽっちも相応しくありませんの。そここのところ、おわかりいただけます？」

相応しいも相応しくないも、私たち、ただの幼なじみなんだけど。

と言いかけて、ヘレネの表情が固まった。レイコの後方に、異様な人物がいた。

「お嬢様！」

「うどわあっ！」

馬鹿でかい声に、レイコはお嬢様らしからぬ驚き方をした。

「もっと静かな声にしなさいといつもいっているでしょう、アルツ！」

「これは失礼いたしました！ しかしそれがし、この声は地声故、制御は不可能でございます！ それよりも！ そろそろ切り上げませんと礼拝堂に遅れてしまいますぞ！」

アルツと呼ばれた男の声は、いちいち馬鹿でかい。一句一節ごとに空気と地面がびりびり震える。

服装はいわゆる忍び装束。彼はタカマガハラ家のお抱え忍者なのだ。

しかしそのガタイは尋常ではない。二メートルは楽にある。縦だけならハイフン以上だ。

声と体躯の大きさは、はっきり言って忍者には向いていない。

「あーもう、わかりましたわ。ヘレネさん、この場は失礼させていただきますわ。ただし、わたくしの言ったことは、お忘れなきよう」

ふん、と鼻息も荒く、レイコは去っていった。

アルツも一陣の風とともにかき消えた。声と身体が大きくても、忍者としての技能は十二分にありそうだった。

「み、耳鳴りが……」

レイコの捨て台詞に構う暇もなく、両耳を押さえたまま目を回すヘレネであった。

「ふーん、さんざんだったんだね」

言葉の内容とは裏腹に、レインの口調は素っ気なかった。

宵の口からもう少したった頃。シュラインの町の大通りにある酒場で、ヘレネはレインと食事混じりに話をしていた。

ヘレネは魅了魔法の失敗で『変なヤツ』を引きつける体質になってしまった。

その反動が『まともな男』からはとんと相手にされなくなってしまった。

身近にいる異性の中では、レインが唯一まともに話の出来る相手である。

しかしレインにだけ失敗魅了が通じないのはなぜなのだろうか？ 幼なじみには通用しないのだろうか？ それとも変とまとの境に位置する微妙な性格なのだろうか？ と、いろいろ勘ぐってはいるのだが、理由はいまだにわからない。

「小さい頃からのつきあいだから、体臭に慣れちゃってるんだよ、きっと」

「体臭なんて言い方はやめてちょうだい！」

ヘレネは向かい席の幼なじみを小突いた。

「とにかく、この体質をさっさと治さないよ。レイン、あなたにも手伝ってもらおうよ」

「それは構わないけど、なにか良い方法でもあるのかい？」

ヘレネは難しい顔をした。

いまある情報では、西の遺跡を調べるのが一番だが、無事にたどり着けるのだろうか？ レインの協力があれば大丈夫かな。

「あるわよ」

と、答えたのはヘレネではなく、カウンター席からだった。

若い女性がカウンターでバーボンを飲んでいる。ほんのり染まった頬で振り返った。

「カーナ先生！」

女性は、治療師のカーナだった。

いつもの白衣ではなく、身体のラインを引き立たせる薄手の服だ。仕事帰りに、酒場で一息入れていたのだろう。

カーナは、紙飛行機を投げた。一回転し、ヘレネたちの席へ舞い降りる。

「こういう仕事を見つけたんだけど、興味ない？」

カーナの台詞に、ヘレネは紙飛行機を広げた。

その紙には二つの似顔絵と、簡単な文面が書かれていた。

読んでみると、賞金首らしい。こういう内容だった。

『最近シュラインの町を荒らしている、自称「シュラインの町一番の極悪人」コロン・チルダ姉弟を倒す者を求む。報酬は、金貨一〇〇枚と「王家の香水」とする』

「その『王家の香水』ってのは、たぶんアルマフレア王家に伝わるマジックポーションね。その高貴な香りは魔を退けると聞くわ。もしかしたらヘレネちゃんの体質にも効くかもね」

もちろんヘレネにこの仕事を拒否する理由はなかった。

\*

「お父様！」

晚餐の直前、レイコは父、カール公爵に向かって詰問した。長いテーブルの向かい側に座る父に詰め寄る。

「これは一体なんですか！」

父に向かって突きつけた紙切れは、賞金首に関する内容だった。

『最近シュラインの町を荒らしている、自称「シュラインの町一番の極悪人」コロン・チルダ姉弟を倒す者



を求む。報酬は、金貨一〇〇枚と「王家の香水」とする』

「それがどうかしたのか？」

あごのひげをなでながら、カール公爵は少々とぼけてみせた。

カール公爵は恰幅の良い壮年の男で、シュラインの町の領主をつとめている。

しかし、貴族ながらも冒険好きという一面がある。

特に七年前、魔導師オヅマ討伐の一隊に加わったなどの戦歴から、かつては侯爵だったのが現在では公爵の地位を得ている。

「どうかしたじゃありません！ この金額はなんなんですか！」

レイコの高慢さは父親相手でも健在である。レイコは憤慨して怒鳴った。

「安すぎたか？」

「高すぎるんです！」

金貨一〇〇枚というと、贅沢をしなければ数年は暮らせる金額である。豪族の娘といえども、並ならぬ金額であることくらいわかる。

「ふむう。私はそのくらいが妥当なんじゃないかと思ったんだがのう」

「……もしかしてこの悪党は手強いのですか？」

「さあ？」肩をすくめるカール。

「さあってお父様……」

「うむ、商店街のあたりから、最近苦情が多くてな。どうやら連中は、このあたりを拠点に荒らしているらしい。治安維持のためにも、早めに手を打っておこうと思って、な」

レイコはめまいを覚えた。商店街を荒らす程度の悪党に金貨一〇〇枚とは、あまりにも非常識である。冒険者あがりのせいか、父の金銭感覚はどうにもずれている。

実はこのあたり、『カール公爵が依頼する仕事はとてとてもおいしい』と、冒険者の間では密かに評判だったりする。

「どちらにせよ、一度公募にかけてしまった以上、賞金の変更は無理だなあ」

大して気にもとめずに言うカールに、レイコは胸を張って宣言した。

「こんなふざけた賞金で庶民を潤わせるくらいなら、わたくしがその悪党を倒します」

「……とまあ、そういうわけですよ」

「そういうわけってねえ」

いけ高ぶって言うレイコに、ヘレネは内心渋面になった。

「実は単なるこづかい稼ぎでしょ？」

「そんなことはありませんわ！」

間髪入れずに否定するレイコだが、頬に流れる一筋の汗を、ヘレネは見逃さなかった。

「わたくしは、レイン様のお役に立ちただけですわ」

いきなり少女漫画のような瞳で、レイコはレインを見つめる。レインにまわりつくというのも、目的のひとつかもしれない。

「ヘレネ、ほら、入道雲」

レインの言葉には脈絡がない。何を考えているのか、それとも何も考えていないのか、彼はのんきに空を眺めている。

「それがどうしたってのよ」

青空とは対照的に、陰鬱にヘレネは呻いた。

「ヘレネさん、なんですかそのうっとうしそうな態度は！」

レインにくつつき、邪険な口調で非難するレイコ。一八〇度態度を変え、レインに語りかける。

「そうですねレイン様、夏といえばやはり入道雲ですわよねー」

「いや、単に夕立が来そうだなーと思ったんだけど」

レイコのモーションにも我関せずのレイン。それでも構わずレイコは感嘆に身悶える。

「ああっ、さすがはレイン様ですわ。そこまで空模様が読めるなんて！」

「夏に夕立は当たり前なんだけど」

声には出さず、ヘレネは頭痛にひたいを押さえた。レイコもよくこんなマイペース男に惚れたもんだ。

「ささ、雨が来ないうちに近くの酒場で打ち合わせに入りましょう。報酬の配分とかを決めませんか」

「そうね」

大通りを先導するレイコに続くと、彼女は眉をひそめて振り返った。

「あなたはついてこなくて結構。もちろん分け前もありませんわよ」

このアマはいったい何様ですか？ ひとこと言い返そうとしたとき、レインが仲裁に入った。

「まあまあ。ヘレネだってなにかの役に立つかもしれないし」

「失礼なこと言わないでちょうだい！ あたしだって攻撃魔法のひとつやふたつ、持ってるんですからね。むしろ、レイコさんの方が心配だわ」

半眼のヘレネに、レイコは薄笑いで応じた。

「お気遣いどうも。けど、ご心配には及びませんわ。タカマガハラ家たるもの、武芸を心得るのが習わしですの」

レイコは現在、いつものドレスではなく、忍び装束をアレンジしたような服を着ている。

動きやすくも丈夫なこの衣服は、アルマーシャルという無手闘技用の服だそう。

まあどうせ貴族のたしなみ程度だろう、とヘレネは踏んでいるが。

「まあお金はいつでも良いから、王家の香水はもらうわよ」

「ほほほほほ。庶民の割にお金には疎いようね。細かいところについては、じっくりと話し合ひましょう」

三人は酒場の扉をくぐった。

どんっ！ 何者かがヘレネを突き飛ばした。よろけ、レイコがひょいとかわし、レインが代わりに受け止める。

「ヘレネさん！ 気安くレイン様にもたれかからないでくださいます？」

「レイコさんがかわさなきやすむことでしょうか」

口論しかかった二人の脇を、今し方ぶつかった男が通り過ぎた。

「すまない。急いでるんで、それじゃ」

小柄なその男の後ろを、長身の女性が急ぎ足でついていく。それとほぼ同時だった。

「食い逃げだぁー！ そいつらを捕まえてくれ！」

店内から響く声に、ヘレネたちはぎょっと振り返る。二人組は全力逃走していた。

「だぁぁっ！ なんてこんなことに！」

「仕方ないよ。放っておくわけにもいかないし」

「そうですね。レイン様のおっしゃるとおりですわ」

三者三様に言葉を漏らし、食い逃げ犯を追いかける。

「コロン姉ちゃん、まいたか？」

路地裏に逃げ込み、小柄な少年が振り返る。ヘレネたちは、表通りを駆け抜けていった。

「ばっちりさね、チルダ」

コロンと呼ばれた長身の女性が、弟に向かってにんまりと笑う。

一〇代後半くらいの姉弟は、手を取り合って笑い合う。

「今日も悪いコトしたなあ」

「うんうん。あたしたちはシュラインで一番の悪人だからねえ。さあ次は道具屋で万引きだよ！」

「あ、見つけた」

間の抜けた声に、姉弟はびくうっと身をすくめた。彼らの視線の先には、優形の少年と、二人の少女。もちろんヘレネたちだ。

「追いつめましたわよ、小悪党」

「ふっ！ 俺たちはシュラインで一番の極悪人、コロン・チルダ姉弟だ。悪人が悪いコトして何が悪い！」  
胸張って威張るチルダ。

「よっ、チルダ。格好良いねえ。もっと言っておやり」

「おう！」

「い、いきなりどんぴしゃ……」

威勢の良いだけのチルダの雑言に、ヘレネは複雑な心境だった。

「コロン・チルダ姉弟だと！」

「こっちだ！ こっちにいるぞ！」

どかどかと、戦士から町人からあまたの人々が、路地裏前まで詰めかけてきた。報酬目当てにかなりの輩が神経をとがらせていたようだ。

「おお、俺たち有名人だったんだなあ」

「ふふふ。やっぱりあたしの美貌のおかげかしらねえ」

とんちんかんなことをほざく姉弟に、ヘレネはうなだれた。最近、会う輩ことごとく変なヤツである。

「寝言は牢屋で言いな！」

ガラの悪そうな男が、チルダにとっくみかかった。だが彼は平然としたものだった。

「ふっ！ このチルダさまにたてつこうとは良い度胸なりね！」

ばこおーんっ！ 小柄な身体に似合わず、チルダは男を空高く殴り飛ばした！

「おほほほほ！ あたしたち姉弟の悪事は誰にも止められないのよ！ おとといおいで！」

甲高く笑い、姉のコロンが群衆に突っ込む。長身とはいえ細身なのに、ちぎっては投げちぎっては投げ、と剛腕の戦士さながらの怪力を見せる。

這々の体で逃げ出す有象無象。いつのまにやら残るはヘレネ・レイコ・レインの三人になっていた。

「け、結構強いわね……」

たじろいで、ヘレネは小さく呻いた。

この姉弟は見かけに寄らず、かなりの怪力だった。力がある分、頭が足りなそうだが。

「俺たちって強いよな？」

「もちろんよ！」

「俺たちってワルだよな？」

「もちろんよ！」

「そう！」

「俺たちこそが！」

「てなもんやの大悪人〜！」

路地裏で、肩を組んで歌い出す姉弟。はっきり言って、しらふで酔っぱらったような連中である。  
「ねえヘレネさん。わたくしたち、こんなアホを倒さなくてはいけないの？」

「あたしに聞かないでよ」

うなだれまくるレイコとヘレネ。ちなみにレインは、相変わらずのほほんと涼しい顔をしている。  
「まあしょうがないよ。金貨一〇〇枚と王家の香水がかかっているんだし」

ぼそりと言うレインに、二人の悪人（自称）が目をむいた。  
「なんと！ 俺たちにはそんな賞金がかかっていたのか！」  
「すごいねえ。金貨一〇〇枚って言ったら、数年は暮らせるじゃないのさ！」

目を輝かせて、二人はひそひそ話を始める。  
「姉ちゃん姉ちゃん。お、俺、今すごい悪いことを考えちゃったぜ」  
「なんだいなんだい。早くおっしゃいなさいよ」  
「あのな。俺たち、あそこの三人を丸め込んで、自首するんだよ。そして報酬を山分けするのさ」  
「うおお！ なんて悪いことを考えるんだい！ あんた凄い才能だよ！」  
「へっへっへ。やっぱ大悪人ならこのくらい出来ないかねえ」  
「そう！」

「俺たちこそが！」

「てなもんやの大悪人〜！」

「それはもういいから」

また歌い出す姉弟に、ヘレネはぱたぱたと手を振って見せた。  
「そういうわけで、俺たち自首することにしました」  
言って二人はにこやかに両手を前へ出す。  
いい加減疲れてきたが、帰るわけにもいかない。ヘレネは絞り出すように言った。  
「とりあえず言うておくけど……アルマフレア城の地下牢ってかなり手入れが悪いらしいわよ。腐臭の漂う部屋と、腐ったご飯。この前は、グールが出るってうわさを聞いたわ」

姉弟は驚いて後ずさった。  
「ど、どうする姉ちゃん。俺はクサメシもグールも嫌だぞ」  
「あたしだって嫌だよ！ しょうがないね。金貨一〇〇枚はあきらめるわよ」  
再びひそひそ話を始める姉弟に、ヘレネは聞かずにいられなかった。  
「ねえ、さっきからすぐく疑問に思ってるんだけど、悪人を自称するなら、殺人とか強盗とか（ぴーっ）とかってしないの？」

ヘレネの素朴な質問に、姉弟は大いにたじろいだ。  
「うおお！ なんて非道いことを考えるんだ！ 人間じゃねえぜ！」  
「チ、チルダ、あんな非道いヤツには近寄らない方がよいよ」  
「あんたたちに言われたくないわよ！」

憤慨して怒鳴るヘレネであった。  
「け、けど、（ぴーっ）てのにはちょっと興味があるかな」  
じゅるる、とよだれを垂らすチルダに、ヘレネは青ざめて一步下がった。  
「とにかく、自首の話はやっぱり無しにするわ。怪我したくなかったらそこをおどき」  
尊大に言い放つコロンの、三人の表情が引き締まる。  
「はっはっはっは！ 乙女の危機に現れる！ 少女の悲鳴が我を呼ぶ！」

そのとき、頭上から豪快な笑い声が響きわたった。

黒で統一したマスクとマント。膝までを覆うブーツ。自称愛と正義の使者、アスタリスクである。

「とう！」

狭い路地裏へ、器用に飛び降りる。足下がゴミだらけだったが、なんにもなかったかのように払いのける。

「愛と正義の使者、アスタリスク、ただいま参上！ 乙女よ、ご無事でしたか！」

ヘレネの手を取り、にかっと白い歯を見せるアスタリスク。

チルダのいやらしい視線といいアスタリスクの登場といい、ヘレネの『変なヤツ引き寄せ体質』の発作が、また起きつつあるようだった。

大通りで向かい合う人影が六つ。

魔法使い志願のヘレネ・アクアマリン。剣士見習いのレイン・フラッド。領主の娘レイコ・タカマガハラ。そして突如乱入してきた自称愛と正義の使者、アスタリスク。

彼らの前に立ちふさがるのは、自称『シュラインの町で一番の極悪人』コロンのチルダ姉弟。

彼らの周囲には、かなりの野次馬が集まっている。

いつの間にか、暗雲が立ちこめていた。不敵に睨み合う正義の使者と極悪人。

あっ！ 薄暗くなってきた空に、一筋の稲光が走る。一瞬の閃光をバックに、剛胆にアスタリスクは言った。

「見よ！ お前達の愚行に、天も怒っている！ もはやお前達に残された道は、天罰を受けることのみと知れ！」

「ふっ！ 笑わせるんじゃないよ！」

アスタリスクと全く同じ態度で、コロンは言い返した。低い雷鳴がとどろいているが、彼女の声はあたりの人すべてに行き届いた。

「あたしはあんたのような正義の味方かぶれが大っ嫌いなんだ。聞きかじりの善行なら、程々にしておいた方が身のためだよ！」

「ねえヘレネさん。わたくしたち、なんだか蚊帳の外って感じがしません？」

「あら奇遇ね。あたしもちょうどそう思っていたところよ」

目を合わせ、ヘレネとレイコは深い深いため息をついた。ちなみにレインは相変わらず動じていない。

「口で言ってもわからぬようだな。いくぞ！」

「望むところよ！」

吠え合い、アスタリスク・コロンの三人の激闘が始まった。

どがあっ！ ばきいっ！ どずんっ！

激しい音と、火花すら飛び散る戦いとなった。

「な、なかなか強いわね。アスタリスクって」

怪力の二人を相手に、アスタリスクは互角の戦いを繰り広げていた。単なる変態ではなかったようだ。

「そうは言ってもらえませんわよ。このままでは彼に賞金を奪われてしまいますのよ！」

「そ、そうだったわ」

「じゃあ僕たちも参戦することにしよう」

意外に迅速に決め、レインが前線に飛び込んでいった。

「助太刀しますよ、アスタリスクさん」

「おお、かたじけない！」

「レイン様ばかりに負担はかけられませんわ！」

続いてレイコも加わっていった。

「お、おのれ、三人がかりとは卑怯なり！」

「貴様に言われたくないわ！」

なんやかんやと言い合いながら、混戦模様になっていく。

レインはもちろん、レイコも結構強かった。

レインが剣を振り、慌ててチルダがよける。その隙をついてレイコが掌底を叩き込む。

加勢しようとしたコロンの手をつかみ、アスタリスクが勢いよく放り投げる。コロンは猫のように身軽に着地し、再び戦線に突入する。

正義の使者一行は、次第に悪人姉弟を押し始めた。

「あー、えーと」

その中でたった一人、ヘレネだけが取り残されていた。

「いいのいいの。あたしは魔法使いだから格闘戦には参加できないもの」

しゃがみ込んでいじけてしまうヘレネだったが、ふと、妙案を思いついた。

「あ、そうだ。攻撃魔法で助勢すれば良いんじゃないの」

ぽんと手を打ち、即実行。記憶の中で一番強力な魔法を思い出す。

綺麗な旋律とともに、呪文を唱えていく。すぐにたどたどしいものになる。

「え、えーと、次、なんだっけ？」

リュックから魔導書を取り出し、ぱらぱらとめくる。見習いのヘレネは、まだまともに魔法が使えないのだった。

今度はかなりの棒読みで、続きの呪文を唱える。ある程度は魔法の原理を理解しているので、棒読みでも何とかなる。そしてようやく呪文が完成した。

「閃光雷撃衝【ライトニング・ショック】！」

ぼひゅるん。という間抜けな音とともに、構えた杖から小さな火花が出た。ふわふわとたたずむだけだった。

「しくしくしく。どうせあたしはまだ見習いですよーだ」再び隅っこでしゃがみ込む。

そのとき、頭上に閃光がほとばしった。

びしゃーんっ！ いきなりの落雷に、ヘレネは固まった。

目の前、先ほど放った小さな火花に、雷が落ちたのだ。しかし火花はまだ残っている。

そしてその火花がふよふよとヘレネに近づいてくる。

ヘレネの可愛い顔が引きつった。頭上では、積乱雲がゴロゴロ言っている。

「だあああっ！」

すっとんきょうな悲鳴を上げ、ヘレネは逃げ出した。

どーんっ！ 再び雷が落ちる。ヘレネを追いかける火花を狙うように落ちてきた。

「こ、これは一体何事なの？」

敵味方ともに手を止め、滑稽に逃げ回るヘレネを見やる。必死の形相で、戦線に突っ込んで行く。全員揃ってひるみまくった。

「ちょ、ちょっと待って！」

どがしゃーん！ 慌てて逃げようとするコロンの脇を通り過ぎ、その刹那、落雷がコロンをとらえた。

「いやあああ！ 来ないでえええ！」

叫びまくり逃げまくり。しかしそれでも火花はヘレネにつきまとう。そしてあるときは一定のリズムで、ある時は不定期に、雷が落ち続ける。

こんな時でも平常心を失わないレインが、はたと手をつき言った。

「ヘレネって、カミナリ様にも好かれるんだ」

「そんなわけあるかあああああ！」

とりあえずレインのポケだけは突っ込んでおくヘレネであった。

……………どのくらいの時が流れただろうか。

ようやく空が明るくなってきた。入道雲はその形をだいぶ崩し、去りつつあった。

青空が見え始めた頃、火花はようやく消えた。荒い息で、ヘレネは膝をついた。

「た、助かった……」

何とか顔をもたげると、とんでもない光景に出くわした。

敵も味方も野次馬も、商店街丸ごとが半瓦礫状態と化していたのだ。

「全然助かってないんですけど……」

ぷすぷす煙を立ち上らせて、うつぶせレイコは不満を漏らす。

「やあ何とかおさまったようだね」

「レイン！」

平然とした調子で出てくるレインに、ヘレネはひどく驚いた。

「あんたには雷落ちなかったの？」

「ああ。すぐ側に剣を突き立てて、伏せてたから」

レインの説明はこんな時でも穏やかだった。人身よりも金属に、そして低いところよりも高いところに雷は落ちやすいので、突き立てた剣のすぐそばに伏せていれば比較的安全だと言う。

そして、そこまで頭の回らなかった連中はこぞってダウン、というわけだ。

「まあなんだかんだあったけど、コロン・チルダ姉弟は倒せたみたいだから、万事オッケーじゃない？」

お気楽極楽のレインに、ヘレネはどう対処すべきかわからなかった。

「と、とりあえず、乙女が無事で何より……」

呻き、がくりと気絶するアスタリスクであった。

すったもんだの現場からかなり離れたところに、女性の姿がひとつあった。

きらめく薄紫色の髪が印象的な、白衣の美女。治療師カーナである。

「かなり変則的だったけど、まさか雷神【ヴィーナ】を呼び出すなんてねえ。不確定要素も多いけど、なかなか面白い逸材ね、ヘレネちゃんって」

カーナはくすくすと笑う。目を細め、右往左往するヘレネを見つめた。

「あの娘なら、あたしの目的をかなえてくれるかもしれないわね。これからが楽しみだわ」

謎めいた言葉を残し、カーナは去っていった。

「いいですこと、ヘレネさん。本当は、金貨一〇〇枚でも足りないくらいなんですからね」

物凄く恩着せがましく、レイコは言った。ヘレネは逆らうすべもなく、ただひたすら頭を下げている。コロソ・チルダ姉弟を役所につきだし賞金を得たは良いが、商店街からの苦情は並大抵のものではなかった。

ぶーたれるレイコへ、レインの口添えがあって、なんとか事を納めた次第である。商店街からの被害請求は、賞金とタカマガハラ家の補助によってまかなわれた。結局賞金はパーになってしまったが、王家の香水だけは辛うじて手に入れることが出来た。

「ああこれでまともな体質に戻れるのね」

ヘレネの手には、小さな瓶が握られている。いくつかの装飾がなされた高級感のある小瓶で、その中には透明な液体が入っている。

これこそが魔をも退かせるという『王家の香水』だそうだ。

「まあしかし、なんであんな物を執拗に欲しがるとか知らねえ」

半眼のレイコをよそに、うきうきとヘレネは小瓶のふたを開ける。むわあっ。とたん、とんでもない異臭があたりに充満した。ヘレネは思わず鼻を押さえる。レイコはハンカチーフで鼻から下を押さえつけている。レインは僅かに眉を寄せただけで、割と平気なようだ。

「すごいにおいだねえ。これなら確かに魔物も逃げちゃうね」

「こ、これが高貴な香り……？」

呻くヘレネに、レイコが鼻声（鼻を押さえたままだから）で言った。「まあご大層な名前が付いてるけど、これはいわば失敗作ですわね。魔物退治には使えるから、うちの倉庫にとっておいた物ですわ」

すなわち、この『王家の香水』は、確かに変なヤツを引きつける効果をうち消すが、ついでにだれも近寄らなくなるという恐ろしい副作用があったのだ！

「副作用なの？ 副作用なの？ 副作用なのそれって？」

ナレーションに突っ込まれても困る。

「で、その香水、つけるのかい？」

「んなわけないでしょう！」ヘレネは小瓶を地面に叩きつけた。

「ヘレネさん、なんて事をするの！」

言うがはや、レイコはダッシュで逃げ出した。我に返ったヘレネが後続く。レインはやや遅れたが、全然焦っていない。

かくして臭いの充満するその部屋は、当分立入禁止になるのだった。

「こんな体質、絶対治すんだから！」

決意を新たにすヘレネ。

そう。ヘレネの憂鬱は、まだ始まったばかりである。



## 第二話

---

熱い日差しが照りつけている。雲ひとつ無い青空の下、ヘレネは洗濯物を干していた。

「これでよし、と」

ぱんっ、とシーツを一枚はたき、ヘレネは満足そうに息をついた。

夏の青空にも負けない空色のセミロングは、陽光を照り返しているようだった。

ヘレネ・アクアマリン、一四歳。魔法使い志願の少女だが、今は家事の真っ最中である。

「やあヘレネ。今、暇かい？」

住宅街では少々場違いな戦士姿で、幼なじみのレインが訪ねてきた。

柔らかそうな栗色の髪的少年で、ヘレネと同年だが、どこことなく細面で戦士っぽさには欠ける。しかし道場では一番の実力者なんだそうな。

「見ての通り、一区切りついたところよ」

洗濯物を入れてあったカゴをちらりと見、ヘレネは答えた。

ヘレネは今は室内着に少々くたびれたエプロンをまとった姿である。

——と、レインは洗濯物のひとつに手を伸ばし、顔を近づけてにおいをかいでいた。

「かぐな！」

げしっ。ヘレネは幼なじみをこづいた。しかしレインは大して堪えてもいなさそうに頭をさするだけだった。

「服にもヘレネのフェロモンがこびりついてるんじゃない？」

「ちゃんと洗ったわよ」

腰に手を当て、ぶっきらぼうに答える。今日はちょっぴり奮発して洗剤を多めに使ったのだ。

魅了【チャーム】の魔法に失敗したヘレネは、『変なヤツにのみもてる』という愉快、もとい難儀な体質に悩まされているのである。

「あ、ヘレネ。あれ……」

指さしたレインのその先を見やり——

うげげっ、と女の子にしてはちょいと品のないうめき声を上げ、ヘレネはあわてて洗濯物の陰に隠れた。

縦にも横にもでかく、腹もでかい大男。ちょっと見では、ピア樽が歩いているようにも見える。ヘレネの体質に引っかかった変人の一人、ハイフンである。

な、なんでこんなところにハイフンが？ しゃがみ込んだまま、地面に語りかけるかのようにヘレネは呟く。この家の場所は知らないはずなのに。

「くんくんくん。ヘレネちゃんのおいがするぞ」

たぶん悪気の無いはずの彼の台詞は、ヘレネの頭の中で反響しまくった。

「がーんっ。やっぱりにおうんだ」

慌てて口を押さえる。幸いハイフンの耳には届かなかったようだ。

「いや、においといってもちょっと意味が違うんじゃないかな」

レインには聞こえていたか、フォロー気味に彼は言った。

ハイフンは洗濯物をしげしげと眺め、やおら驚愕に目を見開いた。

「こ・こ・これは、ま・ま・まさか、ヘレネちゃんのパ・パ・パン……」

ピンク色で三角形の可愛らしいデザインの布地を取り、ハイフンがうろたえまくっている。放っておけば、かぶるかお持ち帰りするかに違いない。

こ、この変態男……と業を煮やすヘレネに気づいているのかいないのか、レインがのんびりとした口調でそれに答える。

「ああ、それははす向かいのリングおばあさんの下着だよ。寝たきりだから一緒に洗ってあげてるんだ。ちなみにリングおばあさんはもうすぐ九〇歳になるそうだけど」

「うおおおおおーんっ！ 現実なんて嫌いだあああああーんっ！」

ハイフンは泣いて逃げていった。地響きで洗濯物が小刻みに揺れている。その揺れも次第に収まり、ヘレネはくたびれて立ち上がった。

「やれやれ、何しにきたんだか」

「レインさまあああああ！」

「ぐぼぶえっ!？」

ほっとしたところで、いきなりみぞおちにとんでもない衝撃。ヘレネは転げ回り、激しい嘔吐感をこらえて何とか今の暴漢を記憶に納めようと起きあがる。

カールがかった薄紫色のロングヘア。上品そうながらも嫌みっらしい顔つき。一般市民に見せつけんがばかりの裾の広いワンピースドレス。

ヘレネの天敵、レイコ・タカマガハラである。今日はフリルのついた日よけ傘まで持参している。

「あ、あんたはいきなりなにを……」

ヘレネのうめき声は、ボランティア募金の呼びかけがごとく無視された。

レイコは息を弾ませ、ほんのり頬を赤く染めて言った。

「レイン様のおいがしましたの」

「僕もおうの？」

「知らなかったの？」

ヘレネに振ってきたので、半眼で答えてやる。とたん、レイコがまくし立ててきた。

「レイン様になんて失礼なことを！ レイン様の高貴なオーラは、一キロ離れていてもわたくしには見えるんですよ。おほほほほ」

この女にはレイン探知機が内蔵されているのかもしれない、とか考えてみる。

レイコはレインにぞっこんなのだ。おかげで幼なじみというだけで、ヘレネは大迷惑である。この女とはいつか決着をつけなければなるまい。

「実はレイン様の通【かよ】っている道場で聞いてまいりましたの」

「まるでストーカーね」

「何かおっしゃいました？」

「いいええ、なんにもお」

がらがら声で肩をすくめて見せても、レイコにはまるで通じない。

両手を胸の前で握り、レイコは瞳を輝かせて背後の家屋を見つめて言った。

「まあ、あれがレイン様のお屋敷ですね。質素な中にもエレガントな感じがにじみ出ていますわ」

「あれ、あたしのうちだけど」

レイコの声は軽く一オクターブは下がった。

「まあ、なんて下品な小屋なんでしょう」

こ、このアマ……。殺意を抱いてみたりするヘレネであった。

「ところで今夜、水神祭があるんですけれど、ご一緒しませんか？」

ころころと話題を変える女である。レイコはレインをじっと見つめ、デートの誘いを切り出したようだ。

「そうそう。僕もそれでヘレネを誘いにきたんだけど」

「へ？ あたし？」

いきなりこちらに振られ、ヘレネは少々とまどった。

「レイン様が浮気、うわき、ウワキ……」

一人でビブラートを加えながらよろめきふらつくレイコ。

「ああ、良かったらレイコさんも一緒にどうぞ？」

「ご一緒させていただきますわ！」

コンマ一秒で立ち直るレイコ。忙しい女である。見ている分には楽しいかもしれないが。

しかしこの男、意外とプレイボーイかもしれない。と考えてみたりもするが、レインのことだからやはりいつも通りに何も考えていないのだろう。

「ま、いっか」

ヘレネはあまり深くは考えないことにした。頭をかきながら家屋へ入る。洗濯かごを戻すついでに台所の姉に声をかけた。

「お姉ちゃん、今夜、お祭りに出かけてもいいかな？」

「あー？ 祭りい？」

奥から、黒髪の女性が顔を出した。

ささくれた雰囲気を持つ黒髪の女性。紙巻きタバコをくわえて、面倒くさそうな表情がノーマル状態。もう少し身だしなみに気を遣えば美人に化けるに違いないのだが、気を遣わない。彼女が、ヘレネの姉である。

「あら。ヘレネさんのお姉さまでいらっしゃいますの？」

無遠慮に、レイコが姉をまじまじと眺めた。

「……あまり似てませんわね。髪も黒いですし。っていうか、ヘレネさんが似てないのかしら？」

失礼なことを平気で言う女である。ヘレネは憮然とそっぽを向いた。

髪の色が豊かなアルマフレアの民だが、黒髪の家系は代々黒髪であることが多い。

ヘレネは四人兄弟の末娘。他三人は皆黒髪だが、ヘレネだけ空色だったりする。

もしかして禁句だったのかしら？ とさすがのレイコも二の句が継げないようだ。

そこヘレインがのんびりした調子で口を開いた。

「ほら、劣性遺伝って四分の一の確率だし」

「あんたはあたしが何か劣ってるとでも言いたいわけえええ!？」

「いや、そういうわけでは」

首を絞められがくがく振り回されながらも、レインの調子はいつも通りだった。

「とにかく！ あたしはれっきとしたこの子供なんですからね！ 戸籍だってちゃんとあります！」

「相変わらずね、あんたたち」

ハスキーな声で、姉が言った。眠たそうな目が、少しばかり愉快げだ。

「ヘレネはよく橋の下で拾われたなんてからかわれたからねえ」

「ああ、僕も玄関の前に捨てられてたなんて言われたことがあったっけ」

「あらあら、奇遇ですわね。わたくしも孤児院からもらってきたのだ、親戚中たらい回しにされたあげく、うちに落ち着いたのだと言われたことがありましてよ」

なんだかどこの家も似たようなものようである。内心ほっとするヘレネだった。

外出許可も取り、さて、夕方。

ヘレネ・レイン・レイコの三人は町はずれの教会へ向かっていた。

シュラインの町の教会は大きく、町の一角を占める。その中には教会本館や礼拝堂の他にも、格下の神官が住む修道院、療養所や学問所もある。

ヘレネはその公開教室で魔法を習った。公衆浴場もちよくちよく利用している。

しかし、町の中央部に位置する繁華街や住宅街からは隔たりがあり、教会へ行くには途中にある大きな森を抜ける必要がある。

一本道だし三〇分も歩けば抜けられるのだが、夜にはゴブリンやコボルトといったモンスターが出るという噂もある。

念のため、ヘレネはいつもの魔法使いルックで出かけることにした。レインも道場で愛用している皮の胸当てを着込み、剣を腰にぶら下げている。ちゃらちゃらしたドレス姿はレイコだけだ。

「ほほほほほ。レイン様が守ってくださるから、わたくしは何も心配する必要がなくってよ。ヘレネさんはせいぜいレイン様の足を引っ張らないようお気をつけあそばせ」

彼女の傲慢な台詞は聞こえないことにした。

見渡してみると、日暮れまでにはまだ時間があるが、森の中というだけあって既に薄暗くなってきている。じっとしていると、森のざわめく音が不気味に思えてくる。

「ところで、水神祭ってどんなお祭りなのかしら？」

「あらあらヘレネさん、そんなことも知らなくて？」

レイコが自慢たらたらに説明を始めた。

アルマフレア王国には梅雨と呼ばれる雨期があるが、作物が大きく育つ真夏の時期は、干ばつにみまわれる年が多い。

そして、ニーナという水を司る女神がいる。水神祭とは、年に一度、その水神ニーナに雨乞いをする儀式なのだ。

とはいえ、多くの出店が並び、飲食や宴に盛り上がるといういわゆる『お祭り』には違いないが。

「教会内で選ばれた女性神官が水神に扮して、聖水を振りまきながら教会街を練り歩きますのよ。誰が選ばれたのかは、儀式が始まるまでわかりませんのよ。今年は何なたが演じるのか楽しみですわね」

「聖水かあ……」

レイコの説明を、ヘレネは反芻する。

聖水とは、神官によって清められた水のこと。

現在ヘレネは、こまめに水浴びをすることによって『変なヤツ引き寄せ体質』を緩和させている。聖水ならさらなる効果を期待できるだろうか？

——と。

がさりっ、という草木のこすれる音で、ヘレネは思考を中断した。ハッとなって辺りを見回す。

「何かいるみたいだね」

普段はぼけてても、こういうときは剣士志願なだけはある。レインが珍しくまじめな形相で周囲の気配を探っている。

木々の陰から数体、ヘレネ達を取り囲むように現れた。四つんばいのもので屈むような姿勢ながら二本足で立っているものとあるが、全てが犬の頭を持っている。あれは、コボルトというモンスターだ。

「大丈夫。コボルトくらいならなんとかなるよ」

「けど、なんだか様子がおかしいわね？」

レイコの言うとおりに、コボルト達はすぐには襲ってきそうもない。ハッハハッハ言いながらしっぽを振っている。

「もしかして、発情しているんじゃない？」

げげげ。ぽつりとしたレインの台詞に、ヘレネは思わず数歩後ずさった。ヘレネの体質は、人間以外にも有効なのだろうか？

「レイン、全力をもって倒しちゃって！ あたしも、呪文、呪文……」

魔導書を引っ張り出そうとするが、焦っているのか引っかかってなかなか取り出せない。

「にー！」

そこへ突如、別の動物がヘレネ達の間へ割って入ってきた。また発情動物？ とびびるヘレネだが、すぐに違うことに気づいた。

大きさは、中型犬くらいある。しかし身体のラインは猫に近い。大きな猫のようにも見えるが、耳がウサギのように長い。くりくりとした大きな瞳、真っ白でふさふさの体毛はこまめに手入れされているようで、野生の動物やモンスターとはとても思えない。

「にー！」

猫(?)は、もう一度鳴いた。いや、吠えたのだろうか？ 発情コボルトは、明らかにたじろいだ。すぐに、口惜しそうに逃げていった。

静けさが取り戻されて、しばし。ヘレネのついた息が合図となったか、白い獣がヘレネの方を向いた。

「にー」

今度は甘えるような声で、ヘレネの脚にすり寄ってくる。めっちゃラブリーである。

「うわー、可愛い」

思わず抱き上げてしまう。結構大きいので、前足を持ち上げるだけだが。

表情がわかるはずもないが、白い獣は微笑んでいるようにも見えた。

お礼を言って頭をなでると、獣は気持ちよさそうに目を細めた。

レインがかがみ込んで獣をのぞき込み、感心したように言った。

「やっぱりヘレネって動物にももてるんだ」

「……微妙に含みのある言い回しね」

まあ確かに発情コボルトは、『変なヤツにもてる』の範疇に入るのかもしれないが。

「何の話ですか？」

レイコはヘレネの体質については知らなかった。もちろんそれをうち明ければ、大笑いされるに違いない。

「そうそう、魔法の勉強しなきゃ」

ごまかすように、魔導書を取り出し、適当に開いた。いぶかしげなレイコにかまわず、魔導書を読み上げる。先を急がなくちゃと、呪文を唱えながら歩き出した。

歌うような呪文詠唱。あんちょこがあれば、ヘレネは上手に呪文を唱えることができる。

その呪文に、別の歌声が混じた。

「ある日、ある日、森の中、森の中。アスさんに、アスさんに、出会った、出会った」

ヘレネはアスタリスクに出会った。

「出会うなあああああ！ 魔龍焔噴嵐【バーニング・ストーム】！」

ハンドステッキを突き出して、とりあえず唱えていた火炎の魔法を放つ。一瞬赤い光が放たれるが、しかしその後はぷすぷすくすぶるだけだった。

ヘレネはまだまともに魔法に成功したことがないのだ。思わず木の幹に手をつけて、落ち込んでみたりする。

「おお～、乙女よ、泣くのならこのアスタリスクの胸で泣くがいい～！」まだ歌ってる。

ヘレネの頭の中に、『戦う』『魔法』『ツッコミ』『逃げる』といった選択肢が浮かんだ。ヘレネが選んだのは、当然『逃げる』だ。『ツッコミ』も捨てがたかったが。

「乙女よ、なぜ逃げるのだ！」

長身マッチョ、ブーツとマントとマスク。自称正義の使者だが、どう見ても悪役のコスチューム。アスタリスクのその正体は、ヘレネの追っかけその二こと変態さんである。

見たら石を投げるか指さして笑うか、ダッシュで逃げるのが妥当な選択肢だろう。

森の景色が流れる中、レインが併走しているのが見えた。

「すたこらさっさっさのさ〜」

「歌うな！」

この男、やはり微妙に変だ。

「レイン様の素晴らしい歌声になんてぞんざいな！」

レイコもすぐ後ろをぴったりついてきていた。ひらひらドレスをものともしない。

「いや、この歌って、妙に耳に残らない？」

「まあ、それは否定しないけど」

妙なインパクトのある歌は、嫌でもリフレインする物ではある。

息が上がるまで走り続け、たまらず足を止める。ばくばく言う心臓を押さえ、ヘレネはしゃがみ込んだ。息を整えて振り返ると、三人以外の気配はもう無かった。

「なんとかまけたみたいだね」

「万事オーライですわ」

「レイコさんまで一緒に逃げることはなかったんじゃない？」

「何をおっしゃるのヘレネさん！ わたくし、レイン様にどこまでもついていくと心に固く誓ってしましてお！」

「いや、まあ、なんだかもうどうでもいいんですけど」

なんだかたくさんの物をあきらめるような感じで、ヘレネはため息をついた。

見ると、森の出口はすぐそこだった。その先には、街の明かりも見える。

「行こう」

今度はレインが先頭を歩き出した。レイコが寄り添うように横へつき、ヘレネが間へ割るように入る。二人の少女はぎゃーぎゃー言い合いながら、少年は無関心にのほほんと、うっそうとした夕刻の森を後にした。

さて。

森の出口を象徴するかのよう、大きな樹が二本並んでいる。二本の樹の間には、手をつなぐようにそれぞれから枝が伸びている。

その枝に腰掛ける女性の姿があった。

「相変わらず面白い子ね、ヘレネちゃんって」

「に一」

女性の隣には、純白の獣がちょこんと座っている。

遠ざかっていくヘレネ達を眺めている女性。きらめく薄紫色の髪、場違いだが彼女にはよく似合う清潔そうな白衣。治療師カーナである。

そのカーナの隣には、先ほどの猫ともウサギともつかない動物がちょこんと座っている。カーナはこの

動物の言っていることを正確に理解していた。

「そう、あなたも気に入ったの。雷神【ヴィーナ】もずいぶんと追いかけて回していたし、やっぱり私たちって似た者同士なのかしらねえ」

カーナの外見は二〇代後半だが、その屈託のない笑みは、うら若い少女を思わせた。

彼女はふと、真顔に戻った。ここから視覚では見えないが、森の中央部に焦点を合わせる。

ヘレネが放った、失敗火炎魔法。そこは焦げ付いたにおいを放ちながら、いまだくすぶり続けていた。

「けど、火神【ターナ】を怒らせちゃったみたいね。大丈夫かしら？」

\*

祭りは予想通り、盛況だった。

あちこちに篝火がもうけられ、空は既に真っ暗だが、教会街は昼間のように明るくにぎやかだ。

ヘレネは露店でフライドチキンを買った。ガーリックがきいてなかなか美味だ。ただ、こういう催しの時は妙に値段が高いのは何とかならないものだろうか。

レインはダーツゲームでパーフェクトをたたき出し、そばではレイコがくるくる回りながら身もだえていた。

「かのように恐ろしい、魔導師オツマ率いるモンスター軍が、アルマフレアを襲ってきたのです」

と、一本調子な声が後ろから聞こえてきた。

見ると、ござの上にあぐらをかいて、リュートを弾きながら語らいている男がいた。旅に耐える丈夫さながらファッション性にも気を配った衣装。吟遊詩人だろう。彼は単調な歌声で、七年前の伝説を語っている。

「禁呪、城塞烈壊弾【キャッスル・マッシャー】を城から奪ったオツマは、ここぞとばかりに攻め込んできたのであります。城は無惨にもうち砕かれ、城下町は血と炎で塗りたくられ、真っ赤な海となりはてました。しかしそこへ現れたるは、アルマフレアが誇る四大英雄！」

吟遊詩人の語りに熱がこもってきている。

その語りの通り、アルマフレア城は七年前に一度、崩壊した。その戦争によって、ヘレネは両親を失っている。現在は、二人の兄の稼ぎによって生計が成り立っている。

父は左官、母は仕立て職人で、よく城へ出入りしていた。よりによって両親とも城へ出向いているときに戦争が始まらなくていいだろうにと、今もなおやりきれない気持ちになる。

南の夜空が赤く染まり、周りの人たちが右往左往しているのを不安げに見つめていたことを、幼心に覚えている。

「剣豪カール、神官ワイオニー、魔導師クーマ、そして英雄ケイン！ 彼らの活躍に喚起し、人々は立ち上がりました。人々はモンスター軍に立ち向かい、英雄達は王族を救い、そしてケインは果敢にも単身オツマとの対決へ！」

その結果がどうなったかは聞くまでもない。今の平和な生活がその答えとなっているのだから。

立ち去ろうと振り返ると、レイコとレインも吟遊詩人の語らいを聞いていた。レイコがうっとり聞き惚れている。

「ああ、お父様……素晴らしいご活躍でしたのね……」

「そういえばレイコさんのお父さんは剣豪カールなんだよね」

レインが言うと、レイコは嬉しそうにこくこく頷いた。

「カール様のご活躍を聞いて、僕も剣士を目指すことにしたんだ」

「レイン様ならきっと立派な剣士になれますわ！ ああ、父と夫と、英雄を二人も持つわたくしは、なんて果報者なんでしょう……」

今にも失神しそうなほどにウツリと妄想にふけているレイコを、ヘレネはなるたけ見ないことにした。どうやったらあんな偉大な剣士からこんな変態娘ができるのだろうか？

と、語らいがやんだ。周囲のざわめきもほとんど消える。代わりに、ぱしゃ、ぱしゃ、と水の跳ねる音が規則正しく聞こえてくる。

大通りの中央を、一人の少女が歩いている。

ゆったりとしたアルマフレアの民族衣装。外国から様々なファッションが流行として取り入れられているので、最近はおっぱら正式な場でしか着られなくなってしまったが。

ヘレネと同じくらいの年頃だろうか？ 深緑色の長い髪を二つに束ねた、綺麗な少女である。

彼女の両脇には、十数人の神官が取り巻いている。長い長い龍（の模型）を担ぎ上げ、くねらせ、踊らせている。少女はその龍の口元から柄杓で水をすくい、それをまく。綺麗な水しぶきとなり、一瞬虹を見せながら、地面をしめらせる。

どうやらこれが聖水の儀式らしい。アルマフレアの民族衣装は、かつては神族が着ていたというから、水をまいている彼女が、水神役なのだろう。

ヘレネは、その少女に見とれていた。

「綺麗な人ねえ……」

無知もここまで来たかと言わんばかりに、レイコがあきれて言った。

「ヘレネさん、あの方をご存じないの？ あの方は……」

「ヘレネちゃんも十分綺麗だぞお！」

レイコの説明は、だみ声によって止められた。

人混みをかき分けるように現れる巨大な影。いわずもがな、ハイフンである。

逃亡を決意した瞬間には、ハイフンは息を切らしてヘレネの前で立ち止まっていた。

周囲の、奇異の視線が痛い。

「そんなヘレネちゃんにこれを！」

「え？あたしに？」

バラのリボンが添えられた包みを受け取った。

苦手なハイフンといえど、プレゼントされれば悪い気はしない。逃げるのは後回しにし、がさがさと包みを開けてみる。

すけすけのネグリジェだった。

それを見て、腐ったトマトのように顔を赤くしてハイフンがもじもじと言った。

「それを着て毎晩俺のところへ！」

「行くわきゃないでしょおがあああああ！」

どがこおおんっ！

ニメートル近くにあるハイフンの顔面を、ヘレネは見事なハイキックで蹴り飛ばした。

もんどり打ってひっくり返るハイフンを容赦なく踏みつけコンボ。ヘレネの運動神経は並だが、こういう瞬間だけは一流戦士並になったりするのだ。

「あああああ、もっともっとお～！」倒錯的なハイフンの悲鳴。

かかと落としに切り替え、さらに踏みつけてやる。



もちろん言われたからそうしているのではなく、この手の輩は息の根が止まるまで踏み続けるべきだと、ヘレネの本能がそうさせているのだ。

ぷしゅううう、と火を消したばかりのたき火のように、ハイフンから煙が立ち上っている。ヘレネはぜいぜいと、複雑そうに息を切らせている。周囲の人たちはもちろん、レイコもレインも儀式中の神官や水神役の少女も、ぼう然とその光景を眺めていた。

ちゃらら～。ちゃらりら～。

沈黙を、笛の音が打ち破った。ヘレネは額をたたいて自分の運命を呪った。

ハイフンに続いて現れた変態さんは、正義の使者、アスタリスクである。横笛を小器用に吹いている。

周囲の人たちのひそひそ声が耳に痛い。

「乙女の危機に現れる！ 少女の悲鳴が我を呼ぶ！ 乙女よ、私が来たからにはもう安心だ！」

「いや、もうそれほどピンチじゃないんですけど」

ぱたぱた手を振りながらお引き取り願うが、アスタリスクは傲然と胸をふんぞり返した。

「ふっ。乙女よ、あなたは私を見くびっているようだ」

「？」

「言ったであろう。乙女の危機に現れると。逆説的に、私が現れることが乙女【あなた】のピンチ！」

「確信犯かあああああ!？」

これまでの最大ボリュームで、ヘレネは叫んだ。

「もちろん冗談であるぞ、乙女よ」

「まるっきり見事に完璧なまでに冗談になってないんですけど」

ヘレネはもう、くたびれてきた。

「それはともかく。乙女を辱めし痴れ者め！ 正義の鉄槌を受けるが良い！」

「変態に言われとうないわ！」

アスタリスクが宣言すると、ハイフンはこれまでのダメージを全て否定して元気よく起きあがった。

火花を散らしてにらみ合う変態二人。

「ふっ。雌雄を決するときが来たようだな」

「どっちもオスでしょうが。まったく」ヘレネのツッコミには容赦がない。

一触即発の雰囲気の中、誰かが息をのむ音が聞こえた。ヘレネ自身の物だったのかもしれない。

——と。

最初に聞こえたのは、野次馬の一人の声だった。向こうの空を見て見ろ、と。ざわめきが起こり、ヘレネもその方角を見た。

東の空が、赤く光っている。もちろん、夜明けに近いわけではない。まだ日が暮れて間もない。あの揺れるような赤い光は——

「まさか、火事？」

ヘレネ達がここへ来る途中に通った、森の方角だ。その森が焼けているようだった。

「ヘレネさんの魔法が、また暴走？」

レイコが呟いた瞬間、ヘレネは弾けたように駆けだした。

「ヘレネ！ 一人で行ったってどうしようもないよ」

レインにたしなめられ、足を止める。

あの火事の原因が自分にあるのなら、だからといって黙って見ているわけにもいかない。けど、どうすれば良い？

消防隊の出動を待っている余裕はない。そもそも、あの森が焼けるとなると消すのも大事だ。

ヘレネの目に、水神祭の龍が映った。儀式の際、打ち水に使われる龍。その中には聖水が入っているはずだ。

聖水。神官によって清められた聖なる水。あの水ならもしかしたら……と、ヘレネは水神役の少女に駆け寄った。

「お願い、その聖水を貸してください！」

返事を聞かずに、ハイフン・アスタリスクへまくし立てる。

「そこの二人！ 龍を持ってあたしについてきて！」

「よっしゃあああ！」

「了解したぞ、乙女よ！」

ヘレネはその小柄な身体を精一杯の速度で走らせる。それでも森の入り口まで、五分以上かかった。

「ヘレネ！」

「ヘレネさん、なんてむちゃくちゃなことを！」

レインとレイコもついてきていた。

森の中へ入り、轟々と燃えさかる木々を見上げる。パチパチとはぜる音は、木々の発する悲鳴のように聞こえた。

「ハイフンさん、アスタリスクさん、その龍を思いっきり振り回して！」

「ラジャー！」

二人の大男は見事な連携で張りぼての龍をぶん回した。木々に当たり、めきめきと音を立てて壊れる代わりに、中の聖水が噴出した。

ごうっ！

しかし、勢いが弱まるばかりかかえって火の勢いが増してしまう。

「半端な水は、かえって火の勢いを強めてしまうんだよ！」

落ちてくる火の粉を振り払いながら、レインが叫んだ。いきなり万事休すだ。

どうする？ もう消防隊に期待するしかないのだろうか？ ヘレネは必死に考える。

自分のせいでこんな事態になって……。ヘレネはひどく悔やんだ。この紅蓮の景色からは、両親を失ったあの夜を思い出す。もうあんな思いはしたくない。

「そうだ！ 魔法！」

ヘレネは懐をまさぐり、魔導書を取り出した。これには水の魔法も記述されているはず！

「ヘレネさん、気は確か？ また暴走したらどうするんですの！」

ヘレネには聞こえていない。迷っている暇はない。できる限りのことはやらなくちゃ。

破れんばかりに魔導書をめくり、目的のページを見つけた。勢いよく読み上げ、ハンドステッキを構える。

「闇滅烈水波【アクア・スパート】！」

……………。

杖を突き出して、しばし。炎のはぜる音のみが響いていた。

やっぱり、失敗？

脳裏をそんな言葉がよぎった。

もはや打つ手を無くした。あきらめかけたそのとき、見覚えのある動物がヘレネの前にいつの間にかたたずんでいた。

「あなたは……」

炎に照らされ赤く見えるが、その身体は本来は真っ白な物であることがわかる。身体のラインは猫が近

いが、中型犬並の大きさで、ウサギに似た長い耳。

発情コボルトを追い払ってくれた、この森に住んでいると思われる獣だ。

その獣は、後ろ足で立ち上がった。鼻をひくひく空を仰ぎ、

「に一！」

突如、大声で鳴いた。

次の瞬間、

どばあっ！

森の奥から、出所【でどころ】不明の洪水が押し寄せてきた。

「によおおおおお!?!」

我ながら素っ頓狂な悲鳴を上げ、思わずヘレネは逃げ出した。

が、人間の足が大自然の猛威にかなうわけがない。程なくヘレネは洪水に飲み込まれた。

……………。

「ヘレネ！」

誰かに揺り動かされている。姉に朝起こされるとき、ヘレネは決まってそれを振り払う。いつものように腕を払ったとき、思い出した。がばっと起きあがる。

「レイン！」

そこにいたのはレインだった。安心したような笑みを浮かべている。

「みんなは？」

彼はあたりを見渡した。視線を追うと、レイコ・ハイフン・アスタリスクがひっくり返っているのが見えた。

「うーん、うーん、寝る前にはちゃんとトイレへ行ったじょおお……」

「乙女、乙女はいずこ……？」

「この恨み……この恨み……いつか晴らして差し上げますわ……」

ずぶ濡れになりながら、三人は半分意識を失いながらもうめいていた。

レイコなんかは水たまりに顔面を埋【うず】めて、ぶくぶく何かを呟いている。

まあ、とりあえず、みんな無事のようなだった。

「って、なんであんただけなんともないのよ？」

「ああ、手近にあった木に登ったんだ」しれっとした調子のレイン。

トロそうでいてこの男、意外に侮れない。

「そうだ、火事は？」

レインは微笑を浮かべ、周囲を手で振って見せた。

完全に鎮火している。あれほどの洪水だったにもかかわらず、木々に痛みはまるで見えない。それどころか、焼けこげた跡さえ消えていた。むしろ、みずみずしさを増し、森の歌声が聞こえてくるようだった。

ぱしゃりと水を跳ね、誰かがヘレネの前に現れる。

見た目は一〇歳くらいだろうか。ヘレネにも似た、水色の長い髪。風もないのに、ふわふわとたゆたっている。

ゆったりとしたその衣装は、アルマフレアに伝わる民族衣装だ。その衣装がよく似合う、とても可愛い女の子だった。

見た目はまるで違うのに、ヘレネにはわかった。彼女は――

「に一」

あの白い獣——彼女は、猫に似た鳴き声を上げた。優しい、満面の笑みを浮かべながら。

「に一！」

もう一度、今度は大きな声で鳴き、彼女は青い光と化した。あっという間に上空へ駆け、夜空にとけ込んで消えた。

見ると、レイン達もぼう然と空を眺めていた。

「水神ニーナ……」

ぼつりと、レインが呟いた。

「水神……彼女が？ あの白い動物が？」

ヘレネの問いに答えられる者はいなかったが、誰もがたぶん間違いないと思っていた。

水神ニーナが起こした洪水。すさまじい勢いだったにもかかわらず、森はむしろみずみずしさを増していた。たぶん、あれが本物の聖水だったのだろう。

「ってことは、あたしの体質も治ったのかしら？」

あまり意味はないが、自分の手を見してみる。

焼けた木をもよみがえらせる聖水なら、ヘレネの体質にも何らかの改善があるはず！

「ヘレネちゃん、無事で良かったじょおおおおお——っ！」

「やっぱダメか」

深いため息をはきつつ、ずんどどどどど、といきなり現れたハイフンの突進をかわす。ハイフンは巨木に体当たりし、沈黙した。

あたしの体質が治るのは、いつになるのかしら？

事態から解放されたヘレネは、いつもの悩み事に頭を抱えていた。

\*

祭りを行っていた教会では、森の火事が鎮火するのを見、安堵と歓声が上がっていた。

それに対し、儀式を邪魔された神官達は怪訝そうにうめいていた。

「なんなんでしょうな、あの失礼な小娘は？」

神官の多くがヘレネを非難する中、水神役の少女がそれを擁護した。

「けど、あの水を使って消したのなら、それはそれでいいんじゃないでしょうか？」

「馬鹿な！ あれは聖水ではなくただの水ですぞ。それもあの程度の量で消せるはずがない」

「ではどうやって消したというのでしょうか？」

沈黙が訪れた。それをうち破ったのは、頭ひとつ背の高い壮年の神官。神官服の色と飾り物から、高位の神官とわかる。

「王女様」

「ここでは名前でご呼んでください、ワイオニー大神官」

「失礼しました、フィルリア様」

「それで、なんなのでしょうか？」

「はい。あの娘は、ヘレネ・アクアマリンという魔法使い志願の少女だったかと。レイコお嬢さんが何度となく愚痴をこぼされておりましたので、見覚えがあります」

「ヘレネ・アクアマリン……魔法使い志願ですか」

「見習いだろう？ そんな半人前に、あの火事が消せるとでも？」

神官達は、否定してばかりだ。

「もし、あの火事を消したのが彼女なら……」

ワイオニー大神官は、首をひねった。

「レイコお嬢さんがおっしゃるほど低俗で無能なレベルゼロ魔法使いとは思えないんですがねえ」

なんか、むちゃくちゃ言われていたようである。

「あーもう、せっかくのドレスが台無しですわ！」

「まあまあ。大事には至らずに済んだんだからよしとしようよ」

「そうですわね。レイン様のおっしゃるとおりですわ」

レインとレイコは無視して、ヘレネはこきこきと首をならした。

「あー、なんか疲れちゃったわ。今日はもう帰りましょう」

「乙女よ、私の背をお貸ししますぞ」

「ヘレネちゃんは俺が送るんだ！」

「一人で帰れるから放っておいてよおおおおお！」

いつもの追いかけてこを始める連中に、レインとレイコは顔を見合わせて吹き出した。

街の明かりを目指して森から離れていく、そんな一行を見下ろし、夜の虚空には二つの影が浮いていた。

一人は白衣の美女、治療師カーナ。

もう一人は、水神ニーナである。現在は人間形態をとっている。

カーナはニーナに聞いた。

「無理に召喚に応じることもなかったんじゃない？」

「にー」

「そう。あの子の必死な姿に、いたたまれなくなったのね。わかるわ」

微笑みながらも、カーナは深い息をひとつ吐く。

上空から、森を見下ろす。火は完全に消えている。だが、代わりに人影がひとつある。怒りに満ちているのが見て取れる。

カーナはそれが誰かを知っていた。

「けど、これで完全に火神【ターナ】が敵に回るわね。どうしたことやら」

彼女のため息は、夜風に流されていった。

### 第三話

---

深夜の町はずれにある貯水池は、人気【ひとけ】もなく静まりかえっていた。いや、鈴虫や蛙の鳴く声が、控えめに響いている。暗い夜空には、欠け始めたいびつな形の月が、おぼろげに輝いている。どうやら薄曇りらしい。

ハイフン・マスカレードは、その巨体を小さく縮こまらせて、ぼーっと貯水池を眺めていた。  
「はあ……ヘレネちゃんは何で俺に見向きもしてくれないんだろう」

足下にあった小石（直径約五〇センチ）をサイドスローで投げる。水面を跳ねれば良かったのだが、大きな水柱をたてるだけだった。近くで羽を休めていた鳥がばさばさと逃げていった。

ハイフンは落ち込んでいた。毎朝毎晩、愛するヘレネに求愛を続けているのだが、彼女はひらりひらりとこれをおかしてしまふ。小悪魔な天使、という表現が適切かもしれない。

毎度毎度、ここぞというところで、宿敵アスタリスクが邪魔に入るのも問題かもしれない。  
「そうだ。まずはあの憎き変態をなんとかせねば！」

勢いよく立ち上がり、足を踏みならす。地響きとともに、水辺に波が立った。  
ふと、ハイフンは見た。水辺に沿って、遠くからやってくる二つの人影を。

闇が空を支配している。月明かりも雲に遮られ、かすかな虫の鳴き声が、闇におびえるように響いている。

雲が動き、わずかに月明かりが差し込んだ。

遠くに大きな町がある。後方には、アルマフレア城がそびえ立っている。

アルマフレアの城下町からほど遠いその広野で、二人はほっと息をついた。

「ううう、怖かったんだじょお。本当にグールがでるとは思わなかったじょお」

「変な口調はおやめ！ あたしだって死ぬ思いだったんだからね」

小柄な少年と、少し年上の長身の女性。

先日、ヘレネたちと死闘を繰り広げたコロン・チルダ姉弟である。

彼らは食い逃げや万引きなどの悪事を積み重ねた末、アルマフレアの地下牢に放り込まれた。

しかし、どうやら脱獄してきたようである。

「脱獄までするとは、俺たちもワルだよなあ」

「当然さね。あたしたちはシュラインの町で一番の極悪人なんだからね！」

「そう！」

「俺たちこそが！」

「てなもんやの大悪人～！」

闇夜で肩を組んで歌う二人の姿に、近づいてきていたゴブリンが後ずさって逃げていった。よほど不気味だったらしい。

「それよりも、これからどうするんだい？」

チルダが姉に問う。コロンは濃いめの美貌を、わずかにしかめた。

「そうさねえ。思うんだけど、あたしたちの悪を貫くには、メンバーが足りないね」

「なるほど。まずは、頭脳の俺様！」

「そして、美貌のあたし！」

弟がきらりと目を光らせると、姉がきらりと齒を光らせる。光源がどこかは謎である。

「つまり、足りないのはパワーだね」

半端な冒険者など寄せ付けぬ腕力と、三人寄ってもモンキーの知恵だということには、彼らは気づいていない。

「そう。あたしたちに引けを取らず、なおかつあたしたちを引き立ててくれるような第三の悪が必要なんだよ！」

そのとき、かすかな風が荒野をなでた。雲が流れ、月明かりに照らされる。

二人はいつの間にか、シュラインの町はずれまできていた。貯水池の水面に、月がゆらゆらと映し出されている。

そこには、一人の大男がいた。立てばビア樽座ればタライな感じの縦にも横にもでかい大男。彼も気づいたらしく、こちらに目を向けている。

アルマフレアの三悪人、結成のきっかけとなる運命の出会いであった。

\*



ヘレネの部屋は、東側に面している。小窓ももうけてあるので、朝日を目覚まし代わりにするにはもってこいだ。

だが、この朝ヘレネは朝寝を満喫していた。

ベッドも布団も堅めだが、寝心地は悪くない。顔を半分埋め、万歳の格好でヘレネは熟睡中である。

今日の家事は姉が当番で、学問所の公開教室も休校日。こんな日は月に一回か二回程度しかないので、たまにはのんびりとした朝を過ごしたっていいだろう。

……が。

ふうっ——

「によおっ!？」

ごんっ!

耳元になま暖かい物を感じ、反射的にベッドを転げ、壁におでこをしたたかに打ち付けてしまった。

「あ、あだだだだ……」



頭をさすりながら、上体を起こす。寝ぼけ眼に映ったのは、治療師のカーナだった。

「あれ？ あたし、いつの間に診療所へ……」

「おはよう、ヘレネちゃん」

にっこりと、カーナが艶やかな笑みを見せている。

なんでカーナ先生がここに？ という疑問よりも先立つものがヘレネにはあった。

「カーナ先生、今し方あたしに何かしました？」

「ん？ ああ、耳元に、やさし〜いモーニングコールを、ね」

「な、なんつ一起こし方をするんですか！」

「だって、普通の起こし方だと叩かれるって、あなたのお姉さんから聞いたから」

姉も、歪曲して話を伝えるものである。……いや、振り払った手がたまたま姉の顔面に直撃したことがあったようななかったような気がしないでもないが。

「それで、こんな朝から何の用ですか？ 定期検診じゃなかったと思いますけど」

惰眠の邪魔をされたせいか、ヘレネは少し不機嫌だった。

ヘレネは『変なヤツ引き寄せ体質』という難病（というのかどうかはともかくとして）のため、週に一・二度、カーナ治療院へ通院しているのだ。それにしたって、往診に来るほどのことでもないし。

「朝だったって、もう一〇時近いんだけどね。」

と、そうそう。この前の水神祭中断事件について、事情聴取に来ただけ。役所の代理でね」

さああっ、といきなり目が覚めてしまった。

そういえば、あの事件の後、ロクに説明も報告もしないまま家に帰ってしまったような気がする。

「あ、あ、あの、あ、あ、あれにはいろいろ事情があって……」

しどろもどろにうろたえながら、何とか説明を試みようとするヘレネだが、うまく言葉がまとめられない。

考えてみれば、水神祭で使う龍の模型を木っ端みじんにしているのだ。しかも事後報告すら無しというのは、以前に起こした『商店街落雷壊滅事件』よりタチが悪いかも知れない。

そこへ、カーナのいたずらっぽい笑みが追い打ちをかけた。

「神官たちは特にご立腹でねえ」

「あああああ、やっぱりいい」

頭を抱えながら、ベッドへ逃げ込むヘレネ。出来ればもう一度夢から覚めたかった。

「で。あなたに会って話がしたいという方がいるんだけど」

「……どんな方なんですか？」

布団をちょっとだけめくって見ると、カーナは真顔だった。しかしどことなく優しげな印象があった。

「水神役だった子、覚えてる？」

言われてすぐに、ヘレネは思い出した。龍の模型からひしゃくで水をすくい、まく姿。アルマフレアの民族衣装に身を包んだ、深緑色の髪のきれいな少女だった。

「名前は、フィルリア・アルマフレア。アルマフレア王国、第二王女よ」

いきなり出てきたとんでもない単語に、ヘレネの思考は追従できなかった。

「は？」

だから出てきた返事は、とても間抜けな物だった。

「彼女、あなたに興味をお持ちになられてね。是非会って、あなたと話をされたいそうよ。場合によっては水神祭の件もお許しいただけるかもね。どう？ 行く？」

「行くってどこへですか？」

頭の中が真っ白になったまま聞き返すと、カーナはさらにとんでもないことをさらりと言った。「だから、王女に会いによ。今、彼女は大学にいるわね。まあどのみちアルマフレア城の中だけだ。すぐに馬車に乗れば、午後一番には着けるわよ」

＊

「なぜなんですのなぜなんですの！ わたくしは、はっきり言って納得いきませんわ！」

後ろから響く、聞き慣れた少女の声。揺れる馬車の中で、ヘレネは頭痛にこめかみを押さえた。

ヘレネとカーナ、それとなぜかレインもがこの馬車の中で腰掛けている。今回、のけ者にされたレイコが、自前の馬車で猛追をかけているところだ。普通の人なら膝立ちすらまならぬ揺れのはずなのに、メガホン片手に仁王立ちでわめいている。

「入城するなんて、ましてや王族に会見なさるなんて、貴族ですらなかなか出来ることではありませんのよ！ それを下賤で低俗で野蛮で一般ピーポーなヘレネさんごときが会見だなんてぼぶああっ！」

叫び放っている途中で舌をかんだか、レイコが口元を押さえたままもんどり打って馬車から転落していった。なんか顔面スライディングもしたみたいだ。

そのまま追撃中の馬車も次第に離れていき、幾分静けさが取り戻された。

「ねえ、あのままで良いのかな？」

こちらの馬車は幾分マシとはいえ、しゃべるのが一苦労なくらいの揺れはある。レインが手すりにつかまりながら、言いづらそうにそう言った。

馬車は、アルマフレア城とシュラインの街を一日に二度往復している乗合馬車で、乗り心地は決して良いとは言えない。人が歩く程度の速度まで落とせばなんてことはなくなるのだが、街から城までは歩くと一日かかる距離がある。

「だって、今回、レイコさんは呼ばれてないわけだし。それよりも、なんでレインと一緒になのかわからないんですけど」

ヘレネは、カーナへ話を振った。

「ええ、これも王女のご用命でね。ヘレネちゃんに相方がいるなら、呼んでこいって」

「あ、相方？ あの、どういった意味合いの『相方』なんですか？」

「さあ？」

振動の中、カーナは器用に肩をすくめてみせた。

よくわからないので、ヘレネも深くは考えないことにした。

「そういえば、なんでカーナさんなんか役所の使いついていうか王族と面識があるんですか？」

「あなた、微妙にあたしを馬鹿にしてるでしょう？」

にこやかにこめかみを引きつらせ、カーナの説明が始まった。

「自分で言うのも何だけど、治療師ってのはエリートなのよ。魔導師と魔法使いの違いは知ってる？」

首を振るヘレネに、カーナはやれやれとため息をついた。

「ある種の魔法を使うには、魔導師免許が必要なのよ。これは役所、つまり王国が発行しているわけね。いくつもあるのをひっくるめて魔導師って呼んでいるわけだけど……」

治療師・占い師・錬金術師・死霊術師・召喚師、などなど、ひとくちに魔導師といっても、細かく分けるといろいろある。自称の者も多いが、国が認めた魔導師は皆、魔導師免許を持っている。

「さらに、治療院を開くには治療師の免許が別に必要なの。これも国家試験ね。大学に通う必要もあるから、正式な治療師は必然的に王族とも顔見知りになるのよ。言っちゃ何だけど、あたしは王家の主治医を務めた時期もあるのよ」

胸をふんぞり返すカーナに、ほええ、とヘレネも驚くしかなかった。

「けど、王女様が何であたしに用事があるんでしょう？」

水神祭の一件なら、役所越しの説明でもいいはずだ。いろいろ忙しいはずの身分の彼女が、一般市民のヘレネにどういう用事があるのだろうか？

「ほら、ヘレネの変人吸引体質……」

「妙な言い回しはやめてちょうだい！」

とりあえずレインを小突いてから、ヘレネは自分の体質のことを思い出した。

「って、まさか王女様の変な人？ まさか！」

「確かに、まさか、ね。フィルリア様は、至ってしっかりしたお方よ。これはあたしの憶測だけど……」

耳打ちするように、カーナは言った。

「ヘレネちゃんを王宮魔導師にスカウトしたいんじゃないかしら？」

山火事を一瞬で鎮火させるほどの実力者なら、王族の目に止まっても不思議はない。とのカーナの説明に、ヘレネの思考回路は停止していた。

もしそうならとんでもない勘違いだが、ならどうということかと聞かれたら答えに窮する。ヘレネ自身、なぜ水神が助けてくれたのかわからないのだから。

——と。

どおおおおおおっ！

「んのおっ!？」

馬車を貫く爆音に、ヘレネだけでなくレインもカーナも突っ伏した。

「へーレーネーさあぁんっ！ このわたくしを出し抜くなんて、そんな人道に背いた異常事態が許されるだけでも思って!？」

「そこまで言う!？」

あまりの言いぐさに、ヘレネも絶句するしかなかった。

いつの間にかレイコが復活し、追撃を再開していたようだ。

どおおおおおおっ！

「うわあっ！」

再び響く轟音に、車体がびりびり振動した。

窓から顔を出してみると、黒装束の大男が人間離れしたスピードでこちらに近づいてきていた。

身体もでかいが、飛ぶ鳥すら落ちて来かねないほどに声がでかい。今し方の轟音も、彼の発声に間違いない。あれは、レイコのお抱え忍者、アルツだ。

「アルツ！ ヘレネさんのみ捕縛！」

「承知！」

あっという間に追いつき、アルツは馬車の横へびたりとついた。

「ど、どうするつもり!？」

「これを！」

爆声に耳を押さえながら見ると、服を一枚差し出していた。

「タカマガハラ家指定のメイド服！ これに着替えてもらった後に、我が一族秘伝の亀甲縛りを！」

「わけわからんわあああ！」

ごぎゃめり！ 窓越しの後ろ蹴りがアルツの顔面にめり込み、彼はもんどり打って転がり落ちていった。  
「へ、ヘレネちゃん、なかなかやるわね」  
くわんくわんと頭に響く残響音を堪えながら、カーナが感心してうめいた。  
しかし、アルツもやはり『変なヤツ』だったか。ヘレネは今日も頭が痛い。

＊

アルマフレアの大学図書館は、世界最大規模といわれている。蔵書数は一〇〇万を遙かに超えるそうで、なるほど本棚の果てがかすんで見える。  
「ほんっとにすごいねえ。これだけあるなら、一冊くらいこっそり持っていったって、誰にも気づかれやしないね」  
今日は閉館日である。ひっそりと静まりかえったその図書館で、コロンはほくそ笑んだ。後ろには弟のチルダ、前方には先頃仲間に加わった巨漢のハイファンがいる。  
「姉ちゃん姉ちゃん、これなんかどうだ？」  
チルダが、少しほこりをかぶった分厚い書物を一冊持ってきた。  
「もっと高そうなヤツを選ぶんだよ！ 表紙がもっとごてごてした感じの……そうさね、これなんか良い感じだね」  
コロンが引っ張り出した書物は、赤い表紙に何か幾何学的な模様が刻まれている。金箔で描かれていて、いかにも豪華そうだ。  
「背表紙のラベルをきれいに剥がしておくんだよ。古本屋に売るとき、ばれちまうからね」  
「しかし、図書館の本を盗んで古本屋に回すなんて、ワルいこと考えるなあ。さすが姉ちゃんだぜ！」  
「当然さね。脱獄したあたしたちがまた城に忍び込んでいたなんて、敵の裏をかく巧妙な作戦！ その上、図書館から書物を盗んでやるという仕返し付き！ あたしたちを敵に回すと痛い目に遭うということを思い知らせてやるのさ！」  
「そう！」  
「俺たちこそが！」  
「てなもんやの三悪人～！」  
三人が不揃いな肩を並べて合唱する。警備に見つかることはなかったが……代わりに別の声が響いてきた。

——へえ、目が高いね。それは、アルマフレア三大禁呪の一つだよ。

「誰だい!？」

切迫して辺りを見回すが、誰もいなかった。

——魔王【コスミック】が執筆した原本【オリジナル】は、持ち主に大いなる力を与える。もしもこれ

だったら、金銭には換えられないほどの物だ。

「す、すげえ！」

チルダが目丸くして、姉が手にした本を眺めている。しかし声は、まだ続いていた。

——けど、原本は、時空ねじれを利用して嚴重に封印されていると聞く。城塞裂壊弾【キャッスル・マッシャー】の原本を失って以来、管理・保管が徹底されたそうだ。時空ねじれで保管されているなら、竜族や神族でも盗掘は困難だね。

妙に説明的な、そして一方的な話し方だ。声は若く、女性のような。

——つまり、それはまず写本【レプリカ】だろうね。それでも、十分な実力者なら魔法を発動できるし、値打ちも金貨一〇〇〇枚はくだらないだろうね。

話が難しく理解できなかったハイフンだが、金貨一〇〇〇枚という部分だけは聞き逃さなかった。  
「すんばらしい！ それだけあれば、ヘレネちゃんにいろいろプレゼントできるぞ！」  
姿は見えないが、ハイフンの一言に声の主は反応したようだ。

——あんたたち、あのヘレネとかいう小娘を知っているのかい？

声の正体は気になるが、コロンは苦々しく応答した。  
「前に一度、してやられたことがあるのよ。まったくあの爆裂どっかん娘はむかつくね」  
声はしばらく押し黙った。

——力が欲しくないかい？ その小娘をねじ伏せるだけの力を。あたいと契約を交わせば、力を与えるよ。

「うおお、すげえぜ。なんか悪魔との契約みたいだ！」

「誰が悪魔さね！ 火神ターナ様をつかまえて！」

チルダの叫びに過敏に反応し、やおら女性が現れた。  
鬼火がいくつか、彼女を取り巻いている。黒髪は肩ほどで切りそろえられていて、真紅の瞳が力強く輝いている。

見た目は、二十歳前後だろうか。赤を基調とした、アルマフレアの民族衣装。ほっそりとした顔立ちとスタイルだが、むしろ勇猛果敢そうな印象を受ける。

「火神ターナ？ 火神……過信……家臣……ターナ……棚……」

「そこ！ 無理矢理ダジャレを考えない！」

「いや、そうは言っても」

ばたばたと手を振る三悪人。

「いきなり神様とか言われたって……」

「ねえ？」

「あたいに振るな」

腕を組み、ターナはきれいな顔をゆがめた。

「ともかく、もう一度聞くよ。力が欲しくないかい？ 小娘にリベンジするためにさ。場合によっちゃあ、与えてやるよ？」

「ふっ！ 見くびるんじゃないよ！」

コロロンが息巻いて胸をふんぞり返した。

「欲しい物はね、貰うんじゃなくて奪うもんなんだよ。あたしたちは乞食じゃなくて、悪人なんだからね！」

「よっ！ 姉ちゃん格好良いぞ！」

「あっはっは。当然さね！」

バックでひゅーひゅーはやし立てる子分たちに、コロロンがますます調子に乗っている。

「ええい、やるって言ってるんだから、素直に受け取りな！」

しびれを切らしたターナが強引にコロロンに組み付いた。

「な、なにをするのさ!？」

「水神【ニーナ】に不覚をとっちゃってね。今、あたいが力を使うには依代が必要なのさ。あたいは身体を得てあんたは力を得る。悪い条件じゃないだろう？」

「姉ちゃん！」

「姉御！」

チルダ・ハイフンの悲鳴をかき消し、ターナの身体が燃え上がる。その炎は一瞬、不死鳥【フェニックス】の姿を形取っていた。

\*

「ここがアルマフレア城……」

ヘレネは口をあんぐり開けて眺めていた。

跳ね橋を渡り城壁を越えると、そこは一つの街としても成立するほど広く、様々なものがあった。

本城はやや奥まったところに位置し、その周囲にはいくつか塔が立ち並んでいる。王族や一部の関係者が住んでいるらしい居住区があり、店もいくつか並んでいる。池に噴水、芝生や緑、鳥や動物もいる。

父や母はここを何度も出入りしていたが、ヘレネは今回が初めてだった。物珍しそうに、あたりを見渡している。

「あそこに塔が二つ見えるでしょう？ 左側が大学、右側が図書館よ」カーナが指を指して説明した。

双子のようにそっくりな二つの塔。その中頃の高さに、渡り廊下もある。

図書館と聞いて、ヘレネは思いついた。

「もしかして、あたしの体質を治せる本とかあるんじゃないですか？」

「……そうね。ここの図書館は一〇〇万冊を超えると聞くし、神族が記した書もあるかもしれないわね」

今にも図書館へ駆け出しそうなヘレネを、カーナは制した。

「けど、一〇〇万冊も調べる気なの？ それに、今はあの方々がご用よ」

手をさしのべた先に視線を送り、ヘレネはようやく気づいた。三つの人影が、ヘレネたちのすぐそばまで近づいてきていた。

「お久しぶりです、王子様、王女様」

「お久しぶりです、カーナ先生」

カーナが丁重に頭を下げると、二人の王女が微笑で答える。

「は、は、は、は……」

「歯が四つ？」

「違う！」

レインを叩き、ヘレネはうわずって頭を下げた。

「初めまして！ 私、ヘレネ・アクアマリンです！ 今日はわた私のような者をお呼びいただき、まことに存じがたがたがたく……」

「ヘレネ、言葉が異常」

「せめて変と言ってちょうだい！」

さらに幼なじみをひっぱたくと、二人の王女はくすくす笑っていた。カーナもにやにやしている。

「改まることないですよ、ヘレネさん。水神祭以来ですね。私がアルマフレア王国第二王女、フィルリア・アルマフレアです。こちらが私の姉で……」

「第一王女、ティアラ・アルマフレアです。よろしく、ヘレネさん」

にこりと会釈をする王女は、どちらも相当にきれいな人だった。

姉妹だそうだが、年齢差はほとんど感じられない。どちらもヘレネとあまり変わらない年頃だろう。

姉のティアラは薄紅色のロングヘアを髪飾りでまとめ、おっとりとした印象がある。

妹のフィルリアは深緑色の長い髪を二つに束ね、姉よりははっきりとした物腰だ。

どちらもブラウンをベースに配色されたロングスカートとマントを羽織っている。学生としての衣装だろうか？

と、そういえば王子様もいたはず……。

「兄様！ 物陰に隠れてちらちら様子見をしたりしないで、こちらに来てください！」

フィルリアが王女らしからぬ厳しい口調で呼び立てた。

「いやそんな、恥ずかしいじゃないか。四人もの美女に囲まれたら、僕はアガってしまう」

「まあ。妹にまで美女だなんて。お兄様ったらお上手ですこと」

「姉様は黙ってて。とにかく兄様……」

ころころと笑うティアラを制し、兄を呼ぼうとするフィルリアだが――

「そうなんだ。僕はいつだってこうなんだ。そりゃあ僕だってもっと気さくな感じで『やあお嬢さん。僕がアルマフレア王子、ティエン・アルマフレアだよ。今日は遠いところからわざわざ来ていただいてすまないね。どうだい？ 良ければこれから僕が城内を案内してあげるよ』とかイケてる王子を演じたいんだ。けど駄目なんだ。僕は人付き合いが苦手なんだ。なんて駄目なヤツなんだ。こんなすてきな女性方を目の前に、こんなところでうじうじとしていることしかできないなんて……」

「い・い・か・ら・こ・ち・ら・へ・来・て・く・だ・さ・い！」

「ああっ、そんなに強く耳を引っ張られたら、僕はキリンになってしまう！」

「ウサギでしょうそれは！」

なんか妙な兄妹に、ヘレネは呆然とするしかなかった。

改めて見てみると、ティエン王子の顔立ちはなかなかのものだ。ただ、半端に伸ばした髪が印象をかなり悪くしている。妹たちと同じ感じの学生服だが、少々くたびれている。根暗なハンサム、といった感じだ。

「と、とにかく、こちらが私の兄、つまりアルマフレア王子の……」

「ティエン・アルマフレアです。よろしく、きれいなお嬢さん」

「あら、お兄様ったら」

「挨拶する相手が違う！」

ティアラの手を握るティエンに向かってほえ立てる——フィルリアではなくヘレネだった。三兄妹の視線が一斉にヘレネへ向く。

「あ、す、すみません。つい……」

ティエンとフィルリアは、深い視線を投げかけていた。なにか、感動にも似たような表情だ。

「ヘレネさん、これを。……兄様」

「うむ！」

フィルリアはヘレネにある物を手渡した。なんかいきなりシャキンとしたティエンが、ヘレネに近づいてくる。

「ヘレネさんには夢はありますか？」

「え？ は、はい。魔法使いを目指してますけど……」

「素晴らしい夢ですね。それに比べたら僕のなんか……」

「そんなことはありませんよ。どんな夢なんですか？」

「ええ。この前はトイレに行ってもいっこうにすっきりしない夢を」

「そっちの夢かあ!？」

「しかも朝目が覚めたらシーツにアルマフレア地図がぐっしょりと」

「その年でおねしょ!？」

「もうこうなったら次は世界地図を目指すしかないかなと」

「目指すなんなもんを——っ！」

すばあ——んっ！ ヘレネは手にしたハリセンで王子をひっぱたいた。

「はっ!? ご、ごめんなさい！ つい反射的に……」

「素晴らしい！」

瞬時に立ち直った王子が、ヘレネの手を力強く握ってきた。

「その見事なツッコミ！ あなたこそ僕が求めていた人だ！」

「はい？」

「僕は常々思っていたんです。王子に必要な物が何かを。民に愛される王子になるために、そう！ 民に笑顔を与えるために！ マジメなだけではいけない。ユーモアあふれる王になるために、僕は日夜努力を続けているのです！」

「そう。それで私が無理矢理ツッコミ役に……」

ハンカチを目尻に当て、フィルリアが安心したようにつぶやいた。

「いや、どっちかというフィルリア様のは地だったような……」

「よかったわねフィルリア。肩の荷が下りて」



「はい。私もヘレネさんを見て直感したんです。このツッコミこそが兄様にふさわしいと聞いてないし。」

「カーナ先生！」

ふと思い出したヘレネはカーナに食ってかかった。

「なにかしら？」

「王宮魔導師とかいう話は!？」

「あー、まー、あれはあくまでも憶測だし」

カーナはそっぽ向いて鼻の頭をぼりぼりかいている。

「とにかく、あたしはツッコミ役なんてごめんです！」

「何を言うんだヘレネさん！ 僕と一緒に夫婦【めおと】漫才を目指しましょう！」

「つまりこの場合、お兄様は遠回しにプロポーズしているわけですね」

「遠回しっていうか、モロですけど」

ティアラ・フィルリアの補足に、ぎしりとヘレネは硬直した。

王子様の婚約者？ つまり、プリンセス？

「れ、レイン……」

予想外の出来事に、ヘレネはレインに助けを求めるが、彼は『僕に振られても困る』とばかりに肩をすくめて見せた。

「ヘレネが決めることだよ」

「あ、あたしは……」

ヘレネは困惑してうつむいてしまう。

考えてみれば、彼がヘレネに惹かれるのは、変なヤツ引き寄せ体質のせいではないか。つまりこれは王子様の勘違いなわけだから、うまく説得しなければ。いやしかし、王子に面と向かって『あなたは変な人です』などと言えるわけがないし。

いろいろ考えあぐね――

どおんっ！

突如の爆音はそのときに響いた。

爆発したのは双子の塔の、図書館側だった。そこから人影が現れ、渡り廊下の上へ仁王立ちをした。

「へえ、そこにいたのかい。探す手間が省けるってもんだ。また会ったね、ヘレネ・アクアマリン」

見覚えのある女性が中央に立ち、ぞんざいに言い放つ。両脇を陣取る二人の男にも見覚えがあった。

「あなたは！ ……誰だっけ？」

「あんたがボケてどーする!？」

とっさに思い出せないヘレネに、女性はびしーと指を突きつけた。

「むう、彼女のツッコミも捨てがたい」

「あらお兄様、早速浮気ですか？」

後ろで漫才を始める兄妹は無視。

「少なくとも、あたいもこの身体も、あんたには世話になってんのよ。お礼をさせてもらうよ！」

あたいもこの身体も？ 妙な言い回しである。

「もしかしてあの人、なにかに取り憑かれてるんじゃない？」

「悪霊みたいな言い回しはやめてもらいたいね！」

久しぶりに的確なレインの憶測だが、きっぱりと否定された。

「あたいはね……」

「光あるところには影がある！」

「繁栄極めるアルマフレアに警鐘を鳴らすため！」

「刺激を求める人々に答えるため！」

「今！ 三つの悪が立ち上がる！」

「そう！」

「俺たちこそが！」

「てなもんやの三悪人〜！」

「させるんじゃないよっ！」

意味不明なキャッチフレーズを吐ききってから、リーダー格の女性は両脇の部下をしこたま殴りつけた。

ああ！ ぽんと手を打ち、ヘレネは思い出した。あれはこの前やつつけた賞金首だ。

「ヘレネちゃん！ パワーアップした俺の愛を受け取ってくれ！」

そしてあの巨大な男は、ヘレネの追っかけ、ハイフンだ。なんで奴らと一緒にいるのか聞く前に、彼は渡り廊下からダイビングをかました。

「ヘレネちゃん好きじゃあああああ！」

ひゅうう……ずどおーんっ！

ヘレネは二歩後ずさってかわし、ハイフンは地面にめり込んで沈黙した。

むぎゅ。そのハイフンの頭に、女性（コロンという名前だったか？）が身軽に降りてきて踏みつけた。弟のチルダも、続いて降りてきた。

「ふん」

コロンはヘレネを睨め付け、不快そうに鼻を鳴らす。先日とは違う迫力に、ヘレネは後ずさった。

「雷神【ヴィーナ】も水神【ニーナ】も、なんでこんな小娘になびくんだか理解できないね」

「……？」

「虫ずが走るよ。良い子ちゃんぶったにおいがぶんぶんする」

「し、失礼ね！」

ヘレネがなにか言い返そうとするが、

「その通り。乙女に失礼な言葉は、私が許さん」

ざんっ！ 二人の間を縫うように、一本のダーツが地面に突き刺さった。視線が一斉に発射元へと注がれる。

「乙女の危機に現れる。少女の悲鳴が我を呼ぶ。愛と正義の使者、アスタリスク。ここに——見参」

図書館の塔のてっぺんに、今日はクールにアスタリスクが登場した。ダーツを指に挟み、気取ったポーズを決めている。

「ていっ」

「ぬお!？」

コロンは足下のダーツを抜いて投げ返し、おでこに命中したアスタリスクは塔から転がり落ちてきて地面にめり込み、沈黙した。

「あなた、この前の自称悪人さんとは違うんじゃないか？」

レインの言葉に彼女は、ほお、と嘆息した。

「そっちのあなたも、変だとは思わないのかい？」レインはチルダへ話を振る。

「ふっ！ 何を言うかと思えば！」

チルダは胸をふんぞり返して言った。

「その通り！ 姉ちゃんは火神ターナとかいうヤツに取り憑かれている！ しかし！ 悪ならば、より強い

悪に従うのは自然の摂理ではないか！ だから俺は先ほどの見なかったことにしたのだ！」

「よーするに強い者に従うしか能のない小悪党ってことね」

聞こえないように、ヘレネはうめいた。

「ともかくだね。雷神【ヴィーナ】や水神【ニーナ】をそそのかすあんたを、放っておくわけにはいかないんでね」

コロソ、いや火神【ターナ】が構えを取った。水を打ったように、緊迫が走る。

そしてそれに答えるように、王宮兵士たちがなだれ込んできた。

「あいつらが賊だ！ とっつかまえろ！」

「脱獄したかと思ったら、また侵入していたのか！ 不屈き者めが！」

「ふん！ あたいが出るまでもないね！」

ターナは愉快げに鼻を鳴らした。そして後ろへ腕を振る。

「やっておしまい！」

「あらほらさっさ！」

チルダと、いつの間にか蘇生したハイフンが親分の合図に応答した。

かくして、戦争さながらの大乱闘になってしまったのだ。ハイフンとチルダが幾人もの兵士を相手取り、ターナは双子の塔の渡り廊下まで舞い戻って高みの見物を決め込んでいる。ヘレネの周囲を、幾多もの人と叫び声が行き交う。レインも参戦しているようだ。

ヘレネはというと、おろおろと右往左往することしかできなかった。王族の三兄妹は、いつの間にか兵士に囲まれ、安全圏まで下がっていた。

「とうとう悪の道へ足を踏み込んでしまったか。貴様は終生のライバルかと思っていたが、残念だ」

これまたいつの間にか復活したアスタリスクが、ハイフンと対峙している。

「笑止！ 俺はヘレネちゃんのためならなんだってするんだ！ お前にはその覚悟があるのか！」

「ぬう、あっぱれな覚悟だ！ だが悪の道に染まった者など、乙女は喜ばぬぞ！」

アスタリスクとハイフンが手四つで組み合いながら、激しく言い争っている。

「ヘレネちゃん、待ってておくれ！ この本をお金に換えれば、何でも君の望む物を買ってあげられ……」

ハイフンが突き出して見せた赤い本。その前を黒い影が横切ったかと思うと、手にした本は消え失せていた。

混戦模様だった総員が、一瞬沈黙した。

「あんたは！」ターナが、塔の上から叫んだ。

城内広場に突如として現れた黒い影。まさに黒い影だった。

艶やかな漆黒の毛並み、黒豹のようなラインだが、馬並みの巨体だ。

「ウオオオオオーン！」

そして、鳴き声はオオカミが近かった。遠吠えを一つ、首を振って、くわえていた魔導書をヘレネに投げ渡した。

怒りに満ちたターナが舞い降りてきた。ぎろりと黒豹をにらむ。

「雷神【ヴィーナ】・水神【ニーナ】に続いて地神【あんた】までこの娘の肩を持つつもりかい？ こんな小娘にいったい何があるっていうのさ！」

ヘレネを守るように、黒豹はターナに立ちはだかる。

その猫科の目、金色【こんじき】の瞳がヘレネに向いた。何かを言いたそうな目をしていた。

「まさか、その魔導書を使わせる気かい？」

ヘレネも感じたその意図を、ターナが代弁した。

怒りに声を震わせながらも、ターナは微笑を見せた。ただし、冷笑に近い微笑だ。

「残念だね。その魔導書は写本【レプリカ】だよ。その魔法を使うにはそれ相応の実力が必要さね。そしてあたいは知ってるよ。その小娘はまだまともに魔法を成功させたことがない！」

黒い獣の目が、もう一度ヘレネをとらえた。その呪文を唱えろと言っている。

「それとも今度はあんたが召喚に応じるつもりかい？ つくづくあんたは人間かぶれだね。邪魔はさせないよ！」

ターナの指先に、炎がともる。腕を振るたび、その炎はどんだんのびていく。気合いの息吹とともにそれは意志を持ったかのように黒の獣に巻き付き、がんじがらめに縛り上げてしまった。

「ヘレネ、だったね」

ターナの視線がヘレネをとらえた。熱き冷笑。そんな矛盾した表現がよく似合う。ヘレネは恐怖でくみ上がっていた。周りの兵士たち、チルダやハイフン、アスタリスクも息をのんで二人を見守っていた。

「さあ呪文を唱えるがいい。けど、今度は『間違っただけで召喚』なんてふざけた真似は出来ないよ。他の五神精【ごしんしょう】はあたいがにらみをきかせたからね。また失敗するところをさんざんあざけり笑ってやる」

気になる言葉がいくつかあったが、ヘレネには聞き返すだけの気力が出ない。先ほどまでのふざけた感じが消え失せ、圧倒的な威圧感に押しつぶされそうだった。

「さあ唱えろ、出来損ないの魔法使いが！」

身をすくめ、たまらずヘレネは魔導書を広げた。こうなったら言われたとおりにするしかない。

魔導書に目をおろし——とたんに音が、世界が消え失せた。いや、そう感じた。

目の前に、魔導書に記された文字のみが光って見える。ヘレネは吸い込まれるように、その文章を読み上げた。

「……？」

ぞくりとした悪寒が、ターナの、いやコロンの肌を泡立てた。

一流の魔導師でもなかなか出来ない美しい旋律。あまりにも見事な呪文詠唱だ。

嫌な予感を否定するように、ターナは声を荒らげた。

「な、なかなか上手いじゃないのさ。けどねえ、それだけじゃあ駄目だね。見せてあげるよ、本当の魔法を！」

神族が呪文を唱える必要はないのだが、ひけらかすようにターナは呪文を唱えた。

「魔龍焰噴嵐【バーニング・ストーム】！」

先日、ヘレネが失敗させた火炎魔法。そのせいで、火神【ターナ】が半端に召喚される羽目になってしまったのだ。見せつけるようにその完成版を、ターナは放った。ヘレネはまだ呪文詠唱中だ。周囲の兵士たちから悲鳴が上がった。

ばあんっ！

「な!？」

ターナは我が目を疑った。ヘレネに命中する寸前で、金属音を立てて火炎弾は霧散してしまったのだ。

「まさか、あんた本当に……」

ターナは思い出した。アルマフレア三大禁呪はその詠唱中、半端な魔法などはじき返してしまうほどの魔力障壁が発生することを。

取り憑かれたように、ヘレネは呪文を唱える。ハンドステッキを構え、呪文の最後の一句に合わせ、地面へ向けて突きおろした。

「大地爆裂陣【アース・ブレイク】！」

ヘレネを中心に、蜂の巣状に亀裂が広がる。亀裂は、灼熱の赤だった。地下から押し上げられるように地面が盛り上がり、

ごばあああああ！

赤く熱せられた土砂が、大きく巻き上がった。

「ちいいっ！」

たまらず、ターナはコロンから抜け出した。炎で形作られた巨大な鳥——不死鳥【フェニックス】が大空へ舞い上がった。

土砂が再び降り積もり、埃も風に流されて静けさが取り戻される。ヘレネはクレーターの中央に呆然と立ちつくしていた。

「クゥー———ッ！」

不死鳥【フェニックス】——火神ターナの、悔しそうな甲高い鳴き声。ばさりと翼を振り、火の粉をまき散らしながら彼方へ飛び去っていった。

そしてヘレネは我へ返った。気持ちの良い運動をした後のような爽快感。身体が少し火照っていて、肌をなでる風が心地よい。

「あ、あたし……初めて魔法に成功した！」

ヘレネはこぶしを握り、歓喜に叫んだ。

「結果はいつもと同じなんですけど……」

焼けた地面にうつぶせに、ボロ雑巾のようになったアスタリスクがうめいていた。

「あ、大変！」

改めてヘレネはとんでもないことをしでかしたことに気づいた。地面が大きくうがたれ、兵士達も三悪人もアスタリスクもまとめてノックダウンし、双子の塔も大きく傾いでいた。

この前の商店街壊滅事件が子供のいたずらのように思えてくるほどの大惨事だ。

と、ヘレネの前に、黒の獣がいた。猫科のラインだが、馬のように大きな黒い身体。火神ターナはあれを地神と言っていた。

地神は、じっとヘレネを見つめている。優しげな、どこかで見たような瞳。

「ウオオオオ——ン！」

オオカミのような遠吠えに、地面が、そして空気が震えた。

ごそり、と塔が揺れ動き、まっすぐに戻っていく。うがたれた地面は完全には戻らないが、以前の芝生が取り戻されていく。

長い長い遠吠えが収まると、景観はほとんど修復されていた。気を失った人たちも、一人、また一人と目を覚ましていく。

ほっとしてヘレネは周りを見回し——視線を戻すと地神はもういなかった。

「やれやれ。地神さんには感謝しなきゃね」

「によおっ!？」

いきなりわいて出てきたレインに、思わずヘレネは飛びすぎた。そういえばレインも魔法に巻き込まれていたはずだ。それが、今回もびんびんしている。

「だからなんであんただけなんともないのよ!？」

「ほら、あの黒い獣。彼女が『ヘレネの間合いの内側にいれば安全だ』って言ってたんだ。いや、そう言っ

ていたような気がする、かな？」

「……って、あの獣、女なの？」

「そんな気がただけだけど」

レインは肩をすくめてみせた。

「しかし、なんであんたはいつも涼しい顔して難を逃れられるのかしらねえ」

「ほら、ヘレネが暴走するのはいつものことだし。何となく対処法が見えてくるっていうか」

「あたしは暴走しない！ 暴走するのはあたしの魔法！」

「まあ、些細な違いだし、こだわったって」

「こだわってちょうだい！ あたしのためにも！」

「ぬうううう、僕の負けだ」

「は？」

いつの間にか、ティエン王子が二人の問答に割って入ってきた。二人の王女も、困惑気味に事の行く末を見守っている。

ぎりぎりど悔しそうに歯がみしながら、ティエンはレインをにらみ、そしてがっくりと肩を落とす。しばらくして顔を持ち上げたときは、吹っ切れたかのようにすがすがしい笑顔になっていた。

「どっちがボケでどっちがツッコミかわからないほどの絶妙なやりとり。君がヘレネさんの相方か」

「相方って？」

「あたしに聞かないでちょうだい！」

きょとんとして聞いてくるので、ヘレネはつつけんどんに突き返した。これがまたボケとツッコミにも見えたのか、ティエンが破顔する。

「名前を聞かせてくれないか？」

「はい。レイン・フラッドです」

王子が手をさしのべるとレインも差し出し、二人は握手を交わした。

「うむ。僕もまだまだ修行が足りないようだ。技に磨きをかけ、必ずやヘレネさんにふさわしいボケ役になってみせよう！ そのときはレイン君、僕と勝負してくれるかい？」

「いいですよ」

「うむ。イエスなのかノーなのかどっちにでもとれるその微妙な言い回しがまた良し！ それではそのときまで、さらばだ！」

あくまでもさわやかに、ティエンは駆け出す。なんか夕日に向かっていきそうな勢いだった。

「お兄様！ その先は池です！」

どっぽーん！ 視界の果てで、水柱の立つのが見えた。

結局、根暗なのかボケてるのかさわやかなのかよくわからない、王子ティエンであった。

ぱたぱたと追いかけるティアラに続こうとし、フィルリアはヘレネに向き直った。

「と、とにかく。ヘレネさん、改めてあなたにいろいろ興味がわきました。また城にお越しくださいね？」

そのときは、歓迎しますよ」

最後にヘレネと握手し、王家三兄妹はあわただしくも去っていった。

ヘレネは何となく、レインに聞いた。

「で、イエスかノーか、どっちだったの？」

「どっちでもいいですよって意味だったんだけど」

「そのまんまかい!？」

ヘレネは気づいたことがある。

レインは『変』なのではなく『天然』なのだ。

\*

さて、それでヘレネ達がシュラインの街へ帰ったかというところ——

「あああああ、片づけても片づけても終わらない！」

「仕方ないよ。自業自得なんだし」

「あたしだけのせいじゃなあああい！」

——まだ城内にいたりする。

地神のおかげで破壊された物は元に戻ったのだが、落ちた本やひっくり返った棚まで元に戻ったわけではない。

図書館にてヘレネとレインは、いつ終わるか果てしない後かたづけに追われていた。ぶつくさ文句を続けるヘレネに対し、レインはいつものように涼しい顔で作業をこなしている。

ちなみに、三悪人は再び地下牢へ放り込まれたようだ。なぜかアスタリスクも一緒に。

「まあ、あの格好じゃねえ」ヘレネは苦笑する。

「ほらほら。無駄口叩いてないでびしびし片づける！」

カウンターに腰掛け足を組み、カーナがせき立てる。

「カーナ先生も手伝ってくれたって良いじゃないですか〜！」

「あら、あたしは何も悪いことはしていないもの」

「……そういえばあの騒ぎの中、カーナ先生はどこへ行ってたんですか？」

「ん？ そりゃあ、王子様王女様に安全圏まで退避頂いたり、怪我した兵士の治療に追われたりしてたのよ」

なんとなく言い訳がましく聞こえたのは気のせいだろうか？ ヘレネの疑わしげな視線にカーナは顔をそらし……ハツとして叫んだ。

「ヘレネちゃん、上！」

「ふえ？」

ばさばさごしゃあっ！

「ぶもおっ!？」

ヘレネは落ちてきた無数の本の下敷きになった。片づけ方がいい加減だから、バランスが崩れたらしい。分厚い本の角が脳天を直撃し、一瞬お花畑が見えたりなんかする。

「あたたたた……」

「ヘレネ！」

「大丈夫だった？」

レインとカーナが心配そうに寄ってきた。

が、ヘレネはそれに答えなかった。

偶然に開かれた一冊の本。ヘレネはその本を食い入るように見つめていた。

魔導書だった。その本には『サルでもできる錬金術』とかいうタイトルが書かれている。

偶然開かれたページには『万能薬エリクサーの作り方』と記されていた。





## 第四話

---

「さて。魔法は大きく分けて、『論理魔法』と『神官魔法』があります。魔法とはそもそも神族の持つ技術で、それを人間が使えるように簡略・形式化したのが論理魔法です。開祖は魔王コスミックといわれています。もちろん私がここで教えているのも論理魔法ですよ。魔法の名を冠してはいますが、一種の技術とも言えますね」

公開教室は、教会の一室を借りて行われている。しかしヘレネは授業そっちのけで、別の魔導書を一心不乱に読んでいた。

先日見つけた『サルでもできる錬金術』というタイトルの、錬金術の本。これには万能薬エリクサーの作り方が記【しる】されていた。

エリクサーは、瀕死の重傷も不治の病すらも治す力を秘めているという。ヘレネの『変なヤツ引き寄せ体質』を治すための有力候補だ。

「これに対する神官魔法ですが……これはその名の通り、主に神官が使う魔法ですね。神族、特に五王神【ごおうしん】への信仰を力の源とし、奇跡の現象を起こすわけです」

静寂に包まれた教室で、初老の魔導師が授業をしている。かつかつと黒板に刻まれる説明を受講者達が黙々と書き写している。中には年配の人もいるが、生徒の大半はヘレネとあまり変わらない年頃の少年少女だ。

しかしもちろんヘレネには、こういった场景は目に入っていないし聞こえていない。

あまりにどんぴしゃりな魔導書だったので、フィルリアに頼み込んで貸してもらったのだ。ゆえにこうして公開教室の日も時間を惜しんで必死に読んでいるのだ。

さて、要約すると、エリクサーの作り方は次の通りである。

1. 粉末状にした賢者の石を、超聖水に入れる。
2. 三万度に熱した竈に、1を入れる。
3. 風神のふいごで魔力風を送り続け、二四時間ほどできあがり。

「ちょっと待てい！」

低い声だが、鋭くヘレネは突っ込んだ。

「このように、力の源はそれぞれ違いますが、論理魔法も神官魔法も、出来ることに大きな差はありません……と、ヘレネさん。何か質問ですか？」

いくら集中していても、自分の名前くらいは聞こえるものである。いきなり呼ばれ、ヘレネはぎくりと身をすくめた。

ぱたんと本を閉じるが、もう遅い。初老の教師——魔導師コネラートの教鞭が本をペシペシと叩いた。

「授業中に別の勉強とは感心しませんね。私の授業はつまらなかったですか？」

そろそろ六十路の大台に乗ろうかというコネラート教師だが、髪量はわりと多い。白髪【しらが】の方が多いかどうかといった色合いで、見ようによってはメッシュで格好良いと言えるかもしれない。小じわが多いが肌つやは良く、年齢のわりに女生徒からの人気が高かったりする。

「い、いえ、そういうわけじゃないんです。ちょっと急ぎで調べたいことがあったんで……」

「ほほほほ。お金は無くとも時間はありあまっている一般人【パンピー】がなにをそんなに急いでいらっしゃるのかしら？」

あまりにもなじみ深い笑い声に、ヘレネは聞こえないようにうめいた。

今日はどういうわけか、レイコ・タカマガハラも一緒に受講していたりする。彼女は普段は家庭教師を招いて勉強しているはずだ。

「その庶民向けの公開教室に、なんで領主の娘なお嬢様がいらっしゃるんですか？」

にっこりとこめかみを引きつらせ、ヘレネは応じた。無論、こんな器用な表情を見せたところで彼女には通用しないのだが。

「おーほほほ！ 決まってるじゃありませんの。庶民がどんな勉学にいそしんでいるかを知っておくのも、貴族のつとめだからですわ」

手の甲を口元に、レイコは高らかに笑う。他の生徒達の白眼が一斉放射されていてもお構いなしである。

「それに……ああ、レイン様……今日も素晴らしく格好良いですわ」

唐突に頬を赤らめ、レイコは窓の外をうっとり眺め出す。

外では、剣士志望の若者達が組み討ちの練習をしている。かけ声と木刀のぶつかり合う音が、ここまで聞こえてくる。

弟子達の中には、レインの姿も見える。少々背が低く華奢な体つきのレインだが、機敏な動きに鋭い踏み込みと、動きの良さでは明らかに群を抜いている。

「こうしてはいられませんわ。レイン様に冷たいお水とタオルを用意いたしませんと！」

はたと立ち上がり、あわただしくレイコは去っていった。

「なにしに来たんだか……」

ヘレネのつぶやきはぼそりとしたものだったが、教室中のみんなが大きくうなずき返していた。

と、この間、コネラート教師はヘレネの魔導書に目を通してようだった。

ここまでのどたばたを意に介さずなあたり、ベテランぶりがうかがえる。

「なるほど、錬金術の本ですか。ヘレネさんは錬金術に興味がおありなんですね？」

「あ、はい。エリクサーを作りたいんですけど、なんかむちゃくちゃ書いてあったんで」

「あー、まあ、確かにこれはタイトルに偽りありですねえ」

本のタイトルに目をやり、コネラートはあきれている様子だった。

「まず、1。賢者の石とか超聖水とかいったところですでに『サルでもできる』の範疇からはずれてますね。どちらも普通に入手できる品物ではありませんからね」

「はい先生。超聖水ってなんですか？」

何となく話を聞いていた生徒の一人が手を挙げた。

「超聖水とは、名前通り特別な聖水です。どんな温度や圧力下でも液体を保つという『永久液体』で、他の物質との親和性がきわめて低いのが特徴です。この高度な安定性は金【きん】に通じるものがあり、そのため錬金術の材料として近年、注目されるようになったのです」

質問した生徒はうんうんうなずいていたが、ヘレネにはちょっと手に余る内容だった。それに気づいたか、コネラートは咳払いをひとつ。

「まあ超聖水は教会でも手に入りますが、問題は『賢者の石』『三万度の竈』『風神のふいご』ですね。竈に関しては、思い当たる節もありますが……」

「教えてください！」

有無を言わさぬヘレネの要望に、コネラートは困った様子を見せた。

「うーん、彼はちょっと気まずい人なんですよねえ」

「……気まずい？ 気むずかしいじゃなくて？」

「あ、いや。確かに気むずかしい人なんですけどね、賢者クーマ氏は」

その名前に、一瞬どよめきが上がった。ヘレネもその名は聞いたことがある。

魔導師クーマ。アルマフレア四大英雄の一人だ。

「皆さん知っての通り、クーマ氏は七年前にアルマフレア王国を救った英雄の一人です。賢者の称号をもらい受け、その後、山奥に隠居しました。最近は錬金術の研究をしていると聞きましたが……ああ、やはりこの魔導書も彼の著書のようなですね」

奥付を確かめながら、コネラートは語る。

「あの、どういったご関係なんですか？」

ヘレネの質問に、彼はますます困った様子を見せた。

「彼とは勉学や研究をともにした時期がありましてね。一種の同窓生のようなものでしょうか。彼が英雄ケインとともに王国を救ってくれたのは、私も鼻が高いですよ。……と、彼の施設を使いたいのなら、紹介状を書かなければなりませんね」

自慢げな中にもやれやれといった雰囲気を見せ、コネラート教師は教壇へ戻っていった。

りんごーん。と、そこで終業の鐘の音が鳴った。

「やあヘレネ。良かったら一緒に帰らないか？」

帰り支度をしていると、レインがやってきた。訓練が終わったか、いつもの剣士風スタイルである。

「別に良いけど……レイコさんは？」

レインにはここに顔のまま首をかしげた。

「見なかったけど？」

教会の裏手には、一本大きな木の生えた小高い丘がある。日差しは熱いが、木陰にはそよ風も入ってきて居心地は実によい。

その大樹の元にレイコは腰掛け、愛しのレインは膝枕をしてもらいながらうたた寝中。

かすかに風が舞い、枝葉がこすれ合う。小鳥のさえずりに合わせ、陽光が少し差し込んだ。

んん、とレインがまぶしそうに薄目を開けた。

「あら、レイン様。もっとゆっくり眠ってらしていいんですよ」にっこりと、レイコは微笑む。

いや、とレインは上体を起こし、彼女をじっと見つめる。レイコは一瞬どきりとしたが、木に背中を預け、見つめ返す。

レインのりりしい顔が近づいてくる。吐息が頬にかかるくらいまで近づき、その唇も……。

「ああん、そんな、わたくしたちにはまだ早いですわあっ！」

いやんいやんと身もだえながら、レイコは我へ帰った。

絶好の場所でレインを迎えるべく用意をしていたら、妄想モードに入ってしまったようだ。

「レイン様、待っていてくださいませね。レイコがお迎えに参上つかまつりますわあああ！」

どどどどど、とサカリのついた馬のように、レイコは丘を駆け下りていく。

レインとヘレネと一緒に下校していった後だということには、もちろんこのときは気づいていなかった。

結構急な坂道を、ヘレネはひいこら言いながら登っている。いつもの魔法使いルックがベースだが、登山ということで、日除け用フードのついたやや厚手のマントと長めのブーツをはいている。

すぐ脇を、いつもより装備を固めたレインがついてきている。ヘレネには結構きつい登山だが、彼はいつものように涼しい顔をしている。剣士志願だから当然かもしれないが、ヘレネとしては、彼には『苦労』という単語が存在していないように思える。

それとあまり意識はしたくないのだが……。

「ああ、レイン様。わたくし、もうくたくたですわ」

「それじゃ、ちょっと休憩しようか」

あんたが仕切るな。と突っ込みかけた台詞をヘレネは飲み込んだ。ヘレネもかなり疲れてきていたからだ。

金魚のふんのように、今回もまたレイコがくっついてきている。なにか勘違いでもしているのか、ロッククライミングばりの重装備だ。自分の頭を越えるくらい大きなリュックを背負ってれば、疲れなわけがない。

コネラート教師に紹介状を書いてもらったヘレネは早速、賢者クーマを訪ねに出発した。

場所は、シュラインの町から北に二日。道はまあまあしっかりしているが、このあたりはちょっとした山になっている。

この山奥で、クーマは錬金術の研究をしているという。そのために必要な設備も、そこにある。

山腹に、煙の立ち上っているのが見える。火山なわけではもちろんなく、そこにクーマの屋敷と錬金術の設備（竈）があるということ。目指すはあの煙の元だ。

町の外へ出るとということでレインに同行してもらっているのだが、そのたんびにレイコがついてくるのはどうにかならないものだろうか。

そんな思いもつゆ知らず、レイコはいつものようにヘレネに食ってかかる。

「今日は暴風雨【あらし】になると、知り合いの占い師が言ってましたのよ。そんな危ない日に、レイン様と山歩きなんて、なんて不届きな！ 完全防備のこのわたくしが、万一の際にもレイン様をお守りいたしますわ。ヘレネさん、あなたは無駄無益無意味ゆえ、お帰りあそばせ」

「本末転倒でしょうが！」

遊びではなく、あたしの目的があつての登山なんだから、主役が消えてどうすんの。

ヘレネの文句を、しかしレイコは見事に聞き流した。

「大自然の猛威の前に、人の力などはかない物。嵐の吹き荒れる中、わたくしたちは遭難してしまうのですわ。わたくしはかろうじてレイン様と合流し、雨風をしのぐために洞窟へ避難しますの。ヘレネさんの行方を気にする心お優しいレイン様をおなだめして、一晩をその洞窟で二人きりで過ごすのですわ。吹き荒れる嵐。ずぶ濡れになって震えるわたくしを、レイン様はそっと抱きしめ、『風邪を引くよ。濡れた服は脱いだほうがいい』『ああ、そんな、殿方の前でそんな恥ずかしい……』『ほら、凍えないようにもっと近くによって』『ああ、レイン様……』。揺らめくたき火が映し出す、レイン様のりりしいお顔。嵐の中でも鼓動が聞こえてくるほどに寄り添い合うレイン様とわたくし。破裂しそうなほどの鼓動を押さえて、わたくしたちは越えてはいけない一線を……ああっ、そんなわたくし耐えられせんわあああああ！」

延々と妄想を続けていたレイコは、勝手に身もだえながら、斜面をごろごろ転がり落ちていった。

「……………」

レイコの一人芝居をひたすら呆然と眺めていた二人。

その背後で木枯らしが一陣吹き抜けた。夏だけど。

レイコとはもちろん友達ではないが、知り合いという枠からも外したくなってくる。

「ヘレネ。僕、君に聞きたいことがあるんだ」

「な、なによ」

不意にまじめな表情を見せ、肩を叩いてくるレインに、ヘレネは少々とまどった。幼さの残る顔立ちだが、引き締めると割と格好良いのだ。

「僕も『変なヤツ引き寄せ体質』なのかな？ ほら、レイコさんとかヘレネとか……」

「あたしまで含めないでちょうだい！」

握ったこぶしをハンマーのように、レインをぶったたくヘレネであった。

さすがに少々堪【こた】えたか、レインは頭を押さえながら、涙目になっていた。

「いやけど、ときどき妙に女の子が群がってくることもあるし」

本気で不思議そうに言うあたり、やはりレインは天然なのだろうか？

彼の言うとおりに、実はレインは結構もてる。先日はレイコに遠慮し（というか恐れ）ていたようだが、普段は別の（多数の）女生徒がレインに差し入れしていたりする。

「ほほほほほ。そこいらのイモ娘どもと一緒にしないでいただきたいですわ。わたくしの方がよっぽど年季が入ってましてよ！」

いつの間にか復帰したレイコが（どのあたりから会話に参加していたのかは不明だが）、握りこぶしで力説している。

「そう。わたくしは、ただ一途なだけですわ！」

「自分で言うところがやっぱリアレよね」

ヘレネの半眼はまたもや見事に無視された。

……と、

「隠れて！」

言うが早、ヘレネは物陰に隠れた。

「ヘレネちゃん好っきじゃあああああ！」

脇の山道【さんどう】を、ハイフンが走り抜けていった。地響きで葉が落ちてくる。

ヘレネももてることはもてるのだが、この変人限定というのはなんとかならないのだろうか？

嘆くように天を見上げると、雲の動きが速くなっていた。ごうごうと風の吹く音が、遙か上空から聞こえてくる。

「風が出てきたわね。急ぎましょ」

この難儀な体質を返上するためにも、道を急がねばなるまい。ハイフンの気配が消えたことを確認してから、ヘレネは足を戻した。

＊

大小様々な石や岩が無造作に並び、どこからか澄んだ水がわき上がり、細い川となって流れていく。

見る者の目を奪うような美しい景観だが、ここへ足を踏み入れる者はほとんどいない。

ヘレネたちのいる山腹からもう少し上のこの渓谷に、二人はいる。

ターナは腕を組んで目をつむり、ヘレネたちの様子をうかがっていた。火神たる彼女にとって、その場にながら別の場所を察知することなどは造作もない。

「ちっちゃいお姉様は、リベンジはしないの？」

聞こえてきた黄色い声に、ターナは薄目をあけた。少々仏頂面だ。

ニーナだったら怯えて隅っこへ逃げてしまうところだが、傍らにいるこの少女はゆったりとした微笑で受け流している。あるいはなにも感じていないのかもしれない。

「もう、あの小娘をどうこうする気はないよ」

ふん、とおもしろくなさそうに、ターナは鼻を鳴らした。

「それは良かったの。おっきいお姉様も安心すると思うの」

安心したというよりも愉快そうな調子で、風神【ジーナ】はころころと笑った。それがまたターナにはおもしろくなく、肩のあたりまでしか背丈のない小柄な少女を見据える。

着ている衣装は、ターナと同じ系統のデザインをしている。アルマフレアの民は、最近はおっぱら正式な場でしか着ない。純血の人間は黒髪だが、ジーナははきらめくような銀髪だ。年齢は、人間でいえば一四～五歳くらいに見えるだろうか。愛嬌よく、いつもにこにこしている。

「じゃあジーナ……風神【あなた】はどうするつもりなんだい？ 雷神【ヴィーナ】や水神【ニーナ】みたいに、べたべたなつくつもりかい？」

「わたしは……今はまだわからないの。でも、すごく興味はあるの」

やや舌っ足らずな調子で、ジーナは言う。

「ちっちゃいお姉様はどうなの？ 嫌いなのをやめたなら、もうどうでもいいと思うの」

少女の指摘に、ターナはうなづいた。

確かに、ただの人間だったら歯牙にもかけないところだ。

召喚に失敗したという出だしを除けば、ヘレネへ持つ感情はジーナと同じだ。

「何者なんだい、あの娘は？」

自然と、ターナはそうつぶやいていた。

なにしろ普通の魔法はからきし使えない。

そうかと思えば、禁呪を一発で発動させる。

魔法使いとしては、まるででたらめな娘だ。

「なにより、五神精【あたいたち】を強制召喚させる、あの正体不明の力だ」

独り言のようなターナのつぶやきに、ジーナは人差し指をあごに当て、しばし。

「おっきいお姉様は、召喚師かもしれない、と言ってたの」

「召喚師、か……」

腕を組んで、ターナは考え込む。

召喚魔法は、神官魔法とは少々毛色が異なる。

神官の唱える呪文は『祈り』で構成されている。言ってみれば、神様へ『お願い』しているわけだ。

召喚魔法は、時空を操ることにより、対象となる物（者）を強制的に呼び出す。人間の魔導師が呼び出せるのは物品や下等生物、せいぜい同格の人間までだ。神族を、それも五神精を強制召喚するだけの力を、はたして人間が持ち得るのだろうか？

「もうひとつ、おっきいお姉様が言ってたことがあるの」

「なんだい？」

「ヘレネちゃんは、わたしたちの目的をかなえてくれるかもしれない、って言ってたの」

「……あの娘が、あたいたちの目的を？」

こくりと、ジーナはうなづいた。

五神精には共通の目的がある。長く長く夢見てきたひとつの目標。

神族である自分たちにもできないことを、あの小娘が……？

「ねえジーナ」

至極まじめ顔で、ターナは聞いた。

「あたいたちの目的って、なんだったっけ？」

\*

「……で、ここはどこなんですか？」

「山よ」

一言ですますへレネに、レイコはかみついできた。

「そんなことはわかってますわ！ クーマ様のお屋敷にはいつになったら着きますの！」

「そんなこと、あたしが知りたいわよ！」

やけになって、へレネも怒鳴り返す。

へレネたちは、道に迷っていた。森が深くなってきていて薄暗く、道しるべとなる竈からの煙がほとんど見えない。一時間ほど堂々巡りになっている。

「あーもう、時間がないってのに」

ただでさえ、二日かかる行程なのだ。これ以上時間を浪費すれば、体質による発作が起こりかねない。  
と、

「……何か聞こえませんか？」

耳を澄ますと、何かのうめき声のような音が聞こえてくる。茂みのかなり先、猛獣のうなり声にも聞こえる。

「ああ、レイン様。わたくし、怖いですわあ！」

怖いと言うわりには猫なで声で、レイコがレインに抱きついた。

二人を強引に引きはがし、つけんどんにへレネは言う。

「とりあえず！ レイン、様子を見てきてちょうだい。男でしょ？」

「別にいいけど」

特に臆する様子もなく、レインは茂みの中へゆき進んでいった。

「ああ、なんて勇気があるんでしょう」

「単に神経が麻痺してるのよ、あいつは」

「んまあ、なんという言いぐさ！ わたくし、いつか言わなくてはと思っていたんですけど、レイン様に対して厚かましすぎるんじゃないありませんこと？」

「だったらなによ！」

レイコは大仰に肩をすくめて見せた。

「ふう、こんな粗忽で野蛮で無知で下劣な女とレイン様が同じ幼少時代を過ごしたなんて、なんてなんて不幸なことなんでしょう。これ以上レイン様を舌先三寸でたぶらかそうなんて、純真で品行方正で雅やかなわたくしには耐えられませんわ」

そういうわけで、アルツ！」

さんざん言いたい放題言ったあげく、腕を振り上げ、レイコは部下の忍者アルツの名を呼んだ。

「ちょっと、今度は何をするつもり？」

「ふっ、知れたこと！ あなたをここにふんじばって、わたくしがレイン様とラブラブ！ あなたさえ処分すれば、恋路を邪魔する者はいなくなりますのよ！」

「恋路だかなんだか知らないけど、あたしとレインはただのおさなな……！」

「ヘレネ！ レイコさん！ 大変だ、すぐ来てくれ！」

切迫したレインの声に、ヘレネの言葉は中断された。

「レイン様すぐ行きますわあああああ！」

声をドップラー効果させながら、瞬時にレイコが消え去った。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

一瞬呆然としてしまったが、慌ててヘレネも駆ける。

少し走ると、すぐに視界が開けた。

丸太小屋の脇に、レンガ造りの大きな建物。天へ向かって煙突が突き伸び、熱気がここまで伝わってくる。どうやらここがクーマ氏の研究施設らしい。

そういえばレインは？ と見回してみると、

「おおおうっ！ 美しき乙女よ、こんなところで逢うとは天の導きかっ！」

すてーんっ！ 脈絡もなく現れたアスタリスクに、ヘレネは豪快にすっころんだ。

「な、なんでこんなところにアスタリスクさんが!？」

「うむ！ よくぞ聞いてくれた。実は……」

「ヘレネちゃん好っきじゃあああああ！」

「ちえすとお——っ！」

どばきいっ！ ハイフンが現れたと同時に、アスタリスクの跳び蹴りが炸裂！

「アルツ！ 呼んだらすぐに現れなさい。おかげで余計な労力を費やしてしまいましたわ」

「これは失礼しましたお嬢様！ 懐かしき旧友に会い、任務が遅れてしまいました！」

周囲の木々が震えるほどの爆声は、レイコのお抱え忍者、アルツに違いない。

次々と現れる変態どもに、ヘレネは自分の運命を悲観せずにはいられなかった。体質というより、これはもはや呪いではないだろうか？

「どうも、あのうめき声はアスタリスクさんのものだったようだね」

頭を抱えてしゃがみ込んでいると、レインがやってきた。てんやわんやの背後は極力無視。

「で、何を大声出して慌ててたのよ？」

「やあ、こんなところで会うなんて奇遇だなと」

「あほかーい！」

もはや疲労困憊のヘレネであった。

「いや、それだけじゃなくて。ここがクーマ氏の館じゃないのかな？」

「そうみたいね……」

「騒がしい！ いったい何事じゃ！」

しわがれた、それでいて迫力のある声が響いた。

丸太小屋の木の階段から、老人が降りてくる。櫛の杖を握り、やや折れ曲がった腰をさっ引いても小柄な背丈。いかめしい顔つきと白いあごひげは、いかにも気むずかしい魔導師といった風貌だ。

「クーマ殿！」

アスタリスクに呼ばれ、老人はそのいかめしい顔を少しやわらげた。

「なんじゃい、又シらじゃったか。来たならさっさと声をかければ良からうに」

「すまなんだ、クーマ殿。特訓によさげなところゆえ、獣たちと戯れていたのだ」



「俺は、この前の礼を言いに来たんだ。けど、コロンの姉御とチルダの兄貴も釈放して欲しかったんだな」  
「ワシはあの二人とは面識がないのでのう。役所に言い含めるのはちょいと無理があるわい。と……おお、アルツもおったか。元気にしとったか？」

「恐縮ですクーマ様！ ご老人のおかげで拙者、風邪ひとつひかなくなりました！」

「ふあっふあっふあ！ 元気な声じゃ、よきかなよきかな！」

旧来からの友人のように、クーマは三人の変態と親しげに話している。この瞬間、ヘレネの頭の中では素早い計算が行われていた。当然といえば当然の答えが導き出される。すなわち、

クーマ=変人

「それじゃ、あたしはこれで」

「まあまあ、すぐ帰るのも何だし」

そそくさときびすを返すヘレネの首根っこをレインに捕まれた。

「あんた、この状況わかって言ってるの？」ひそひそ声で詰め寄る。

「けど、クーマ様じゃないと駄目なんだろう？」

「このワシに何か用か？」

厳かに、クーマが聞く。やむを得ず、ヘレネはコネラート教師からもらった紹介状を手渡した。

「ほほお……コネラートめの生徒か」憎しみにすら似た表情でヘレネをにらむ。

もともといかめしい顔つきなだけに、ヘレネは一步後ずさる。しかし彼のしかめっ面は、ヘレネにではなくコネラートに向けられているようだ。

そういえばコネラート教師もクーマを苦手としているようなきらいがあった。

聞いてみたい気もするが、聞けるような雰囲気ではない。

「して、このワシに何を望む？」

紹介状に一通り目を通すと、クーマが聞いた。

「はい。ヘレネの体臭を治してやってほ……」

「体臭ゆうな！」

ごげしっ、とレインを殴り、慌ててヘレネは訂正する。

「エリクサーを作りたいんです。そのためにはここの施設を借りないと駄目だって、コネラート先生に聞いたので……」

「ふむ」

クーマは難しい顔で腕を組みながら、しばし。

「ま、ええじゃろう」

「ほ、ホントですか？」

「ただし、条件がある」

歓喜のヘレネを、いかめしい顔が遮った。

「この施設は最近ちょっともてあまし気味での。お主には助手を務めてもらいたい」

「助手……つまり弟子入りですか？」

うむ、とクーマはうなずいた。

意外に悪くない条件である。魔導師クーマといえばアルマフレア四大英雄の一人で、王国からは賢者の

称号をもらうほどの実力者である。

「クーマ様！ その際には是非、タカマガハラ家指定のこのメイド服を！」

「うむ。名案じゃの」

ななな!? とヘレネが叫ぶよりも早く、クーマが鷹揚にうなずいた。

「ぐぬう。ならば私も弟子入りせねば！」

「あ、あなた、そんな趣味が？」

こぶしを握って語るアスタリスクに、思わずヘレネは後ずさる。

「ちゃうわいっ！ 私がメイド服を着てどーする！ クーマ殿に弟子入りし、乙女とは兄妹弟子に！ うおお、これこそ男の夢！」

「俺も弟子入りするぞ！」とハイフンが続く。

「喝【くわ】っ！ 男の弟子などいらんわ！」

こ、この人、やっぱり変人なのでは？ ヘレネはいつでも逃げ出せる態勢を整えることにした。

「それともうひとつ。コネラートの公開教室は今後一切受講しないこと。良いな？」

「それは素敵なお提案ですわ！」

弟子入りの話が出たときには嫌な顔をしていたレイコが突如と瞳を輝かせた。

「さすればヘレネさんはこの山奥へ隔離！ 公開教室には邪魔者がいなくなってレイン様とらぶらぶ！」

「あんたはだまらっしゃい！」

クーマ顔負けの一喝をし、ヘレネは老魔導師に聞いた。

「コネラート先生とはいったいどんな関係なんですか？」

「あやつはな、ワシの敵じゃ！」

杖ごと腕を振り、クーマは即答した。

「やれやれ。いまだにそんなことを言っているんですか」

そして、前触れ無く空気が揺れた。

風ではなく、大きな太鼓を鳴らしたときのような大気の振動。ただし、音はしなかった。聞こえたのは、覚えのある澄んだ声。

「来おったな。裏切り者めが」

獲物に飛びかかる寸前の恐ろしい形相で、クーマがうめいた。

振り返ると、コネラート教師がいた。一同、驚きで声もなく彼を見つめている。その驚きと疑問に答えるべく、クーマが口を開いた。

「魔導師、いや召喚師コネラート。王国では唯一、世界でも五人としない召喚師のうちの一人じゃ。七年前の戦争では、ワイバーンやサラマンダーの大量召喚で大きな戦果を上げておる」

「オヅマ親衛十傑を相手取ったあなたには遠く及びませんよ」

「ふん。ワシはカールやワイオニーの援護をしたにすぎんわい。ワシよりヌシの方が、第四の英雄にふさわしかったろうに」

なんだかとてもない話を、さらりと二人は交わしている。四大英雄には含まれていないが、コネラートもかなりとてもない人物のようだ。

お互いに褒めあう二人だが、コネラートは探るような、クーマは相変わらず憎々しげな顔色で、それがヘレネには不気味だった。

「それで、自身召喚まで使いおって、ワシに何の用じゃ？」

苦い顔でクーマが聞くと、コネラートは小さく肩をすくめた。

「ヘレネさんの依頼に、むちゃくちゃな条件を出すのを止めに来たんですよ」

出すかもしれないと言わずにきっぱり確信断定して来るというのが、あの二人のつきあいの長さとクーマの変人さを物語っていた。先日、クーマ氏を紹介するのをためらっていたのもこれで納得した。

「ええい、黙れ黙れ！ この裏切り者めが！」

「またそれを言う……」

ヤケと化したクーマに、コネラートは頭痛がするかのようにはたいを押さえる。

「あのう、お二人にはいったい何が……？」

何となく疎外感を感じたヘレネは、小声で疑問を口にした。とたん、クーマが堰を切ったように大声を上げた。

「こやつはな、ワシを三回も裏切ったのじゃ！」

そして裏切り者をカ一杯指さし叫ぶ。

「自身召喚を使えば女子更衣室に忍び込み放題！ というワシの申し出を断り！」

「当たり前じゃないですか」

「若い娘にさわり放題という教師職に就き！」

「それには巨大な誤解が」

「あまつさえ、その生徒の中から特に可愛い娘御を嫁さんにもらってしまう始末！」

「もはや単なるひがみね」

ヘレネの突っ込みに、クーマはぜいぜいと息を荒らげるだけになってしまった。コネラートも疲れたようにため息を吐いている。

「それに在学中はプラトニックを守ってましたし」

コネラートの一言に、クーマの怒りが再噴火した。

「なにい!? ならば今はプラトニックではないと!？」

「あ、いや、その」

「生涯独身貴族を誓い合ったあの友情はどこへ行った！」

「友情って言うのかなあ、それ」

ヘレネの突っ込みは、今度は無視された。

「結婚したって、良いことばかりじゃないですよ」

妙に実感のこもったセリフだったが、

「ふっ！ 未婚のワシにはわからんわい！ とにかくそういうわけで貴様はワシの敵！ 敵は粉碎するのみ！ ゆくぞ！」

「仕方ありませんね」

「だああ、ちょっと待てい！」

待ってくれなかった。

クーマが杖を振りかざし、コネラートは両手を大きく広げ、呪文詠唱を始めていた。

「クーマ氏を止めに来たんじゃないんですか？」

「だから止めますよ。力づくで」

説得もしないでいきなり戦闘というのは、もしかしたらコネラートも普通の人ではないのかもしれない。

「火蜥蜴召来【サラマンド・サモン】！」

大気が震えた。コネラートの突き出した手の先の空間がゆがみ、真っ赤な爬虫類が現れた。ヒトに匹敵する大きさのトカゲが空中に出現し、重力に従って着地する。

「ござかしいわ！ 魔龍焰噴嵐【バーニング・ストーム】！」

ごばあっ！ サラマンダーが火を吐くのと同時にクーマの火炎魔法が炸裂した！

「きゃあきゃあきゃあ！」

たちまち火の海となる山の中を、ヘレネはあたふたと逃げまどう。

二人とも世界屈指の魔導師だけあって、すさまじい戦いである。このままではこの辺り一帯、はげ山と化してしまう。

「どうしようどうしよう、レイン！」

「いや、あの二人を止めるのは、さすがに僕も」

ぱたぱたと手を振るレインは相変わらず落ち着いていた。

慌てることしかできないヘレネの後方で、三人の男が相談しあっていた。

「なあ。こういうとき、俺たちはどうすればいいんだ？」

「決まっておろう。男として許すまじ者と対峙する！」

「あいわかった！ ならば戦う相手は一人！」

なんか一致団結し、ハイフン・アスタリスク・アルツが戦線に躍り出た。

「そういうわけで協力しますぞクーマ殿！」

「うむ、ありがたい！ 今日こそ決着をつけてやるぞこの果報者めが！」

ヘレネは背を向けて頭を抱えてしゃがみ込んで明日の御飯は何にしようかと逃避行する思考を強引に軌道修正して必死に考えた。こういうとき自分には何が出来る？何をすれば良い？何をすべきだ？そうだと止めなきゃ！って止められないから悩んでるんじゃないの！って一人突っ込みやってる場合じゃなくて！元凶！そう、元凶を断てば良い！

ヘレネは魔導書を持って立ち上がった。いきなり立ち上がったからめまいを覚えた。くらんだ視界の先では、相変わらずどかばきどかばきと人外魔境な戦いが繰り広げられている。

元凶を断つにはどうすれば良い？ ……風！ 風の魔法で吹き飛ばす！ ヘレネは呪文を唱え始めた。

「収束烈風弾【ウインド・プレッシャー】！」

ハンドステッキをつきだし、魔法名を叫ぶ。

……………。

どかばきどかばきという、こぶしとこぶし・魔法と魔法のぶつかり合う音。ぱちぱちと火のはぜる音。ひゅううう、という空っ風の音がそれに混じった。

風の音、だけ？ ヘレネは途方に暮れるしかなかった。

「さささ、レイン様。わたくしたちは仲良く帰ることといたしましょう」

「帰るなあああああ！」

どおんっ！ ヘレネの突っ込みが合図になったわけではないはずだが、その叫びと一緒に爆音が響いた。

「なんじゃ？」

クーマが目をもく。森林が割れたのだ。天空から舞い降りてきたそれ【・・】を避けるように、炎と一緒に。

「べ、天翔馬【ベガサス】……？」

翼の生えた、純白の馬。そのいななきは、二人の老魔導師、三人の男、レイコやレインを驚きに黙らせた。燃えさかる炎ですら凍り付いてしまったように見えた。

ヘレネも、あまりにも予期せぬ事態に硬直していた。

天翔馬は地面へ降り立ち、ヘレネをじっと見つめた。白銀色【しろがねいろ】の、優しそうな瞳。これと似た目を、前にも見たことがあるような気がする。

「彼……いや彼女はまさか、風神ジーナ……？」

コネラートのつぶやきに、天翔馬はぶるる、と目を細めた。

「ヘレネちゃんに呼ばれて来たの」

「しゃべった！」

「獣形態でもしゃべれるのは、風神【わたし】だけなの。これってすごいと思うの」

自慢げに風神【ジーナ】は言う。

馬の姿に似合うか似合わないかはわからないが、とても可愛らしい声だった。

「風神を召喚……？ ヘレネさん、これはいったい？」

「あ、あの、わたしにもよく……」

「風神といえば神族ですよ！ 人間に召喚できる代物じゃありません！ 竜族はもちろん、最低でも同じ神族でないと。いやそれ以前に召喚師はこの数十年確認されていない！」

一気にまくし立てるコネラートに、ヘレネは後ずさる。視線をそらして気がついた。

ヘレネの視線にあわせ、一同は風神の背に女性が一人乗っていることに気づいた。

「アリシア！」

コネラートに呼ばれ、彼女はうなだれた上体を持ち上げた。意識を失っていたか、もしくは眠っていたらしい。

どうやらこの女性が彼の言っていたお嫁さんらしい。二〇歳前後で、長い黒髪の美しい女性だ。足首近くまで覆う青いワンピースが、清楚感を漂わせている。

アリシアと呼ばれた女性は、あたりを見渡してしばし。

「あなた！」

落雷まさかの轟音が響き渡った。

「いったい何をしたんですか！ あたり一帯火の海じゃないの！」

「すみませんごめんなさいこれには訳があるんです」

「訳もへったくれもありません！ 元に戻しなさい、今すぐに！」

「いやその、燃えてしまった物を戻すのはさすがに」

「ならとりあえず火を消す！」

「はい——っ！」

しどろもどろに呪文を唱え、コネラートは消火の魔法を周囲にまき散らす。白い粉のような物が降り注ぎ、みるみる炎が中和されていく。

「まったくあなたって人は、何かというとすぐ攻撃魔法に走るケンカっ早さは何とかならないのかしら？」

「ううう、悪いのは私だけではないのに」

「お黙りなさい！」

普段は清楚可憐な女性なのだろうが、三白眼で亭主に小言を言う様は、まさに鬼嫁という単語がふさわしい。完全に尻に敷かれているようだ。

「人は見かけによらないって言うけど、こうやって私が見張ってないと危なっかしくてしょうがない」

奥さんの方も見かけによらないと思うんですけど。ヘレネは頭の中で突っ込んだ。

ここまで、全員が唾然としてことの成り行きを見守っていた。いや、ジーナとレインはにこにこしているようだったが。まあこれは地だろうし。

しばらくして、ようやく消火活動が終わったか、コネラートが深い深いため息をついた。

「ほら、みんなに謝る！」

「ううう、すみませんごめんなさいもうしません」

旦那の頭をつかんで下げさせるアリシアに、コネラートは情けないくらいに平謝りに徹した。

「あ、いや、ワシも大人げなかった」

気圧され、クーマも素直に頭を下げた。とたん、アリシアはにっこりとした笑みを浮かべた。

「まあ良かった」

先ほどまでの表情とは一八〇度変わって、見かけ通りの清純そうな微笑だった。

「皆様、主人がご迷惑をおかけしました。ご挨拶は改めてさせていただきますので、このたびはこれで失礼いたします。ほらあなた、帰りますよ」

「あー、はいはい」

「返事はひとつ！」

「はいーっ！」

自らを空間跳躍させる自身召喚を唱え、コネラートとアリシアはゆがんだ空間に入る。最後にコネラートが振り返って言った。

「クーマさん、くれぐれも私の生徒に妙なまねはしないでくださいよ？ でないと……」

「あなた！」

「はいーっ！」

竜巻のように、夫婦は去っていった。実際、あたり一帯竜巻が通り過ぎたような情景だったし。

\*

「めでたしめでたしなの」

いつの間にかヘレネのそばにいた少女が、微笑みながらそう言った。いきなり見覚えのない人物が現れたので、思わず飛び退いた。

いや、声は聞き覚えがあった。先ほどの天翔馬の声だ。

きらめくような銀髪で、背丈はヘレネよりもやや低め。年齢はあまり変わらないようだが、口調が少し幼い。アルマフレアの民族衣装を着ていた。

「ねえ、あなた、本当に風神……」

「ん、ちょっと待って。……えーと、なにかやり忘れてるようなの……」

ひたいに指を当てて考え込んでいた少女、ジーナはぽんと手を打った。にっこりとあたりを見渡し、

「飛んでくのーっ！」

「なんでじゃああああああ！」

「なんでわたくしまでええええええ！」

風神【ジーナ】の巻き起こした突風は、三馬鹿+レイコを瞬時に空の彼方へ吹き飛ばした。

「これでヘレネちゃんの望みは叶えたの」

「あたしの？」

「ヘレネちゃんは、あの二人を吹き飛ばしたがってたの」

「べ、別の方が吹き飛んだんですけど？」

おどおどと聞くヘレネにジーナは指を立て、満面の笑みで答えた。

「ヘレネちゃんの魔法が暴走するのは、大自然の法則なの」

「そうだったんかいっ!？」

ってゆうか、今のはどう見ても故意でしょうが。ヘレネはその突っ込みを飲み込んだ。

しかし、呪文も唱えずにいきなり爆風を巻き起こすあたり、彼女は本当に風神ジーナのようだ。

クーマはコネラートが去っていったあたりを感慨深げに見つめていた。

コネラートを哀れんでいるのだろうか。いや、そんなはずはない。なぜなら彼が次に言った言葉はこうだったからだ。

「ヘレネさんや。ワシを尻に敷いてくれんかの？」

「イヤです」

きっぱりはっきりと、笑顔で断言するヘレネであった。

「ヘレネちゃんは面白い子なの。おっきいお姉様の言っていたとおりの」

ジーナの言葉に、ヘレネは思い出した。彼女が風神なら、なぜヘレネの唱えた呪文で現れたのだ？ 自分にそんな力が本当にあるのだろうか？

「私はそろそろ帰るの。けどその前に、おっきいお姉様から伝言があるの」

聞こうと思ったが、ジーナの舌っ足らずな言葉がそれを遮った。

「伝言？」

「私たち五神精は、あなたの力を必要としている。そのために、魔王宮殿まで来て欲しい。って言ったの」

「魔王宮殿？」

聞いたことのある名前だった。レインがそれを補足する。

「西の遺跡。あそこの正式名称だよ、確か」

ヘレネも思い出した。あそこにはエリクサーがあるという噂で、以前に一度目指したことがある。

目指したことがあるが、たどり着く前に体質による発作で帰還を余儀なくされた。

「行きたいけど、無理よ。エリクサーはここで作れるから、無理に行く必要もないし。それにあたし、あなたたちの役に立てるような力なんて持ってない」

ジーナは目を伏せた。少し考え込むような仕草だ。しかし顔を上げると、彼女はきっぱりと言った。

「どのみちあなたは来なければならないの。賢者の石は、魔王宮殿にしかないからなの」

「賢者の石？」

この疑問には、魔導師クーマが答えた。

「エリクサーの制作に必要な材料のひとつじゃ。言っておくが、ワシは施設を貸すと言っただけで、賢者の石は持っておらんぞ」

ヘレネのほおが引きつる。施設を借りることばかりで、材料をそろえることを失念していた。

「じゃ、確かに伝えたの」

ふわりと浮き上がるジーナに、焦ってヘレネは声をかけた。

「ちょ、ちょっと待って！ あなた達の目的は何なの？ あたしに何をさせようっての？」

意味深げな笑みを浮かべるだけで、彼女は答えなかった。

風神の去っていった後に残されたのは、ヘレネ・レイン・クーマの三人。なんとなく、沈黙があたりを覆う。

「で、行くのかい？」

「……行くしかないでしょ」

レインの質問に答えるヘレネは、うめき声に近かった。

## 第五話

---

アルマフレア城から西に三～四日ほどの距離に、この国で一番高い山がある。四〇〇〇メートル弱あるその山は、魔王【コスミック】の象徴とも言われている。

山麓は広大な森林となっていて、その奥地に通称西の遺跡——正式名称、魔王宮殿がある。

遺跡と呼ばれるとおり、現在は廃墟となっている。半壊した宮殿は森林と渾然一体となって、ますます神秘的な雰囲気醸し出している。

天井が抜け落ち、その部屋は木漏れ日がかすかに差し込むだけの薄暗い場所だった。だがその木漏れ日は、部屋の中央に立てられた彫像に差し込み、今なお彼女の存在を知らしめようとしているようにも見える。右手に剣をかざしたスーツ姿の女性の像——魔王コスミックの彫像を。

「お母様」

石像の元に、女性が一人ひざまずいていた。

きらめく薄紫色の髪が印象的な女性。二〇代後半くらいの印象だが、彫像を見上げるその瞳はうら若き少女のようにも見えた。

アルマフレアの民族衣装に身を包み、彼女は彫像に祈りを捧げている。

「この日がくるのをどれほど待ち望んだでしょう。

あなたのいないこの世界に私だけが存在することに、どれほどのむなしさを覚えたことでしょう。

あなたもきっと帰ってきたはずですよ。

あなたのいるべきは、あなたのふるさとでもあるこの世界なのですから。

まもなく、扉が開きます。その鍵となる娘が、この地へ来ることによって。

まもなく、あなたは復活されます。

魔王コスミック。我らが母君……」

\*

普段ならそろそろ就寝につく時間だが、ヘレネの部屋には明かりがともされていた。壁際に置かれたランタンが、部屋にうっすらとした、しかし雑談や読書には十分な光を与えている。

女の子らしく、ぬいぐるみがいくつかあるが、今は部屋の隅に片づけられている。ヘレネは部屋の真ん中で、地図を大きく広げていた。

北は賢者クーマが居を構えるレジカス山、西はギルディア大森林までを記した、東アルマフレアの地図。魔王宮殿はギルディア大森林よりも手前、アルマフレアで一番高い山、ジュランダ山の麓にある。

魔王宮殿までの道のりは、約三日。ヘレネは地図を凝視しながら、綿密にその行程を練っていた。

西の遺跡こと、魔王宮殿。もっとも近くの宿場から半日ほどの距離にある。

今回は、この宿場でハイフンに見つかって撤退を余儀なくされた。

この最後の宿場までは、街道沿いに行けばよい。要所要所に宿場があるし今は夏なので、万一の野宿の時のために毛布の一枚でもあればいい。

水や食料も宿場で補給できるので、多くは必要ないだろう。

そのため今回はわりと軽装で行ったわけだが、誤算がひとつあった。



各宿場には、浴場が用意されていないのだ。

身体を拭くという程度では、例の『変なヤツ引き寄せ体質』を完全に押さえることはできない。修道院の公衆浴場並の施設でしっかりと身体を洗わないといけない。

地図をもう一度よく見て考えてみる。街道沿い、その途中に小さな湖がひとつ近くにあるのを見つけた。ここなら水浴びができるかもしれない。

——と、

「ふーん、また行くつもりなんだ」

紙巻きたばこをくわえ、姉のレアが部屋へ入ってきた。

黒髪をポニーテール状に結い上げているが、長さが足りないのか縛り方が甘いのか、ところどころほつれていて、生活に疲れた主婦のような髪型になっている。

ノースリーブのシャツに短パンと、家の中とはいえかなり無防備な格好である。

そしていつもの眠たそうな顔。時間が時間だが、これが標準の表情なので、眠たいわけではないだろう。

髪型にも服装にもルーズな姉だが、これで結構美人なのだから不思議だ。

「うん。今度は一週間くらいかかると思う。留守の間お願いね」

「まあいいけど、なにをそんなに躍起になってるの？」

「前にも話したでしょ？ ほら、あの」

「変なヤツ引き寄せ体質、だっけ？」

「うん、それ」

レアは妹をまじまじと見、小さく嘆息した。

「あたしには、あんたが特別変わったようには見えないんだけどね。ドジでマヌケなのは今に始まったわけじゃないし、おしゃまで生意気で素直じゃなくて……」

なにか言い返そうとするヘレネの口元を指さして制し、

「けど、純朴で思いやりのあるいい子じゃないの」

にこりと、姉はそう付け加えた。ヘレネは思わず鼻白んでしまう。

「と、とにかく、この体質のせいであたしの日常はめっちゃくちゃなのよ。それを取り戻すために……」

「日常ねえ。なにを基準に日常というのかしら。こうは考えられない？ これもまた日常だって」

言われてヘレネは押し黙った。

そもそもあたしはなにをしたかったんだっけ？

綺麗になりたい！という動機で魔法を習い始めたんだっけ。

それまでの自分、それまでの日常に不満があるから、それから脱却したかった。

けど、綺麗になって普通にもてるようになった自分も、やっぱり自分だ。

もちろんこのハチャメチャな日々の中にいる自分も自分だ。

自分を基準、自分の視点からすれば、この周りにあるものはすべてが日常だということなのだろうか？

「ああ、あたしは別にあんたを止めようと思って言ってるわけじゃないから。それで気がすむなら、あんたの好きなようにしなさい。ただ、あんまり根をつめて悩んだって仕方ないぞと言いたいわけよ」

「うん、ありがと」

頭【かぶり】を振り、そしてヘレネはうなずいた。

そうだ。なににせよ今は目の前の目標をクリアしなければならない。神秘の薬、エリクサーは魔王宮殿にあるのだ。

「それにしても、君ほどの男がその腕をほったらかしにしておくとはもったいない」

シュラインの町の大通りにあるいつもの酒場には、レインと一緒に軽食をつつく青年がいた。鋼鉄製の胸当て【プレスト・プレート】はカウンターに預けられ、万が一の時のためか、ロングソードはテーブルに立てかけてある。

レインとあまり変わらない年頃、少年と言ってもいいのだろうが、実年齢よりも大人びて見える。レインが子供っぽい顔立ちなために、それと比べてしまうせいもあるかもしれない。

デューク・ラインハートという名のこの青年は、ティアラ王女親衛隊の隊長である。

「私に言ってくれば、いつでも親衛隊に迎え入れるというのに」

公開教室は教会によって開かれ、その様子は官僚や王室にも伝えられる。特に優秀な者は武官や王宮魔導師に抜擢されることもある。レインが親衛隊にスカウトされていたということだが、レインはきっぱりと断った。

「僕が守りたいのは王女様じゃないですから」

デュークは眉をひそめ、少し不満そうになる。

「むう。そのぶしつけなセリフ、聞かなかったことにしよう。しかしその誰よりも守りたいというのは、フィルリア様も気にかけていた、あの少女なのか？」

レインは少し困ったようにほほえんだ。

七年前の戦争。両親を失って泣きじゃくる幼なじみの、あのときの行動を思い出しながら、レインは言った。

「あのころ、僕はなににもできない子供でした。彼女は、動機はなんであれ目的があれば後先考えずに突っ走るヤツなんです。だから僕は少しでも彼女の力になりたいんです」

「うむ。その意気やよし！ その気持ちが彼女に伝わることを祈ろう。かくいう私も、この思いがティアラ様にいっこうに伝わらないのが実に歯がゆく……」

なにやら身分を超えたのろけ話に発展していくデュークの話の適当に受け流しながら、レインは目の前のベーコンとポテトのフライをついばみ始めた。

「ふふふふふ。におうぞにおうぞ悪のにおいがぷんぷんするぞ！」

「そう？ お酒やいろんな料理の、良いにおいしか感じないけど」

脈絡もなく現れたアスタリスクにも、レインは無頓着に受け答えた。

向かいの席のデュークは、何事かと演説を止めた。

「ふっ。これは正義を宿命づけられた私にしか感じ取れないかすかなにおい。今は小さいが、放っておけば確実に世界を闇で覆い尽くすであろう邪悪なにおい！」

「今、ぷんぷんにおうって言ってたように思うんだけど」

ヘレネのいない場では、レインが微妙にツッコミ役になるのかもしれない。

しかしアスタリスクはウチワのように大きく手を横へなぎ、レインのツッコミを遠くへ吹き飛ばした。

「ともかく！ まもなく奴らが来るぞ。みんな、今のうちに避難するのだ」

「お客さん。テーブルの上には乗らないでくださいよ」

ヘレネのいない場では、名もない店主も微妙にツッコミ役になるのかもしれない。

しかしアスタリスクは硬そうなブーツを、テーブルをみしみしいわせながらずり動かし、ファイティングポーズを取る。

「んぐんぐ、まったく正義の味方が、がつがつ、聞いてあきれれるね」

声は後ろから聞こえてきた。振り向くと、見覚えのある三人——言わずもがな、コロン・チルダ・ハイフンの三悪人が酒場の隅っこで料理を食いまくっていた。カラになった皿が山積みになっている。

チルダは光るまで皿をなめ回しているし、コロンは左手のフォークでパスタ・右手で骨付きチキンをむさぼり、意地汚いことこの上ない。

「ぐっはあ、まさかこんな近くにおったとはアスタリスク、痛恨の不覚！」

「わっはっは。俺様たちほどの悪人になれば、気配を消すことなど造作もないのだ！」

「そういうわけでご主人。我々は悪人ゆえ、これにてダッシュで失礼する！」

「こ、こらあ！ また食い逃げかあ!？」

「ふはははは！ 人の目を欺き店主の目をごまかそうと、愛と正義の使者、このアスタリスクの目から逃れることなどできん！」

「そこのあんたもお勘定！」

「うむ！ あの悪人どもをとっちめた賞金にて払うゆえ、しばしまたれい！」

「またぬまたぬのこんこんちきよ！」

店主と正義の使者と三悪人がてんやわんやの騒ぎを起し、周囲の客もそれをはやし立てている。そんな中、レインはまったくもっていつも通りに落ち着いていた。

「店長も気づいてたんなら入れなきゃいいのにねえ」

「まったくだ」

「デュークはあの悪人さんを捕まえなくていいの？」

「ご町内のトラブルは私の管轄外だからなあ」

レインの影響か、デュークも知らんそぶりで見物を決め込んでいる。

「それじゃ僕はそろそろヘレネと約束があるから」

言っただけで腰を上げるレインに、アスタリスクと三悪人がぴたりと動きを止めた。つられて店内が一瞬にして静まりかえる。

「そこのお前！ ヘレネちゃんがなんだって？」

「あっ、こいつ知ってるぞ。この前俺たちのじゃまをしたヤツの一人だ！」

「ふーん、あんた、あの小娘の恋人かい？」

「おお、少年よ。あの美しき乙女がどうしたというのだ？」

ハイフン・チルダ・コロン・アスタリスクと、次々とまくし立ててくるが、もちろんレインは動じない。

「知り合いか？」

「うん、まあ、いろいろあって」

じと目を向けるデュークは受け流し、にこにこレインは言った。

「そうだ。良かったらあなた達も一緒に行かないかい？ これから魔王宮殿へ向かうんだ」

シュラインの町の教会区、礼拝堂の片隅にある懺悔室。ヘレネはこの部屋の丸椅子に座って、これまでのいきさつを打ち明けていた。

告白の相手は、この教会の神官にしてアルマフレア第二王女、フィルリア・アルマフレア。

「なるほど……そういうことがあったのですか」

民族衣装では袖口・裾口共に広くデザインされているのに対し、神官服は身体全体を一枚のローブで覆ったような感じで、民族衣装とはまた違ったゆったりとしたデザインである。

その神官服を身にまとったフィルリアが、神妙な面持ちでつぶやいた。かつかつと足音を鳴らし、二つに束ねた深緑色の髪が揺れた。

「ところで、あたし悪いことしたわけじゃないのに、なんで懺悔室で告白しなくちゃいけないんでしょう？」

「そこはそれ、雰囲気というものが大事ですから」

きりっとした瞳を笑みの形へ変え、フィルリアは言い切った。

雰囲気で懺悔室へ押し込みますかとツッコミたいが、相手は王女様なのでひとまず我慢。

懺悔室は四角く狭い部屋で、机と椅子がひとつずつ。ランタンは二つ設置されているので、そこそこの明るさはある。

壁には、王族の祖神とされる界王シフォンの絵画が立てかけられてある。界王【シフォン】の両脇には、その妹神とされる魔王コスミックと霸王カルミアが描かれている。

「変なヤツ引き寄せ体質、ですか。その話が本当なら……」フィルリアは腕を組んで狭い室内を歩き回る。

もちろん彼女に事情を打ち明けたのにはわけがある。

ヘレネは以前から『聖水』に注目していた。水神祭のときの打ち水はただの水だったが、水神ニーナが起こした洪水が焼けた森を再生させたことを、ヘレネは忘れていない。

そして公開教室で、教会で『超聖水』を取り扱っていることを聞いた。ヘレネの体質に効くのかどうか、旅立つ前にどうしても確認しておきたかった。

現在、大神官であるワイオニー氏は所用で出かけているというので、フィルリアが代わりに対応した次第である。

「その話が本当なら、超聖水で発作を抑えることは可能だと思います」

身を乗り出すヘレネを、フィルリアは「ただし」と付け加えて制した。

「ご存じかと思いますが、超聖水は他物質との親和性がきわめて低い液体です。これを香水のように身体へ振りかければ、一種のフィルターとなって身体を覆い、フェロモンの放出を抑えることができるでしょう。しかしあくまでも押さえつけるだけで、フェロモンの分泌が止まるわけではありません。あまり多用すると、風船が破裂するように、あるとき一気に吹き出す可能性があります」

「それでも」

それでも、今回の道中では役に立つかもしれないから。と言いかけて、ヘレネは口ごもった。

魔王宮殿へ向かうことを告げたら、心配させてしまうだろうか？

見ると、フィルリアもなにかをつぶやいていた。

「あなたの持つ不思議な魅力は、そういう妖しげな理屈に基づく物ではないように思うのですが……」

「はい？」

はっとして、フィルリアはヘレネに笑顔を投げかけた。

「い、いえ。その体質、治ると良いですね。超聖水、必要分だけお譲りいたしますよ。頑張ってください」

「はい、ありがとうございます！」

小さな霧吹きに詰められた聖水をリュックに詰め、ヘレネは教会をあとにした。あとはレインと落ち合っ  
て西の遺跡へ向かうのみだ。

「ふ、ふふふふふふふ」

酒場では、アスタリスクが小刻みにふるえながら不気味な笑い声を上げていた。

「おやおや、正義の味方がぶれがついに壊れちゃったようだねえ」

「いやいや姉ちゃん、こいつはもともと壊れてたと思うぞ」

「は——っはっはっは！ 魔王！ 魔王ときたか！」

哄笑とも怒号ともつかぬ大声を上げ、アスタリスクは天を仰いだ。

「魔王！ これぞ究極の悪！ 私が倒さずして誰が倒す！」

「えーと、魔王宮殿へ行くといっても、魔王を倒しに行くわけではないんだけど」

レインのツッコミはヘレネにははるかにかなわない。もちろん小声のこの台詞は台風の前木の葉のように吹き流された。

「魔王が実在するかは疑わしいんだけど、ねえ？」

「おう！ 悪として！ 伝説の魔王、その宮殿を拝まずしてどうする！」

「ヘレネちゃんが行くなら俺だって行くぞ！ 魔王なんか怖くない〜！」

なんかおのおの好き勝手ほざいてはいるが、目的は合致したようだ。レインは小さく嘆息した。

「レイン！ そろそろ行くわよ。連中に見つからないよう、今晚のうちに……！」

その『連中』とよろしくやっている酒場にヘレネが飛び込んできたのは、ちょうどこのときである。

ヘレネは考えずにいられない。

あたしのこの不幸、本当に治るのかしら？

\*

シュラインの町の領主、カール公爵の館には、ちょっとしたカジノ並の娯楽室がある。

ルーレットやカードゲーム用の台座、鼠【ラット】レース用のレーンなどの他に、小さめの緑色のテーブルがひとつ、部屋の片隅にある。

このテーブルを四人が囲み、がちゃがちゃとなにか四角い石のような物をかき混ぜていた。

「はっはっは。しかしこのケインに教わった麻雀【マージャン】というゲームはおもしろい」

「まったくですな。英雄ケイン。強いだけでなく、我々の知らぬ様々な知識も持っていました」

雀卓を囲むのは、カール公爵・ワイオニー大神官・賢者クーマ・教師コネラートの四人。七年前の大戦で活躍した面々がここに勢揃いしていた。

やっていることは麻雀だが。

かんらかんらと軽快に笑うカールに対し、ワイオニーは落ち着いた調子で受け答えている。

「さて、麻雀には金銭の他にも脱衣を賭けて行う方式もあってのう。ここにちょうどコネラートめの奥方もおることじゃし……」

「ほほほう。なかなかおもしろい提案をしますねクーマさん」

「あなた！」

なめらかに攻撃魔法を唱え始めたコネラートだが、脇に控えていたアリシアに一喝されて呪文を止めた。クーマの助平【スケベ】・コネラートの喧嘩っ早さは相変わらずのようだ。

こほんと咳払いをひとつ、コネラートは言った。

「そういえばケインは今頃どうしているんでしょうね。せっかくこうしてみんながそろったのですから、ケインにも是非来てほしかった」

クーマが、ふおっふおっふお、と笑った。

「麻雀を教えた張本人だけに、あやつはべらぼうに強いぞ？ 戦闘的な強さもべらぼうじゃったがの。まあさておき、ワシもケインとは2年前の儀式以来、会【お】うてはおらんな」

「ああ、時空ねじれの再強化の儀式ですか」

これにはワイオニーが補足した。

「コネラート様とクーマ様と、ケイン様。それに私と数十名の神官、王宮魔導師達もが補佐につき、禁断の魔導書に封印を施したのが先の終戦直後。時空ねじれは時と共にゆるんでしまうので、5年に一度再強化を施す必要があります。ケイン様は自分の世界とやりに戻られてしまい、この儀式の時にしかアルマフレアにはこれないそうです。なんでも手続きが大変だとか」

「この世界の住人ではない、か。この世界から去っていった神族でもない、確かに我らと同じ人間のはずが……。変わったヤツじゃったのう」

感慨深げに、四人はじゃらじゃらと牌【パイ】をかき回した。

ふと何かを思い出したように、コネラートが手を止めた。

「変わっているといえば、私の受け持ちの生徒にヘレネという子がいるんですが、彼女も変わった子でしてね」

鋭くクーマが反応した。

「あの娘、何者なんじゃ？ 神族と妙な関わり合いを持っておるようじゃが」

先日の風神の一件を話すと、ワイオニー・カールも話に乗ってきた。

「水神祭のときの火災には水神が、大学へ招かれたときは地神・火神が現れたと、レイコお嬢様から聞いてます」

「そういえば私が賭けた賞金首を捕まえたときも、雷神が見え隠れしたという噂を聞いたな」

「五神精【ごしんしょう】……彼女たちが現れたとき、必ずそのそばにヘレネさんがいる……」

地神・水神・火神・風神・雷神は、合わせて五神精と呼ばれている。神族の中でも、五王神【ごおうしん】に次ぐ地位の高位神だ。

「神族が現れるとはなんとも嫌な予感がするな。先の戦争も、裏で神族が手を引いていたとケインから聞いている」

「なんでも今度、魔王宮殿まで行くとか言ってましたが……」

「なんですってえ!？」

がしゃんと陶器の割れる音。お茶を差し出しに部屋へやってきたレイコが、故意か事故かお盆ごと雀卓に投げ込んだ。

「うああ、なんてことを！」

「そんなことよりお父様！ ヘレネさんがいったいどこへ行くですって？」

レイコの高飛車は父親でも四大英雄の前でも衰えない。思わずひるんだカールが目線をコネラートへ向ける。

やれやれと、コネラートはここまでの会話をかいつまんで説明した。

わなわなと、レイコはこぶしを震わせてうなった。

「なんということでしょう。あのドジでマヌケなレベルゼロ魔法使いがそんな危険な遠出を！」

口は悪いが彼女のことを心配しているのかとカールは感心したが、それは一時の気の迷いだった。

「そんなことになればあのお優しい薄幸の美少年、レイン様を引きずり回してゆくに決まっていますわ！ こうしてはいられません。アルツ！」

「ここに！」

音もなく、代わりに屋敷を揺るがす爆声とともに、タカマガハラ家のお抱え忍者・アルツが現れた。

「ゆきますわよ。レイン様を魔手からお救いに！」

疾風【はやて】のように現れて、疾風のようにレイコは去っていった。

「……………」

なんとなく、背後で空っ風が吹いたような気がした。

「どうする？ 我々も行くべきか？」

レイコの言い分はともかく、ヘレネとその周辺で良からぬ動きがあるのは間違いなさそうだ、とカールは思った。

しかしコネラートは苦笑と共に手を振る。

「いえ、彼女たちは悪神ではないと思いますよ。伝説でも悪い話は聞きませんし、実際に見た感想としても、彼女たちが悪神だとは思えません」

「ワシらが動くとするれば、彼女から助けを求められたとき、というわけか。七年前、ワシらがケインに助けを請うたように」

かつての英雄達はため息をつき、麻雀を再開した。

\*

それから二日。

旅路はまあ、順調だったといって良いだろう。

まあ、

- ・ときおりハイフンが「ヘレネちゃん好っきじゃあああああ！」と叫びながら飛びかかってきてはアスタリスクとどつきあい
- ・行く先々で三悪人がスリやら万引きやら子供からカツアゲやらを繰り返しては役人に捕まりかかってヘレネが事情説明に
- ・ああ、暑くてわたくしもう駄目ですわ〜、とレイコがレインにもたれかかってはヘレネと口喧嘩に
- ・アルツの爆声に、アスタリスクが哄笑で対抗、さらにハイフンが対抗して真っ赤に燃える夕日に向かって「ヘレネちゃん好っきじゃあああああ！」

といった出来事が順調のうちに含まれるのならば、だが。

連中の奇行と周囲のまなざしに、いい加減胃がぎりぎりし始めるヘレネだが、この日の夕方、最後の宿場が見えてきたことで、ほっと胸をなで下ろした。

間近まで来たジュランダ山は、赤い西の空を覆うように厳然とそびえ立っている。夕日は山の向こうに隠れ、このあたりはすでに薄暗くなってきている。

標高にしてすでに数百メートルはあろう。東はゆったりと遠くまでよく見える。北は少し入り組んだ地形になっていて見えにくい、山間に隠れるように湖があるはずだ。

そして宿場から南へ半日。雄大な樹海に隠れるように魔王宮殿があるはずだ。

最終目的地はその魔王宮殿だが、今日の目的地は北の湖である。

ここまでの宿場では、身体を拭くこしかできなかった。超聖水も、思ったほど効果を実感できない。やはりしっかりと水浴びをしなくては。

「ヘレネ？ そっちは谷だよ。宿場は向こうだけど、もしかしておしっこかい？」

「まったくこの子は方向音痴なことですわね。わたくしとレイン様の先導がなければ満足に旅もこなせないのかしら？」

「そんなんじゃないわよ！」

レインのボケにレイコのイヤミとダブルパンチを食らい、ヘレネは金切り声を上げた。

問題は、この野郎どもをどうやって出し抜いて水浴びをするか、である。

「とにかく、早く宿を取って早めに寝るわよ。明日は夜明けと共に魔王宮殿へ向かいたいんだから」

さて、とっぴりと夜も更け——るにはまだ早いといった時間。

前二日間と同じく、今晚も男部屋と女部屋と分かれて部屋を取ったわけで、こちら男部屋にはレインの他に、アスタリスク・ハイフン・チルダ・アルツという濃い面々がそろっている。

男だけの特権、猥談に花を咲かせるのにも飽きて、そろそろ眠くなってきたレインが寝支度を始めたときのことである。

『皆様、お約束の時間でございます』

暑苦しいほど厳かに、忍者装束のアルツが言った——ら騒音公害なので、セリフの書かれた羊皮紙を掲げて見せた。ピンと背筋を伸ばした正座姿勢である。

「ぬう、いったいどうしたことか？」

つられて厳かに、アスタリスクが聞いた。

ちなみにいつでもどこでもマイペースのレインは、すやすやと寝息を立て始めていた。部屋の広さの割に人数が多いので、ベッドはなく雑魚寝である。

「なにか約束をした覚えはないのだが？」

アルツは、ちっちちち、と指を振った。

『そのお約束ではござらん。世の中には「お約束ごと」というモノがあるのでございます』

「お約束ごと？」

『左様。洗濯物を干し終わったところで雨が降るとか、買い物しようと町まで出かけたなら財布を忘れてこりゃ愉快、といったたぐいのアレですな』

『拙者、今し方気づいたのだが、隣の女子部屋から気配がはたと消えているのでござる』

『レイコお嬢様・ヘレネ殿・コロン殿。かわや【トイレ】ならば、この三人がいつべんにいなくなるということはまずありますまい』

『何かの事件に巻き込まれたか？ いやいや、そんなことになってはタカマガハラ家専属忍者としての面目がたたぬ』

アルツは次々と羊皮紙をめくる。会話が成り立つということはその場で書いては見せているということのはずなのだが、書いてる場面が全く見えないというのはかなりの謎である。

この間、アスタリスク・ハイフン・チルダの三人は壁際に耳を押し当てて隣の部屋に集中していた。

「姉ちゃんのいびきも歯ぎしりも聞こえないな。こんな薄壁なら寝不足になるほどのボリュームで聞こえてきそうなものだけど」

「うん。ヘレネちゃんの寝息も聞こえないな」

「うむ、確かに誰もおらぬようだな」

「そうなると、三人はいったいどこへ行ってしまったのだろう？」

『こちらをご覧あれ』

アルツは一枚の地図を、狭い男子部屋に広げて見せた。少しくたびれたその紙は、東アルマフレアの地



図だった。

『こちら、先ほどヘレネ殿から預かり申した地図でござるが、これ、このあたりをご覧ください』

アルツが差した指の先には、丸印がつけられていた。

『ここがこの宿場。ここから少し北へ行ったところに……湖がござる』

つつつ、と指をなぞり、丸印のところでぴたりと止める。彼の言いたいことが自ずと見えてき、一同、息をのんだ。

「なるほど。まだまだ暑い季節だからなあ」

「二日も歩き通しでは疲れもたまろうというもの」

ここまで推理すれば（推理になってるのは微妙だが）、答えは自ずと見えてくる。彼女たちは水浴びに行ったのだ。

顔を見合わせる男どもに、アルツが割って入る。

『さあさあさあ、いかがいたしますか!?!』

書き殴りの羊皮紙を突きつけ、ほっかぶり越しに凄む。

彼らに与えられた選択肢は以下の三種類である。

- ・ こっそり覗く
- ・ うっかり覗く
- ・ じっくり覗く

覗くしかないんかい!? と突っ込むヘレネはここにはいない。

この中では唯一の良識人であるレインも、今は睡眠中だし。

「ま、まあ、お約束じゃあ仕方ないよな」

「そうそう。ここはうっかり覗いてしまったという展開にしておけば、お客様方も納得してくれるに違いない」

お客様って誰やねん!?!と突っ込むヘレネはここにはいない。残念ながら。

「わあ、冷たくて気持ちいい」

膝までつかり肩に水をかけ、ほうっとヘレネはため息をついた。

実に三日ぶりの水浴びである。

夜鳥と蛙の鳴き声が、静かにあたりに響いている。風はほとんど吹いていないが、冷たい湖水が疲れた身体を癒してくれる。

星明かりのみという暗い夜空の元、ヘレネ・レイコ・コロンの三人は、宿場から少し歩いたところにある湖で水浴びをしていた。

ほとんど真っ暗だが、目が慣れてくれば周囲が全く把握できないわけでもない。星明かりというのも意外に馬鹿にできないものだな、とヘレネは思った。

見上げると、吸い込まれそうな星空が広がっている。南西から北東に向かって、ぼんやりとした光の帯が走って見える。あれは天の川だ。

そういえば伝説では、遙か昔に神族がああ天空からこの世界へ降りてきたという。神族が住んでいたと

「うあ、この空は、どういう世界なのだろう？」

「それにしても真っ暗でわかりづらいたらありゃしない。明かりのひとつくらいないのかね？」

なんとなく雄大な感動に包まれていたヘレネだが、コロンの不満そうなだみ声に、現実には引き戻された。

「ん？　じゃあ、明かりの魔法でも」

「おやめなさい！　また暴走させたいんですの？」

うろ覚えの魔法を唱えようとしたヘレネを、レイコが叩いて止めさせた。

「そもそも、明かりなど無い方がヘレネさんの貧相な身体が露呈されることもなくてよろしいんじゃないかと。おほほほほ」

ムツとなってヘレネはレイコをにらみつけた。もちろんこの暗さではわかるはずもなからうが。

「レイコさんのほうこそ、人のことを言えるようなスタイルなのかしら？」

「ほほほほほ。なにかほざいてる小娘がいますわ。少なくとも、いつも貧相な服装の小娘が貧相なスタイルだというのは見ればわかろうというもの」

言い返そうとするヘレネに、レイコはくるりと背を向ける。

「ああ、レイン様となら裸のおつきあいをしてよろしかったのに」

星空を照り返したかのような瞳で、レイコが両手を握ってさも清純そうにとんでもないことを口走る。

「レインにだって、好みつつーもんがあるわよ」

ぼそりとしたヘレネのツッコミに、レイコは過敏に反応した。

「んまあ！　ならヘレネさん、あなたのような貧弱貧相な貧女が好みだとでも？」

「誰が貧女よ!？」

「やーれやれ、子供が二人くだらないことでいがみ合ってるねえ」

あほらしいとばかりに、コロンのため息をついた。

「それよりもあんた達、まだ気づかないのかい？」

「？」

口論を止めて不思議そうに見つめる二人に、なにもないはずの闇に向かってコロンは不敵に言った。

「不埒な馬鹿どもが、のぞきに來てるんだよ」

(うおおっ、いきなりばれちまったぞチルダの兄貴！)

(馬鹿、声を出すな！　暗いんだから、あそこからじゃわかるはずがない)

(うむ。あれは悪人特有のハツタリと、我が正義の予感が告げている！)

茂みに隠れてひそひそささやきあう男ども。アルツはささやき声でも人並み以上のボリュームがあるので、うんうんうなずいているだけだが。

「な、な〜ご」

声色を変えて、チルダが鳴いた。

しかし、この暗さと距離からでもわかるほどに、コロンは激しく肩をすくめた。

なにかをヘレネへ告げる。

「え、いいの？」

「いいからやっちまいな」

「ちょ、ちょっとそれはあまりにも……」

レイコが止めようとするが、ヘレネはかまわず呪文を唱え始めた。

「蛍舞踊淡光【フェアリー・ライト】！」

かっ！

魔法名とは似ても似つかぬ激しい発光が一瞬、ヘレネ達を含む全員の目をくらませた。

本来ならこの魔法は、手のひらサイズの光の固まりが数個、妖精のようにたゆたいながらあたりに優しいあかりをもたらすというものである。

しかしヘレネが起こしたこの魔法は、緑やらオレンジやら紫やらけばけばしくどぎつい光をそこら中にまき散らしていた。なんか夜空にはオーロラも発生したようだ。

「あー、まー、なんていうか……」

「やっぱり失敗しましたわね。さすがはヘレネさんというかなんというか」

「ううう、少なくとも破滅的展開にはならなかったんだから大目に見てよう」

泣きそうというか悔しそうというか、ヘレネはなんとも惨めそうに言い返すのがやっとだった。

麻痺した視神経がようやく回復してきたか、男どもは目をしばたかせながらこちらに目を向けた。

そして愕然とした。

「おや、どうしたんだい？ 年頃の娘が三人水浴びにいそしむ場面なんて滅多に見られるもんじゃないよ？ もっと喜んだらどうだい？」

冷やかに、コロンは笑った。

「み、水着……？」

かろうじて聞こえたこの声は、男どもの中の誰のものなのか。

ヘレネ達三人は、水着を着用していたのだ。

当然といえば当然である。誰が覗かれるとわかってて、素っ裸で水浴びをするものか。三日前、旅路を検討していたヘレネはこの湖の存在を知り、急いで水着を用意したのである。

ヘレネのは背中側が大きく開かれているが、オーソドックスなデザインの白い水着。レイコのはセパレートスカートをついた、上下の青いビキニ。コロンののは、黒い見事なハイレグ水着である。

「レイコさんとコロンさんも用意していたのは意外だったけど」

「あーら、水着を常備しておくことくらい、乙女の常識ですわ」

「まあそういうことさね」

そ、そういうものなの？ ツッコミかけたその言葉をヘレネは飲み込んだ。

声も出せない男どもを一瞥し、レイコがいないことに少し安心した。

「ああ、レイコ様になら覗かれてもわたくし本望というもの」

レイコのいつものたわごととはともかくとして。

「そのレイコ様がいなければかりか、こんなゲスどもに覗かれていたなど、わたくしととてもとても耐えられせんわ」

レイコはキッとした視線を野郎どもへ送った。

握り拳をぱきぱき鳴らしながら、コロンがすごむ。恐怖ですくんだか、男どもは身動きできない様子だった。

「わかってるだろう？ これは『お約束』なんだから、みっちり懲らしめてやらないとねえ」

「違う！ 俺が求めた『お約束』はこんなんじゃないiiiiiiii！」

汗と涙と鼻汁をまき散らしながら、チルダがぶんぶんと首を振る。

「問答無用！」

浮き足だって今にも逃げ出そうとする連中に、アスタリスクが剛胆に言い放った。

「落ち着け皆の者！ こういうときこそ前向きに物事をとらえるのだ」

「というと？」

「我々は罪ゆえに逃げるのではない。これは追いかけてこなのだ！」

「なるほど！ 『あはは、待て待て～』『はっはっは、つかまえてごらん』のアレだな！」

「うむ！ 海辺かお花畑ならベストなのだが、この際水辺でもかまわぬだろう。それではゆくぞ！」

「おう！ はっはっは、つかまえてごら……」

突如、湖をたゆたっていた光の玉が、意志を持ったかのように男どもに突進してきた。

「な、なんだこれは!？」

実体のない光っているだけのはずのその玉は、彼らを一カ所に押し戻してしまった。

「でかしましたわへレネさん。ごくごくまれには役に立つ魔法も使うのですね」

「いや、今のはあたしじゃ……」

言いかけて、へレネは言葉をつぐんだ。もともと暴走魔法である。こういう暴走の仕方もありなのかな、と。

へレネ達は折り重なった男どもの前に立ちはだかった。光の玉はその周囲を取り巻き、そのけばけばしい光源がなかなかの迫力を醸し出している。

「姉の裸を覗こうなんていう不埒な弟には鉄拳制裁が必要だね！」

野獣の笑みでコロンがこぶしを握るが、チルダは最後の気力を振り絞った。

「姉貴！ はっきり言うが、俺は姉貴の裸なんぞアウト・オブ・眼中！ 俺が見たかったのはもっと若くてもっとぴちぴちとした……」

「あーはっはっは！ それはそれで腹が立つねえ！」

「うぎゃああああ！ おーたーすーけー！」

もちろんその最後の気力は何の意味もなかったが。合掌。

ほかすかほかすかと原型を崩していくチルダを横目に、アルツも負けてはいられなかった。

「お嬢様。無礼を承知で、お嬢様には進言しなければならぬことがございます」

落ち着きを取り戻し、アルツは言った。

「栄養バランスを常に心がけた食事をしないと、すぐにスタイルに影響が出ます。それともっとエクササイズを。ジョギングやダンスなどで引き締まるべきところをしっかりと引き締め……」

「減給三ヶ月」

冷やかなレイコ言葉に、夜の静寂が取り戻された。

「よくもまあそんな宿場まで届きそうな大声で、べらべらべらべらと言えたものですわね。減給といわずいっそ解雇すべきかもしれませんわね」

「ひいい！ おーゆーるーしーをー！」

すっとんきょうな叫び声がこだまする中、残る二人はなんとか起きあがってさらなる逃亡を試みていた。しかしこれにはへレネが立ちはだかった。

息をのんで立ち止まるアスタリスク&ハイフン。

この毒々しい光源の元でも、へレネは美しく見えた。白い水着だから、光に合わせて虹色に輝いて見える。そして彼女のしっとり濡れた空色の髪から照り返される光は、後光が差しているようにも思えた。

だが……。きわめてまじめに、むしろ悲しみすら携えてアスタリスクは首を振った。

「美しき乙女よ。あなたはたったひとつだけ過ち【ミス】を犯した」

カー杯こぶしを握り、彼は言った。

「白い水着なのに、透けないのは反則というもの！」

「知ったことかああああああ！」

ツッコミモード時のへレネは、一流の戦士にも匹敵する戦闘能力を発揮する。二メートル近いアスタリ

スクの顔面に見事な空中双脚蹴り【ドロップ・キック】がたたき込まれた。

「乙女よ、あなたはチラリズムというモノをわかっていない！」

「わかってたまるかあああああ」

もんどり打って倒れたアスタリスクに、どかばきどかばきと連続コンボがたたき込まれた。

「ヘレネちゃんは俺を見くびっているんだな」

ノックアウトされたライバルを一笑に付し、ハイフンもヘレネに対抗する。

「どういうこと？」

「俺の想像力を持ってすればそんな水着、透かして見ることなど造作も無し！」

「一生夢の世界で生きてちょうだい！」

背後から見事にハイフンの首を極める。並の人間なら首の骨が折れたろうが、そこはハイフンなので持ちこたえた。

「けどヘレネちゃんのその水着は、それはそれでそそる……」

どこまでもな変態に、ヘレネは容赦なく腕に力を込める。

ごきりと嫌な音を立て、そしてハイフンは失神した。

……………。

「おーたーすーけー！」

「満潮になったら沈んでしまいますがなああああ！」

こんな小さな湖に満潮も干潮もないってば。

水辺に頭だけ残して埋められた男どもの叫びを耳に、ヘレネ達は宿場へ引き返した。

湖に残されたのは、四人の変態どもとそのすすり泣く声。そのほかに、二つの人影があった。

この夜闇の中では、彼らにはその姿は見えないし、見えたところで救世主と期待することはかなわなかった。

彼らには届かない程度の小声で、小さな人影のひとつは言った。

「ヘレネちゃんの力を持ってしても、お母様を直接召喚することはかなわなかったみたいなの」

「なー」

「けどそれは、おっきいお姉様も予測していたみたいなの。重要なのは、明王【エルミタージュ】お母様の力の一端だけでも、ヘレネちゃんが召喚したことなの。これでお母様達が無事なことは証明されたの」

「なー」

「わたしはヘレネちゃんの観察を続けるから、ヴィーナちゃんにはおっきいお姉様に報告をしてきてほしいの」

「なー……」

「そ、そんな嫌そうな顔をしないでほしいの。仕方ないからわたしが報告に行くの」

「なー！」

人影——風神ジーナと雷神ヴィーナ——のうちのひとつ、舌っ足らずな口調の少女は、髪の色以外はうり二つの少女を残し、夜闇に消える。去り際に、いたずらっぽい笑いと言葉をひとつ残して。

「けど、光の玉を操るのはちょっぴりおもしろかったの～」

\*

夏も盛りを過ぎつつあるが、朝はまだまだ早い。黄色い太陽が、宿場をくまなく照りつける。

翌朝。

微妙に寝不足の目をこすり、ヘレネは旅路の再開間際からぼやいた。

「あーもう、昨日はひどい目にあったわ」

「あの、それはこっちの台詞……」

男どもの消え入りそうな声も、ヘレネの刺すような視線で完全に沈黙した。

彼らは明け方、たまたま釣りに来た地元の人に助けられたらしい。あのまま見捨てたかったのだが、救助されては仕方がない。

ヘレネは顔をはたき、眠気覚ましと共に気合いを入れる。

そうだ。この憂鬱な気分も、今日でお別れとなるのだ。(たぶん)

魔王宮殿でエリクサーさえ手に入れれば、このうっとうしい連中につきまとわれることもなくなるのだから。(たぶん)

宿場から街道に出ると、今度は下り坂になっている。ジュランダ山の中腹を回り込むように、街道は走っている。

ここを少し歩き南へはずれば、目的地の魔王宮殿となる。

ちなみにここからは、下方に広大な樹海が広がっているのがわかる。人の進入を拒むような密林。あの奥に魔王宮殿があるはずだ。

「さああと少し。気合い入れていくわよ！」

「お～……」

テンションを高めるヘレネに対し、男どもは昨夜のお仕置きもあってかすこぶるテンションが低い。レイコとコロンは「はいはい」といった調子、レインはいつも通りのマイペースではあるが。

と、レインがヘレネに声をかけた。

「ヘレネ、こんなところに馬がいるよ」

「見りゃわかるわよ」

「レイン様の素晴らしいご指摘になんてぞんざいな！」

いつもの口論はさておき、一行の行く手を阻むように、確かに白い馬がたたずんでいた。

いや、阻むというよりは、彼女たちが来るのを待ちかまえていたかのようだ。

なめらかなラインが見事な、真っ白な馬。たてがみは輝くような金色【きんいろ】で、優しげにヘレネを見つめる瞳も金色だ。

どこかで見たような気がする。ヘレネは奇妙な既視感【デジャブ】を覚えていた。

「これは……馬ではなくて一角獣【ユニコーン】のようですわね」

優雅な馬体をまじまじと見つめ、レイコが言った。

言われて見ると、確かに馬の額に角がある。長さは三〇センチほどもあるだろうか。螺旋状に伸びている。

ぶるる、と鼻を鳴らし、ユニコーンはヘレネの頬をぺろんとなめた。人なつこい馬である。

ヘレネは特別動物好きなのわけではないが、なつかれる分にはもちろんうれしい。そういえば前にも、ネコのような兎のような動物になつかれたっけ。と、そこまで考え、

まさか、この子も——？

考えを遮るように、ユニコーンは頭【こうべ】を垂れた。

背に乗れと言ってるようだ。

乗ろうかどうしようか考えあぐねていると、ユニコーンはその長い角をヘレネの股ぐらに差し入れ、  
「うきゃあ!？」

そのまま無理矢理背に乗せる！　そして一直線に走り出した。

「ヘレネ！」

「ヘレネさんお達者で～。さあ、わたくしたちは愛の逃避行へ！」

「ちょっと待てええええええ！」

「乙女をかどわかす悪しき獣め！　成敗してくれる！」

「なあ姉ちゃん。こういうとき悪人たる俺たちはどうすればいいのかな？」

「おもしろそうだから追いかける！」

「合点承知！」

「ヘレネちゃん好っきじゃあああああ！」

なんかみんな好き勝手なことを叫びながら、その声がだんだんと遠ざかっていくのをヘレネは感じていた。

……………。

少し気が遠くなっていたらしい。気がつくと、薄暗い森の中にヘレネはいた。木の幹によりかかるような格好で、頭を振って意識をはっきりさせる。

どのくらい気を失っていたのだろうか？　見上げると、枝葉の間からかすかに日が差し込んできているのがわかる。太陽の高さからして、正午近いだろうか。

「ヘレネ、よかった。そこにいたんだ」

「ちっ。せっかくレイン様とラブラブでしたのに」

「ヘレネちゃん好っきじゃぼぶえっ！」

ひょいとかわし、突進してきて木に体当たりして沈黙したハイフンはさておき、レインたち旅の一行も遅れてやってきた。どうやら行方不明者は出ずにすんだようだ。

「あんた達はどうやってここへ？」

「うん。あのあと、この前のペガサスが現れて、僕たちをここまで運んでくれたんだ」

言われてヘレネは思い出した。

さっきのユニコーンは、先日のペガサスとそっくりだったのだ。

「どうやらみんなそろったようね」

その声に、ヘレネは硬直した。

あまりにもなじみのある、しかしここにいるのは不自然なはずの声。ハスキーだが、若さも秘めた綺麗な声。

振り返ると、まずは森林と一体になったかのような大きな建物が目に入った。大理石で作られているようだが、あちこち崩れている。

ここは、魔王宮殿の入り口だ。あちこち壊れていてどこからでも進入できそうなのであまり意味はないが、五つの人影が入り口に立ちはだかっていた。

そのうちの三つに見覚えがあった。一〇歳くらいの可愛らしい少女と、ヘレネと同年くらいの小柄な

銀髪の少女。クーマの館でも見せたいはずらっぽいほほえみを、その少女はもう一度ヘレネへ向ける。

「ご紹介いたしますの。まずはわたしが、魔王コスミックが娘、風神ジーナなの」

ジーナは軽く会釈をし、今度は両隣に控える少女を紹介する。

「こちらが、界王シフォンが娘、水神ニーナなの」

「にー！」

名を呼ばれたニーナは、元気よく鳴いた。女の子の姿をしているが、動物の鳴き声だ。

ジーナは反対側に立つ少女の肩を軽く抱き、

「こちらが、霸王カルミアが娘、雷神ヴィーナなの」

「なー」

恥ずかしげに、ヴィーナが鳴いた。

ヴィーナは、ジーナと双子のようによく似ていた。違いといえば、ジーナの銀髪に対し、ヴィーナは金髪。瞳も髪と同じ金色だ。

この特徴を見て気がついた。さっきのユニコーンは、この子だ。

事態がよく飲み込めないまま、紹介は続く。端に控えた、長身の女性が一步前へ出た。

「あたいが、明王エルミタージュが娘、火神ターナ」

ふん、と鼻を鳴らし、すぐに元の位置へ下がる。

この名前とぶっきらぼうな声にも覚えがあった。大学図書館へ行ったとき、コロンに乗り移って襲ってきた女だ。禁呪で撃退したとき、フェニックスになって逃げていったっけ。

そして、最後の一人がヘレネの前へ立った。

きらめく薄紫色の髪。ややきつい面差しの美女だが、その瞳はむしろ若き少女を思わせる。

治療院で何度も見た、忘れようのない整った顔立ち。一度ヘレネの体質に引っかかって、襲われそうになったこともあったっけ。

しかし彼女の着ている服は、神族がまとうべき衣装。ゆったりとした暖かそうな服。アルマフレア国民の正装ではあるが、藪も混じるこの密林には合わないでたち。

「そして、あたいが冥王レニングラードが娘、地神カーナ。この姿では初めましてね、ヘレネちゃん」

カーナはヘレネに、にこりと挨拶をした。



## 第六話

---

「ヘレネさん！ ヘレネさんはいずこ!?!」

「お兄様。そんなに急がなくても、ヘレネさんは逃げはしませんよ」

「いえ、姉様。ヘレネさんは追うと逃げるタイプだと思いますけど」

ジュランダ山の麓に広がる樹海の中、王家三兄妹、否、王子ティエンは草木を分けて薄暗い森の中を行進していた。

大学に通うときの服装とは違い、三者三様に戦向けのコスチュームに身を包んでいる。

三兄妹はそれぞれ剣士・魔導師・神官としての教育を受けていて、ティアラは堅そうな櫛の木による大きな杖を手に、黒を基調にした全身を覆うコート。ただしフードは外して可愛い素顔をさらけ出している。

フィルリアは教会のときと同じ神官服。手にはティアラと同じく長い杖を握っているが、こちらは金属製の錫杖である。

そしてティエンは、金属製のブレストプレートに幅広の大剣。半端に伸ばした髪の暗めのハンサムにはまた似合わないコスチュームだ。

三兄妹に共通するのは、胸のあたりにアルマフレア王国の紋章が刻まれていること。王族であることを証明する印だ。

そして後ろに続く無数の兵士達。王子・王女の親衛隊が総勢約一〇〇〇名、足並みをそろえて随行している。

「ああ、気弱で内向的でネガティブで鈍行な僕にはヘレネさんの力が必要だというのに……」

木の幹に「の」の字を書きながら、ティエンがぶつぶつ何かをつぶやいている。

三日前、ティアラは親衛隊隊長のデュークから、レインがヘレネとともに魔王宮殿へ向かう旨を聞いた。そのとき居合わせたフィルリアも、ヘレネが聖水を欲したのはそのためかと気づいた。

そして、ボケの練習をしていて誰も突っ込んでくれないので部屋の隅でいじけていたティエンにもその会話が伝わり、急遽ヘレネの後を追うことになった。親衛隊が同行するにしてもティエンだけでは危なかしくて仕方がないので、妹たちも同行した次第だ。

「お兄様、ご自分をそんなに卑下にするのは良くないと思います」

「魔王なんかにはヘレネさんをむぎむぎと殺させるものか！ 者ども、ゆくぞ！」

妹の気遣いを聞き流し、ティエンのテンションがいきなり変わった。腕を振り、兵士達の反応など待たずに颯爽と茂みの奥へ駆けだした。

がさがさがしゃああああ！

「あ、その先は崖になってますが」

「姉様。そういうことは落ちる前に言わないと」

二人の妹は、崖の下へ転落していったティエンに、さしてあわてる風でもなくそう言った。聞こえてはいないだろうが。

兵士達はさすがにどよめき、連携を取って王子の救出に向かった。

「まったく、王子の躁鬱ぶりには毎度手を焼かされますな」

しばらくし、デュークが王子に肩を貸して、茂みの奥から戻ってきた。ほこりと擦り傷だらけのティエンはぐるぐる目を回していたが、突如真顔を取り戻す。

「とまあこのように、ヘレネさんの的確かつ鋭いツッコミがないと、僕はうかつにボケることもできないのだよ。ティアラのツッコミは遅いし、フィルリアは故意にツッコミ入れないし」

「あら、残念です。私では役不足ですか」

あまり残念そうになく、ティアラはおっとりと言う。その隣ではフィルリアがあさっての方を向いて舌を出していた。

＊

ヘレネは少々混乱していた。

目の前にいるのは、カーナ。自前の治療院を持つ治療師で、週に一・二度通院していたから彼女をよく知っている。彼女もヘレネの難儀な体質をよく理解し、親身になって相談に乗ってくれた。

治療師になるには魔導師と治療師の二つの免許が必要だとか、そのために大学に通い、王族と顔見知りになるとも聞いた。

そのカーナが神族の衣装を身にまとい、これまでに会ってきた女神達を後ろに従えている。

ヘレネは混乱した頭で必死にこれまでの経緯を思い返す。

難儀なこの体質を治すために冒険を重ね、秘薬エリクサーなら治せるかもしれないという結論に達した。エリクサーを手に入れるために、錬金術の研究をしているという賢者クーマ氏を訪ね、そこで風神ジーナに出会う。

ジーナは彼女に言った。我々は、あなたの力を必要としている。そのために魔王宮殿まで来てほしい。そこでエリクサーの材料である賢者の石が手に入る、と。

「なんでカーナさんがここにいるんですか？ てゆうか神様？ あたしになにをさせようって言うんですか？ それと賢者の石はどこに？」

一気にまくし立てるヘレネに、カーナは少々鼻白んだ。

「まあ落ち着いて。順を追って説明してあげるから。まずは神話の時代までさかのぼらなくちゃいけないけど……」

神話の時代って、何千年何万年も昔じゃなかったっけ？ そこから順を追ってって、いつまでかかる話だ？

「そんな長話を聞いている時間なんてありません。目的を教えてください」

彼女は少し考え込んだが、ヘレネの要求通り目的から答えた。

その表情は、いたって真摯なものだった。

「そうね、あなたにはこれからあたし達と戦ってほしいの。全力でね」

＊

込み入った樹海を、開けた荒野のように軽快に行き進む老人がいる。小柄な身体と折れ曲がった腰とは対照的に、まっすぐ大きな櫂の杖をしわだらけの手で力強く握りしめている。杖は歩行の補助のための物ではない。大股に歩くその速度は、普通の人よりもずっと速い。

ヘレネを追って樹海を突き進んでいた老人、賢者クーマは開けた景色に足を止めた。崖にも近い段差があったためだ。斜め下方、まだ距離はあるが、半壊した遺跡、魔王宮殿が視界に入るところまで来ていた。

並の冒険者なら別の道を探して下へ降りなければならないが、クーマは賢者の称号を持つほどの大魔導師である。飛翔の魔法などわけではない。

呪文を唱えようと杖を構えるが、人の気配がしたので詠唱を止めた。

「ふん。五神精は悪神ではないからワシらが動くこともない、とか言っておらなんだか？」

しわがれた声で忌々しく、クーマは振り向くことなく後ろの人物へ吐き捨てた。

見ずともわかる。彼の天敵、コネラートだ。

「ヘレネさんは、私の生徒ですからね。それよりもあなたまでがなぜ？」

メッシュの髪をなでながら、教師コネラートはきまりが悪そうにそう答えた。ふん、とクーマは顔をしかめた。

「それを言うなら、あの娘っこはワシの弟子じゃからの」

「そうそう。彼女は私の娘の友人でもあるしな」

「フィルリア様が気かけられていましたし、直接の面識はありませんが私としても気になりますので」

コネラートに意識が集中していたせいで、クーマは続けざまの二つの声に意表をつかれた。いかめしい顔があっけに崩れた。

続いて現れた二人。シュラインの町の領主カールと、大神官ワイオニーだ。

ケインをのぞく、七年前の英雄達が勢揃いしてしまった。

「ヘレネさん！ ヘレネさんはいずこ!？」

がさがさがしゃああああ！

さらに聞こえてきた青年の声とどたばた劇に、クーマは苦笑いをせずにはいられなかった。

「四大英雄と王族と、一〇〇〇人規模の兵士達ときたか。これだけの人員を望まずしても動かすあの娘、本当に不思議なやつじゃ」

\*

いくら真顔で言われようが、いきなり「戦ってくれ」ではこう答えるしかない。

「な、なんでそんなことをしなきゃいけないんですか。理由も聞かずにそんなことできません！」

「だからその理由を説明しようとしてたんじゃない。それをいきなり目的から言えっていうから」

カーナの声が半音下がったが、気の急いでいるヘレネはまるでひるまない。

「ええい、とにかく、要点をまとめて手短かにわかりやすく話してください。余りよけいな時間は食いたくないんです！」

カーナはひたいに手を当てて頭【かぶり】を振る。この仕草は治療師の時と変わらない。

「ああ、もう、注文の多い子ねえ。……まあいいわ。そうね、五王神については知ってるわよね？」

ヘレネはひとつ深呼吸をした。公開教室で習ったことを思い出すために、気を落ち着かせることにしたのだ。ところどころ虫食い穴が開いたように忘れてしまっていて少し悲しくなったが、なんとか一文にまとめてみる。

「えーと、アルマフレア神話における最高神で、この世界の造物主……だったかな？」

「ヘレネさん、端折りすぎですことよ。頭を振ればカラコ口鳴りそうなほどに脳が小さいことですわね」

冷淡に、レイコがしゃしゃり出てきた。さながら講師のように、張りのある声で語り始めた。

「世界は最初、灼熱の炎に包まれていました。

この大地に最初に降り立ったのが、夫婦神、明王エルミタージュと冥王レニングラードです。

灼熱の世界、これを嘆いた夫婦神は、まずは界王シフォンを産み落としました。

界王は世界に大雨を降らせて炎を消し、海を作り上げました。

夫婦は続いて魔王コスミックと霸王カルミアを産みました。

大地をコスミックに、天空をカルミアに与え、シフォンは世界の統治者となりました」

「その後、五王神は八百万【やおよろず】と言われるほどのたくさんの神々を生み、神話の時代を形成するんだ。そして最後に、神族の末裔であるアルマフレア一世に世界の統治権が譲られ、人間の時代となるんだよ」

王家と遠縁にあるというタカマガハラ家のレイコはともかく、レインまでもが妙に神話に詳しかった。なんかヘレネはすごく悲しくなってしまった。

カーナが拍手【かしわで】を三回打った。

「その通り。公開教室等では、確かにそう習うわね。

まあ実際のところ、五王神はこの惑星の生態系を調査しに来た異星出身の科学者なんだけどね。

知的生命がないなどの、神族が移住するに適した環境であることを確認して、その功績から彼らは神としてまつられるようになったのよ」

さて、とカーナは一同を見渡し、教師のような顔を見せた。(ヘレネにとって) 難しい話が、さらに難しくなりそうな予感がした。

「人間には神とあがめられている神族だけど、その五王神を含めて、生態的には人間とほとんど変わらないのよ。では、どこが違うかわかる？」

深く考えるほどのことでもない。ヘレネはすぐに答えた。

「寿命と、魔法などの特殊能力、かな」

「そう。けどね、あたしたち五神精はちょっと特殊でね。魔王【コスミック】が行っていた研究を元に作られた、一種の人造生命【キメラ】なの」

彼女たちは、作られる際に五王神の属性を受けた。属性とは遺伝子のようなもので、それが五王神の娘たるゆえんだという。

「みんなも知っての通り、現在のアルマフレア世界に、神族はほとんどいないわ。

コスミックにより、世界を創造する技術が確立されたためよ。

無の海の中で明滅する極微の宇宙にインフレーションとビッグバンを発生させる理論。

宇宙【せかい】そのものを創造し、神族は去っていった……。

神話にある通り、界王シフォンからアルマフレア一世に統治権をゆだねられ、神族は去っていったけど、一部の物好きはこの世界に残ったわ。

そして、あたしたちはこの世界を見守るよう、五王神から命を受けた……人間にゆだねたこの世界の行く末を見届けたかったんでしょね」

彼女は自分の世界に入ってしまったのか、朗々と話をしている。話の大半は難しく理解しがたい物だったが、ヘレネは黙って聞いていた。

不意に、何を思いだしたのか、カーナは綺麗な顔をわずかにゆがめた。

「人間の時代になり、二六〇〇年あまり。あたしたちは母さんたちと定期的に連絡を取り合ってきたわ。……その連絡が途絶えたのは、何百年前になるかしら」

ヘレネは視界が急に開けたような錯覚を覚えた。今までの話に何の意味があったろう。今のセリフにこそ、彼女の真意が込められていた。

カーナは、ヘレネを強く見つめた。敵対的ににらみつけるのとは違う、真摯な瞳。

「もうわかるわよね？ あたしたちの目的、それは魔王をこの世界へ呼び戻すこと。そしてそのために、異界へ通じる扉を開くこと。

方法は、理屈としては単純よ。時空に穴が開くほどの高密度のエネルギーを発生させればいい。数値的には……そうね、時空ねじれの儀式の約四倍。五神精【あたしたち】とヘレネちゃんがぶつかり合えば可能なはずよ」

「あたしにそんな力はない！」

たまらず、ヘレネは叫んだ。時空ねじれの儀式の四倍？ あれは、国のトップクラスの魔導師が何十人と集まってやる儀式ではないか！

しかし、カーナは冷淡に言い返した。

「いいえ、あるわ。あたしも最初は疑惑だったわ。けど、水神祭や大学での一件を見ていくうちに、それは確信に変わった。あなたには想像を絶する力があるの」

カーナは右手を前へ差し出した。その手のひらに光がともる。

緊迫が走る。ヘレネは後ずさり、ここまで黙って聞いていた男たちがヘレネを守るように身構えた。

しかし、彼女の手から現れたのは一冊の本。攻撃ではなかった。

華美に装飾された一冊の魔導書だった。

静かに、彼女は言った。

「アルマフレア三大禁呪がひとつ、四方破碎陣【テトラ・エクスプロージョン】。これはその写本【レプリカ】だけど、十分な魔力を持つ者なら発動できるわ」

カーナはその魔導書をヘレネへ投げ渡した。後ろに控えていた妹神たちが一步前へ出る。五神精は横一文字に並んだ。

「それじゃあ、始めましょう。魔王をこの世界へ呼び戻すために！」

「おお、カール様にワイオニー様、コネラート様にクーマ様も。このようなところで、奇遇です」

「目的地が同じなら、奇遇も何も無いと思いますけど」

ティエンの少々場違いな挨拶は、フィルリアのぴしゃりとしたツッコミでさえぎられた。

王子ティエン率いる親衛隊と、かつての英雄たちが先ほど合流したところだ。

「あなた達がともにきてくだされば大変心強い。さあ行きましょう！ 僕にはヘレネさんになんとしても伝えなければならないことがあるんです」

「まあお兄様、ヘレネさんについてプロポーズでも？」

口を丸くして問う妹に、ティエンはにやりとした笑みだけを返して見せた。

と、兵士たちが急にざわめき始めた。

「なんだ？」

「急に暗く……」

わずかな光源となっている木々の隙間からの木漏れ日が極端に少なくなっている。元から暗い樹海が、ほとんど夜のようだ。

「おい、あれ！」

声を上げたのは兵士の誰だったか。見上げると、そこにあるべきはずの太陽に異変が起こっていた。

みるみる光が弱くなり、肉眼でも太陽が月のように細くなっていくのがわかる。そして一瞬光は全て消え、やがて鮮やかな青白い光の冠を携えた黒い太陽となった。

これは、皆既日食だ。

「クーマ様、これはいったい……？」

王子が不安げに賢者に聞いた。クーマはいかつい顔をさらにゆがめ、コロナを取り巻く太陽を見上げていた。

「ワシにもわからん。今日は確かに新月ではあるが……日食にはならないはずじゃ」

「クーマさん、感じませんか？ 魔王宮殿からです」

「……！」

コネラートの指摘に、クーマは気づいた。

途方もない魔力が、魔王宮殿から流れてきている。

「月の軌道をずらすほどの魔力……いったいあそこで何が起きているというのじゃ!？」

「どうしたのヘレネちゃん！ 逃げ回ってないでその魔法を唱えなさい！」

五神精はそれぞれ軽快に動き、ヘレネたちを軽くこづき回っている。ヘレネは身構え、かがみ、そして走って逃げもするが、しょせんは魔法使い見習いの一般人。攻撃のことごとくをまともに受けている。

しかし、ダメージはほとんど無い。彼女たちの目的はヘレネに呪文を唱えさせることにある。倒すことではないからだ。

「うおのれ、乙女にひどい仕打ちを。このアスタリスクが成敗してくれる！」

正義のマントをはためかせ、アスタリスクがヘレネを守るように立ちはだかった。

腰を落とし、右手を前に、左手を右の二の腕に、左足を後ろへ滑らせながら、右手は弧を描く。

訳のわからないポーズを決めながら、今までにない気合いを入れていた。なんだか背中に炎を宿しているようだった。

「今こそ我が真の力を見せるとき！ へん～～しん！」

「とおっ！」

どぎゃあんっ！ アスタリスクの側頭部に、巨漢ハイフンの腕十字体当たり【クロスバーン・アタック】が炸裂した！

「貴様、いきなりなにをするか！」

「今の見せ場はお前じゃない！ ヘレネちゃん、俺の活躍を見てくれ！」

「脇役はすっこんでろ！」

アスタリスクとハイフンのとっくみあいの中、コロンは冷め切っていた。

「あたしはほとんど部外者だからねえ。見学させてもらうよ」

「姉ちゃん、それは違うぞ。悪として！ 売られた喧嘩は買わねばならぬはず！ そういうわけで俺も行くぞお！」

「そっちかい!？」

アスタリスク対ハイフンに割って入るチルダに、コロンが叫んだ。

「地裂蛇咬斬【サーペント・バイト】。」

「のひょおおお!？」

どっごおん！ カーナの撃った地を這う衝撃波が、アホどもをまとめて吹っ飛ばした。

カーナはいらいらしているようだった。目つき鋭くヘレネをにらみつけた。

「そろそろこのぐらいの本気を出すわよ。死にたくなかったら呪文を唱えなさい！」

「いやよ！」

負けじとヘレネは言い返した。

「あたしにはあなた達と戦う理由はないもの」

「理由？ あるじゃない」

カーナは懐からひとつの石を取り出した。いや、石というよりは宝石だ。薄暗い、この魔王宮殿前の広場で、それは輝いているようにも見えた。

「万物の根元、アルカエスト。他の全ての物質は、アルカエストが『完全性』を落として変化したものとされる。

そのアルカエストを、錬金術師達はこう呼ぶ。すなわち『賢者の石』と」

教師のように、カーナは語る。宝石は不意にまばゆい光を放ち、小瓶に姿を変えた。小瓶の中には透明な液体が入っていた。

「そして、賢者の石【アルカエスト】を聖水に溶かした物が、生命の秘薬エリクサー。

これが成功報酬よ。ヘレネちゃん、あなたはこれをノドから手が出るほどに欲しがってたわよね？」

エリクサー。ヘレネのこの旅の最終目的である。正直、ヘレネは迷った。この手に握られた魔導書を唱えればいだけだ。しかしそれは、魔王を復活させることに他ならない。

「でも、やっぱり魔王を復活させるなんて……」

「ヘレネちゃん」

カーナは言った。

「あなたならわかるでしょう？ 親に会いたいという、あたし達の気持ちが！」

気持ちがぐらついていた。魔王といえども、彼女たちの母親だ。

両親を失ったヘレネには、彼女たちの気持ちは痛いほどよくわかる。

めまいを起こしそうなほどに悩んでいると、アスタリスクがぼんとヘレネの肩をたたいた。マスク越しで表情はわからないが、妙に悟ったふうであった。

「乙女よ、同じ正義の味方としてあなたの葛藤、よくわかりますぞ！」

「あたしは正義の味方じゃなあい！」

「ようこそ悪の世界へ！」

「それも違う！」

両手を広げて歓迎する三悪人に、びしっとヘレネは突っ込んだ。

ヘレネはひとつ息を吐いた。まったくアホな連中だが、血の上ったヘレネの頭を冷まさせる役には立った。

レインへ向き、ヘレネは聞いた。

「魔王は良い人なの？」

「悪い人なわけじゃない！」

「あなた達はそう答えるに決まってるからレインに聞いているのよ！」

ぴしゃりと言い伏せるヘレネに、五神精は押し黙るをえなかった。

レインは少し考えていたようだ。だが相変わらず落ち着いた調子で、ヘレネのように取り乱してはいない。

「うーん、神話では『良い人』を印象づけるような話はあまり無いかな。どちらかという、魔王の力の強大さを強調した話が多いね。たとえば霸王カルミアとの戦争では、魔王の斬撃が大陸を裂き、アルマフレア列島を作ったとされてるし。魔王にたてつく竜族一〇万の軍勢を七時間で殲滅させたという、通称七時間戦争の逸話もあるね」

カーナの声は少しうわずっていた。

「そ、その伝説に嘘はないし、世界創造の実験の際にいくつかの世界を消滅させたこともあるけど、母さん

はちゃんと良識のある人よ」

世界が消滅する？

この一文は声に出ていたのだろうか。焦ってカーナが手を横に振った。

「違う！ 母さんには確かにそれだけの力がある。けど、理由もなくそんなことはしない！」

ある意味カーナは正直者だ。だがその台詞が、彼女の目的には逆効果だった。ヘレネは頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。

「やっぱりだめ！ あたしはあなた達と戦わないし戦えないし戦いたくない！」

魔王復活の手助けなんかできない。がんとして、ヘレネは受け付けなかった。

カーナは悲しそうだった。涙を流してさえた。だが、その声はひどく冷徹なものになっていった。

「仕方ないわね。これだけはしたくなかったけど……。ヘレネちゃん」

呼ばれ、ヘレネは顔を上げた。カーナはヘレネを指さしていた。

「あなたを追い込む」

その指先に光がともる。戦慄がヘレネの背中を泡立てた。

地神カーナから放たれた一条の光線は、しかしヘレネの脇をかすめただけだった。

……どうっ。

鈍い音。振り返ったヘレネの思考が止まる。

「レイン様！ いやああ！」

レイコの叫び声は、ヘレネの耳には届かなかった。

レインが倒れていた。

自分だけ世界から切り離されたような気分だった。演劇でも見ているようだ。頭がぐらぐらして、考えがまとまらない。

レインが殺されたという目の前の事実だけが、ヘレネを浸食していった。

「何考えてるんだ！」

火神ターナが姉神にかみついた。

「母さんがいつも言ってたろ。どんな目的だろうと、人を殺めていい道理なんてないって！ そりゃあ母さんは言ってることとやってることにしょっちゅう矛盾があるけど、この言葉に嘘偽りは……」

ヘレネを凝視したままのカーナに、ターナは台詞を最後まで続けられなかった。

カーナの額には汗がにじんでいる。

彼女も、必死なのだ。

混乱しているのか、ヘレネは青い顔のままほうけてしまっている。感情を抑えた声で、カーナは彼女へ言った。

「ヘレネちゃん、聞こえる？ 彼はまだ死んではいないわよ。けどかなり危険な状態なのも確かね。彼を助けたければ、エリクサーを飲ませるしかない」

ヘレネはカーナに飛びついた。しかしカーナは軽くかわす。手のひらにあったエリクサーは、手を握ると手品のように消えてしまった。

「これでエリクサーは、あたし達を倒して手に入れるしかない。

さあ、どうするのヘレネちゃん！ 世界のために仲間を見捨てるのがあなたの正義？」

ヘレネの心は、この魔王宮殿にはなかった。ヘレネは、幼き日の自分を思い返していた。

七年前の戦争、幼き頃の自分。



町の外はろくに整備されてないし、夜には魔物も出るという。ヘレネは幼い足を必死に動かし、アルマフレア城を目指して歩いていた。

戦争が始まった？ お父さんお母さんが仕事で行ったお城が襲撃された？

お父さんお母さんが死んだなんて嘘だ。この目で確かめない限り、絶対にそんなの信じない！

荒れた道に転がる石につまずき、転んだ。ひとしきり泣くが、涙と鼻水を振り払ってヘレネは立ち上がった。

「もう帰ろうよ」

男の子の声がした。だがヘレネはその声の方へは向かなかった。

「あんたはもう帰りなさいよ」

おどおどしていた男の子。ヘレネの幼なじみ、レインだ。

レインは不安そうだが、はっきりと言った。

「ヘレネをおいてそんなことできないよ！ だって僕は……」

ぼやけていた視界が急に開けた。病み上がりの朝のように、ヘレネの頭はすっきりと晴れ上がっていた。

そうか、あたしは……。

ヘレネは気づいた。レインへの気持ちに。

レインは倒れたまま動かない。レイコが泣きわめいて助け起こそうとするが、下手に動かしては危ないとアルツに羽交い締められている。

他の者たちは、どうしたらいいのかわからずにあたふたしているだけだった。

レインはいつもヘレネのそばにいた。

七年前の時だって、今回だって、当たり前のようについてきた。

そのレインが死ぬ？ いなくなる？ あたしのこの傍らから、消え去る？

冗談じゃない！

ヘレネは立ち上がった。

「やる気になった？」

少々わざとらしく、カーナは不敵に言った。しかしその顔に驚きの色が混じる。

雰囲気が変わった。ヘレネに迷いはない。瞳に宿るは決意の光。

静かに、ヘレネは言った。

「あたし、レインが好きよ」

あたりが静まりかえった。ヘレネは魔導書を両手で持ち、前へ構える。

「だから、レインの命……あなた達なんかに奪わせない！」

魔導書が輝きだした。ヘレネは勢いよくその魔導書を開く！

そして、世界が消えた。

一瞬だれもがそう思った。

何も見えない。何も聞こえない。いきなり音が無くなれば耳鳴りのひとつもしそうなものだが、それすらも感じない。

ヘレネは魔法に失敗した。誰もがそう思った。彼女は誰よりも魔法を失敗する魔法使いじゃないか！  
パニックを起こしたのかそれとも全てをあきらめたのか。そんな中、この無の世界にわずかな変化があることに気づいた。

完全な闇ではない。完全な無ではない。ほんの少しだが、闇は揺らいでいた。

鼓動のような、ゆりかごのような落ち着いた揺らぎ。

恐怖の中の安堵。不安の中の安らぎ。暗闇の中の光明。絶望の中の希望。

いや、もっと根本的な何かがすべてを包括しているような感じ。

「これは、始まりの混沌？」

最初に声を上げたのはカーナだろう。声につられるように、闇の中に五人の女性、五神精が姿を取り戻した。

「始まりの混沌ってなになの？」

風神ジーナの問いに、カーナは答えた。

「神族にとっても神話となるべき時代の話よ。」

世界ははじめ、混沌に包まれていた。

その混沌を晴れ上がらせたのが、神王七代【しんおうしちだい】と呼ばれる伝説の神々。煮えたぎる大地に五王神が降り立つよりも遙かに以前の、神族にとっても神話となるべき時代。

五王神【かあさんたち】は元々は異星人だから、当然祖先が存在するわ。けどそんな時代を知る者がいるはずもない。明らかにされているのは、明王・冥王の祖先となる神王七代の存在のみ。烈神王【テラ・クエイド】や月神王【セカンド・ルナ】等、七代十神いるそうだけど、人間の神話には名前しか登場しないわね！  
ターナはいらだっているようだった。

「だからなんでそんなものが、ここに再現されるわけ？」

「落ち着いて。これは一種の幻影よ」

「落ち着いていられるかい！ 幻影だとしても、あたいたちにそんな物を見せるなんて、いやそれ以前になんてあの小娘にあたいたちも知らない時代を見せることが……！」

叫ぶ途中でターナは気づいた。

「まさか、あの小娘……」

ヘレネもまた、姿を取り戻していた。いや、最初から消えてなどいなかった。今もなお、朗々と魔導書を読み続けていた。

「ヘレネちゃんが『始まりの混沌』を知っているとは思えないけど……」

その時代を知っている者とのつながりがあるという可能性。そしてその『つながり』が覚醒しつつあるという可能性。

すべては可能性でしかない。だが――

カーナは嬉しそうに声を荒らげた。

「まったくあなたって子は、あたしの想像のことごとく先を行ってくれるわね！」

カーナはヘレネを誤診した。

最初は、ヘレネの体質は魔法の失敗によるホルモン異常だと診察した。だが、仮にも神族である自分が彼女の体質に引っかかるはずなどないではないか。

それで、次は召喚士であるという仮説だ。しかしこれも違うようだった。人間としては、魔力が桁外れすぎた。

カーナは、ヘレネは神族であると考えた。だがその説も完全ではなかった。彼女はもっと奥深く、彼女はもっと根源に関わるというのか！

「けど、ヘレネちゃん。あなたが何者であろうとも、その魔法は簡単には発動できないわよ。あなたに、仲間を統率できるだけの魅力【カリスマ】はあるのかしら？ 神として、王としての資質よ！」

挑戦的に、カーナは言う。その声はヘレネにも聞こえていた。

魔導書を読み進めるうち、その全貌がわかってきた。この魔法はヘレネ個人の力だけでは完成しない。仲間四人の心を一致させて初めて発動するのだ。

ヘレネはそのための方法を思いついていたが、なかなか踏ん切りがつかなかった。その間にも呪文は唱え続けている。迷っている時間はない。

男たちは、ようやく我を取り戻したところだった。闇の中に浮かび上がったヘレネの姿は、世界の終わりに現れた女神然としていた。

「う、美しい……」

「お持ち帰りしたい……」

「貴様あぁー！ 美しき乙女に対して、なんたる不埒な考えを！」

「なにおう！ 美女を独り占めしたいというのは男してまっとうな欲望ではないか！」

「彼女を愚弄する者はこのアスタリスクが許さん！」

「悪として参加するぞ！」

「お嬢様お許してください！ あるじに仕える身でありながらこのアルツ、ヘレネ殿に恋をしてしまいました！」

アスタリスク・ハイフン・チルダ・アルツと、おのおの自分勝手なことを言いまくり、勝手し放題である。そんな野郎どもへ、ヘレネは大きな声をかけた。

「みんな、こっちを見て！」

今度は時間が止まった。

振り向いた男どもの視界に入ったヘレネの姿。

上着を脱ぎ捨て、下着姿だった。白いブラとパンツが目にもまぶしい。

あ、ちなみにカメラアングルは後ろからなので念のため。

四人の野郎どもが硬直して、しばし。

どおんっ！

激しい地鳴り。音が戻り闇が消え、世界が完全に姿を取り戻した。

ヘレネは見事、仲間の心を一致させた。いや、変態どものスケベ心をがっちり掌握したと言うべきか。

ヘレネを中心、四人を各頂点として斜め倒しの光の立方体が発生する。

「ヘレネちゃん好っきじゃあぁあぁあぁ！」

各頂点から、四人が一斉にヘレネに飛びかかった。

うおあぁ！

光が急激にふくれあがる。変態どもはその光圧で空高く吹き飛ばされた。

「やっぱりこうなるのねええええええ！」

カーナは額に手を当てて、哄笑をあげていた。

「見事よ、ヘレネちゃん！ まったく、あなたらしいやり方だわ。こうまで見事に仲間の心を一致させるなんてね！」

腹を抱えんがばかりに笑っていたカーナが、心と真顔を取り戻した。妹神たちも表情を引き締める。光が収まると、変貌を遂げたヘレネがいた。



下着というよりは、白い水着姿。

少し背が伸びただろうか？ 一四歳のあどけなさはなかった。大人びたりりしい顔立ち。

一番の変化は、背に生えた大きく真っ白な翼。

その、まさに天使のような姿は、この場にいた全ての者を陶醉させた。

ヘレネは構えをとった。途端にカーナが我を取り戻す。

「みんな、おなかに力を込めていくわよ。ちょっとでも気を抜いたら、こっちが消し飛ぶわよ！」

「わかってるよ！ あたいたって母さんに会わずに死にたかないからね！」

四方破碎陣【テトラ・エクスプロージョン】という魔法名から、カーナはこれを結界内破壊か全方位爆撃の効果だと予想していた。

だがそれは違った。エネルギー密度では城塞裂壊弾【キャッスル・マッシャー】をしのぐ、対個体用最強攻撃魔法だ。あの姿から予測される攻撃は——格闘！

るおおおおお！

低い咆哮から甲高い咆哮まで、五神精の雄叫びが重なった。

彼女たちの肢体が輝き、獣形態に姿が変わる。

白猫兎【カーバンクル】、水神ニーナ。

天翔馬【ペガサス】、風神ジーナ。

一角獣【ユニコーン】、雷神ヴィーナ。

不死鳥【フェニックス】、火神ターナ。

そして、大黒豹【フェンリル】、地神カーナ。

獣と化しても、彼女たちの雄叫びはなお続く。その身体が再び輝き出す。

それぞれ、青・銀・金・赤・黒の光の玉となる。

ヘレネは落ち着いていた。いや、すでに人としての意識はないのか。静かに彼女たちの変貌を見つめている。

五つの光がヘレネを取り囲む。

ヘレネは翼をひとつはためかせ、黒い光——カーナへ向かって駆けだした。

その姿は、さながら飛び立つために水面を駆ける白鳥のようだ。

カーナは正面から立ち向かい、ほかの四人はヘレネを取り囲むように襲いかかった。

\*

ティエンたち一行は、魔王宮殿を見下ろせる崖の上まできていた。この絶壁を降りれば、ようやくヘレネに合流できる。

魔王宮殿から巨大な光の柱が天へ向かって走っていったのはちょうどそのときのことだ。

「おお……」

兵士たちがざわめく。

雲を突き抜け、光の柱は太陽に向かって昇っていくようにも見えた。

その皆既日食中の太陽がゆがむ。そこに何かとてつもなく恐ろしい物でもあるかのように、太陽が二つに裂けた。

まさに、筆舌に絶するすさまじい光景だった。

「なんということじゃ……」

クーマにはこの現象の意味がわかっていた。

天空のあの場所には巨大な重力源があるのだ。その重力レンズの効果で、ゆがんだ二重の黒太陽と化し

たのだ。

空間に穴を開けるほどの巨大な重力。

異界への扉が今、開かれた。

## エピローグ

---

……………。

「……さん！ ヘレネさん！」

誰かに揺り動かされている。姉に朝起こされる時、ヘレネは決まってそれを振り払う。いつものように腕を払い――

めりっ。

「うごお!？」

こぶしに鈍い感触。思わずヘレネは飛び起きた。

「あ、あなたはわたくしに何か恨みでもあるわけでした!？」

ありまくりです。

鼻を押さえて詰め寄るレイコにヘレネはそう思ったが、とりあえず黙っておくことにした。

「あー、やれやれ。一時はどうなるかと思ったよ」

続いて現れたのは、濃いめの美貌の悪人コロソ。あちこちすすけてはいるが、無事のようにだ。

ヘレネはあたりを見回し、空を見上げギョツとした。

元々半壊していた魔王宮殿だが、それがさらに傾いてしまっている。空はどんよりと暗く、ゆがんだ太陽が二つある。

「い、いったいなになが……!？」

「忘れちゃったのかい？ あんた、女神に変身してあの五人と戦ってたんだよ」

なんじゃそりゃ。とツッコミたかったが、そういう雰囲気ではない。

周囲には、何人か人が倒れている。

カニさんのポーズで仰向けに倒れたアスタリスク、お尻を突き出してうつぶせに突っ伏したチルダなど、ことごとく失神中のようにだが、全員生きてはいるようだった。

「ほら、ヘレネさん。これを」

しかめっ面のレイコが、ヘレネに布地の固まりを手渡した。広げてみると、ヘレネが着ていた服だった。

そうだ。男どもの精神一致のために脱いだんだっけ。男たちが目を覚ます前にと、ヘレネはあわてて着込む。

「さあヘレネさん、そのエリクサーを早く！」

「え？」

いつの間にやら、ヘレネの手にはエリクサーの入った小瓶が握られていた。

「わたくし、それを奪い取ろうともとい、ひとまずレイン様に飲ませなければと思ったのですが、バケモノじみた握力でなにがなんでも手放さないで、起こして差し上げましたことよ」

恩着せがましいレイコのセリフは無視。ヘレネはレインの倒れた姿を確認し、小走りに駆け寄る。

血は止まっているようだが、レインはぐったりとしていた。上体を起こし、小瓶の口を開ける。

「気を失っているところに注ぎ込んで、こぼしちゃわないかな？」

量的に、一回分しかない。これをしくじったら万事休すだ。

ぱあっと明るい表情で、レイコが声を張り上げた。

「そうなるとやはり口移しですわね！」

「やめんかあっ！」

口をタコにしてレインに迫るレイコを、襟首つかんでヘレネは力一杯引っ張る。



「あなた、このままではレイン様が死んでしまいますことよ！ 生き返らせるに美女の口づけが必要なのは物理的に当然の展開！」

「あんたそもそもエリクサーを含んでないでしょうが！」

「あの一」

ずざざあっ！ 申し訳なさそうに手を挙げるレインに、どたばた劇中のレイコ&ヘレネは驚いて飛び退いた。

「あ、あんた目え覚ましてたの!？」

「うん。ていうか、最初から死んでなかったし」

レインは怪我ひとつしていなかった。カーナの必死の様に、彼女の言うとおりに死んだふりをしていただけという。

「そ、それじゃあまさかあの台詞……」

「うん、聞いてた。僕もヘレネが好きだよ」

あゝあゝあゝあゝあゝ！ 頭を抱えてしゃがみ込む。顔から火が噴き出してはいないかと、ヘレネはほおをさすった。かなりの熱を帯びているようだった。

泣きそうに、レイコがレインに詰め寄った。

「そ、それではわたくしのことは嫌いだと？」

「ううん、レイコさんも嫌いじゃないよ」

「オッケー！ ならまだまだ逆転の可能性はあるということですわね！」

ゆがんだ太陽を見上げ、ガッツポーズを決めるレイコ。

「あ、あんたには節操一つもんがないんかい！ レインも中途半端な態度をするんじゃないわよ！」

「んまあ、レイン様を悪く言うのは私が許しませんことよ！」

「なによ!？」

「やりまして!？」

またしても、ぎゃーぎゃー騒ぎ出す二人の少女。

「ありがとう——」

そこへ、上空から女性の声が響き渡った。

見上げると、カーナを始め五神精が、ゆがんだ黒太陽——いや、異界への扉の周囲に勢揃いしていた。アルマフレアの民族衣装に身を包み、人間形態に姿を戻していた。

その表情はとても穏やかで、つい先ほどまで死闘を演じていた相手とは思えない。

「ありがとう、ヘレネちゃん。約束通り、エリクサーはあなたの物よ」

はっとして気づいた。うっかりレインに飲ませかけていたが、エリクサーはまだヘレネの手元にあった。

これで、これで元の体質に戻れるのね！

「けど、たぶんそれを飲んでも体質は治らないわよ」

高揚しかかっていた気分が一気にどん底に落とされた。

「な、なんで？」

にっこりと、カーナは言った。

「それこそがあなたの魅力【カリスマ】だからよ。しいて言えば生まれつきのもので、それで正常。だから治りませーん」

乙女チックに笑顔で言われても困る。

「あ、あたしの今までの苦労は!？」

目の前にちゃぶ台があればひっくり返したい気分だった。これまでの数々の苦労はいったい何だったっ

てえの!?

「さて、そろそろお別れね」

「え、なんで？」

カーナたちは異界への扉を感慨深げに見上げていた。

この戦いで作られた、魔王降臨のための扉。

しかし、魔王が来る気配はなかった。

ヘレネにとっては一安心だが、彼女たちにとっては悲しいことだろう。

「無理に開けた扉だから、すぐに閉じるわ。母さんがこちらに来ないということは、来たくないか、もしくはこれない理由があるということ。だから、あたし達の方から行かなきゃ」

治療院等、カーナにはたくさん世話になったし、今となっては女神達にも親しみを感じる。いきなりお別れでは名残惜しい。

しかし、彼女たちの母に会いたいという気持ちをヘレネはよく理解していた。だから、笑顔で送ることにした。

「また、逢えるよね？」

カーナも笑顔で答えた。治療師のときと同じ笑顔だ。

「ええ、あなたが望むのなら。それじゃあ、またね！」

「ふん、またな」

「またなの！」

「なー！」

「にー！」

五人それぞれの最後の挨拶。

女神たちは扉の中へ消えていき、扉そのものも縮小していく。

扉は消え、太陽はひとつに戻る。

数秒間のダイヤモンドリング。空の明るさが取り戻されていく。皆既日食も終わりを告げたようだ。

\*

巨大な重力は時空をゆがめ、ブラックホールと呼ばれる重力の落とし穴になる。しかしそれで終わりではない。ワームホールと呼ばれる時空のトンネルを通過して、別の宇宙につながっているのだ。

ワームホールの中では普通の物質は重力で引きちぎられて存在できない。五神精は、ヘレネとの戦いで見せた光の固まりになって、ワームホール内を進んでいた。

「結局さあ、あのヘレネって小娘、何者だったんだい？」

赤い光、ターナがあきれたように聞いた。

あの戦いでわかったこと。とりあえずヘレネは自分たちの理解の外側にいることだけだった。

しれっとした調子でカーナが答えた。

「わからいわ」

「わかならいって……」

「だから、それも含めて母さんに会いに行くのよ。あたしにはわからなくても、母さんならわかるかもしれない」

「問題先送りだねえ。まあいいけどね」

肩をすくめ（今はエネルギーの固まりなので肩は無いが）、ターナはため息をついた。

「けど、彼女の魔法が暴走する理由は説明できるわよ」

ヘレネの魔法が暴走する理由。

細いホースに滝のような水圧をかけたらどうなるか？ まともに水を出すことはできまい。

同様に、低レベルの魔法をとんでもない魔力で放とうとしたらどうなるだろうか？

それが、ヘレネの暴走魔法である。

ヘレネは魔法使い見習いである。ゆえに、魔力をうまくコントロールできない。

初級魔法使いなら魔力そのものが小さいのが本来だが、どういうわけかヘレネの魔力は途方もない物だった。

それゆえの暴走だったわけだが、もしもその魔力に見合った魔法だったらどうか？ ヘレネが禁呪しか使えない理由がここにある。

五神精が強制召喚されたのも、ヘレネの失敗魔法が、彼女たちの属性と重なったためである。

「なー！」

「にー！」

「ヘレネちゃんは、お母様にすごく似ているってヴィーナちゃんとニーナちゃんは言ってるの」

「別に訳さなくてもわかるよ」

ターナのツッコミを受け流し、カーナはおかしそうにくすくす笑っていた。

「だからあたしたちみんなが彼女に惹かれたのよね。本当に不思議な娘だったわ。」

さあ、そろそろ特異点が近いわよ。これをよけないとあたしたちでも生きてはいられないから注意しなさい」

「ああ、わかってる」

「それじゃあ行きましょう。お母様はもうすぐそこよ！」

その先には真っ白な光の渦が広がっている。

母たちの住む世界を目指し、五神精は渦の中へと消えていった。

＊

アルマフレア世界そのものを揺るがす一大事件は、何とか収束しつつあった。

レインは無事だったし、気絶していた男どももようやく目を覚ましたようだ。

見回すと、異常事態に気づいたのか、城からたくさんの兵士も駆けつけているようだった。

目を覚ました男たちはヘレネを取り囲み、互いの無事を喜び合っていた。

いや、先ほどのヘレネの戦いっぷりに、妙に盛り上がっているようだ。

「ヘレネ殿のカリスマをもってすれば、六方破碎陣【ヘクサ・エクスプロージョン】や八方破碎陣【オクタ・エクスプロージョン】、いやいや十方破碎陣【デスタ・エクスプロージョン】ですら可能なのではないか？」

「おお、そうなれば烈神王【テラ・クエイド】だろうが月神王【セカンド・ルナ】だろうが、もはや敵ではないな！」

「できるかあああああ！」

たまらず、ヘレネは叫んだ。

四人の心を一致させるために、ヘレネは一肌ならぬ一衣装を脱いだのだ。これ以上、どんなサービスをしろというのだ？

ふう。ヘレネはひとつ息をついた。

「結局、体質は治らずじまいか」

なんだかもうどうでもよくなってきた。カーナの言うとおりのこの体質が先天性のものなら、治しようがないわけだし。だましだましつきあっていくしかないのだろう。

「けどさ、もう無理に治す必要なんか無いんじゃないのかい？」

と、コロンがそう指摘した。

「どういうこと？」

「だってあんたにはもうボーイフレンドがいるわけだろ？」

にべもないコロンの台詞に、ヘレネはまた顔が熱くなってきた。

レインにヘレネの体質が効かない理由。最初からヘレネが好きだったからに他ならない。

ヘレネとレインは相思相愛。つまりヘレネにはボーイフレンドがいるわけで。

「もてるもてないにこだわる必要なんかもう無いんだから、無理に体質を治すこともないわけだな、こりゃ」  
べべん、とリュートでも奏するようなポーズでコロンはヘレネをちゃかす。

「ヘレネさん！ 僕がいることを忘れてはいけない！」

そこへ、王子ティエンが登場した。崖の上で、多数の親衛隊を従えている。以前に見た根暗なハンサムというイメージはなく、実に生き生きとしていた。彼もヘレネの無事を喜んでいるのだろうか。

「ヘレネさん！ この日のために徹夜で練習した僕の愛のパフォーマンスを見てくれ！」

ちゃっちゃっちゃ♪ と軽快な音楽が流れ、親衛隊が組体操を始めた。サーカス顔負けの見事な演技だ。十数人の人型文字で、アイ・ラブ・ユーを表現しているようだった。

じゃじゃん！ と締め音に合わせて兵士たちは一列に並び、ヘレネに向かって敬礼した。

自信満々に、ティエンは言った。

「どうですか！ 僕の努力は伝わりましたか!？」

「努力したのはあんたじゃないでしょう!？」

びしいっ！ としたヘレネのツッコミに、ティエンは至福の笑顔を浮かべた。

「そうです！ そのツッコミが欲しかったんです！ ヘレネさん、やっぱりあなたは僕に必要な女性だ！」

ティエンは後ろに控えた兵士たちに指令を出す。

「さあ皆の者！ 彼女にこのウェディングドレスをお届けして差し上げろ！」

「おおおー——！」

とき声を上げ、兵士たちは次々と崖から滑り降りてきた。

「愛の深さなら俺だって負けないぞ！」

「なんのなんの、愛の大きさなら私が一番だ！」

アスタリスクにハイフンと、堰を切ったように次々と、変態どもがヘレネに言い寄ってくる。

そしてヘレネは走り出す。

変態どものいない世界を目指して。

「やっぱりこんなのイヤあああああ！ こんな体質絶対治すうううううう！」

取り残されたレイコとコロン、そしてレインは苦笑しながらことの成り行きを見守っている。  
「やれやれ。さっきまでのあの神々しさは、いったいどこへ行っちゃまったのやら」  
「けど、あれが一番ヘレネらしいよ」  
「そうですわね。ドジでマヌケでツッコミ魔でレベルゼロな魔法使い。それこそがヘレネさんの正体ですわね！」

ヘレネの憂鬱は終わらない。  
なぜならそれこそが彼女の生き甲斐なのだから。  
「そんなわけあるかあああああ！」  
謎の叫び声と変態どもを背に、ヘレネの姿は樹海の中へと消えていった。

ヘレネの憂鬱 ー西の遺跡の五神精ー  
<http://p.booklog.jp/book/65187>

著者：舞沢栄

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sakae-m/profile>

感想はこちらのコメントへ  
<http://p.booklog.jp/book/65187>

ブックログ本棚へ入れる  
<http://booklog.jp/item/3/65187>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ